
サイコキネシス ～超能力の科学的研究～

Tomo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイコキネシス ～超能力の科学的研究～

【Nコード】

N6829V

【作者名】

Tommo

【あらすじ】

太平洋深海から見つかったオリハルコンという金属は、精神エネルギー（オーラ）を物理エネルギーに変換する力を持っていた。特にオーラが強いということで選ばれた4人の高校生は、機密保持契約を結んで国立研究所での実験に参加する。

「この話は超能力SFですが、超能力の使い方が分かっている人が誰も出て来ません。超能力や魔法魔術が発見されたあとの近未来という設定はよく見かけますが、この話のテーマは、超能力が発見

された時の紆余曲折そのものです。登場人物たちが手探りで超能力について科学的に研究していき、最後には超能力の使い方を会得するのが目標です。

「バトル要素はありません。悪霊退治をしますが、あくまでも科学的な現象を沈静化させるだけです。恋愛要素はあります。登場人物の心理面が物語の重要な要素になります。お色気は皆無です。」

#1 プロローグ

都内としては緑の多い上り坂を、ゆっくりと登っていくバスの窓から外を見ながら、佐藤は、不安と期待が入り交じった気持ちを感じていた。バスは、混んでいる程ではないものの、席の半分が埋まるくらいの人が乗っていたが、坂を登るにつれて1人また1人と減っていき、最後には自分と同年くらいの女子が1人、バスの前方の席に座っているだけになった。

「あの子も同じかな。」後ろ姿なので、こちらからは表情を見ることができないが、逆に向こうからもこちらを見ることはできないので、つい無意識にじつと見つめてしまっていた。その時、不意にバスが停車してドアが開き、女子が立ち上がった。完全に気を抜いていたせいで、目を逸らし損ねて目が合ってしまった。慌てて目をそらす。ドアが閉まってバスが動き始めて、ふと気づいた。さっきのバス停が目的地なのだった。

上り坂を全力疾走するのは帰宅部の高校生にはかなりつらいが、逆向きのバスを待つだけの時間はなかった。「何が嬉しくて、こんな山の上に建物を建てたんだ」と、心のなかで建物に八つ当たりしているうちに、建物の正門が見えてくる。どうやら間に合ったみたいだ。荒い息を抑えながら、受付で氏名と目的を伝えると、受付の向かいのソファで待つようにと言われた。

ふと振り返ると、同年くらいの男子1人と女子2人が、指示されたソファに座っていた。その内の女子の1人はさっきバスで一緒だった子だった。思わず目があって、「あれ、さっきの」と言われたので、思わず恥ずかしくなって目を逸らしたところに、若い女性が1人立っていた。

#1 プロローグ（後書き）

平家物語も途中ですが、思いついたので書き始めてみました。不定期にのんびりと書き進めていくと思います。

twitterで更新情報を配信しています。

更新情報を受け取るには、「@tomoi61382」をフォローしてください。

<http://twitter.com/tomoi61382>

#2 サイコキネシス

「こんにちは。全員揃ったみたいですね。じゃあ、ついてきてください」と言つて、その女性は歩き出した。その後を追つて、男子2人、女子2人が後をついていく。そのまま会議室らしいところに入ると、女性は椅子に座るように言つて、自分も椅子に座った。机は、学校の会議室にあるような長机だが、四角く囲むように並べられていた。佐藤は、女性の正面は避けつつ少し離れた位置に座る。他の3人もめいめい適当な席に座る。

「あらためて、こんにちは。私は、金子美咲かねこみさきと言います。この研究所の研究員で、皆さんの実験を担当しています。実験の件でも、それ以外のことでも、何かわからないことや困ったことがあったら、何でも相談してください。よろしくお願いします。」金子と名乗った女性はそう言つと、4通の大きな封筒を取り出して、1人1人に封筒を配った。

「ところで、みんなはどのくらいまで、話は聞いているんですか？」と聞いて、4人を見て、近くに座った男子に目で促すと、その男子は「何かの実験に協力するために、週何回かこちらに来るといふ話は聞いていますが」と答えた。実際、佐藤もその程度の事しか聞いていなかった。金子は、「じゃあ、1から説明したほうがいいのかな」と言つて、これから彼らがどういう実験に協力することになるのか説明し始めた。

.....

「サイコキネシス。」超能力と呼ばれる力の中で、知覚に関連するものをESPと呼び、操作に関連するものをサイコキネシスと呼

ぶ。とはいえ、想像上の世界を越えて、実際の自然現象としてこれらが観測されることはなかった。わずか10年前までは。

10年前、太平洋の深海の海底で見つかった銅鉱石は、当初は誰の関心も集めなかった。ところが、調査を進めるうちに不思議な性質が見つかった。化学的性質は普通の銅と全く変わらないはずなのに、人の手が触れると発熱したのだ。しかも、触る人によつて発熱量が異なっている。詳しい調査で、この反応は人だけに起きることではなく、生命体に普遍的に現れる反応で、逆に生物であっても死体では現れないことがわかってきた。

さらに研究を進めたところ、銅を精製し他の物質を混ぜて合金にすると、熱エネルギーの代わりに電気エネルギーや運動エネルギーが得られることもわかった。これらはすべて普通の銅には見られない性質で、この特殊な銅は「オリハルコン」と呼ばれることになった。

オリハルコンについては様々な科学的な疑問があった。もっとも大きな疑問は、オリハルコンの反応で得られるエネルギーは、どこから与えられているのかということであった。当初は、オリハルコンの銅原子の中の構造にエネルギーが蓄えられていると考え、最終的には素粒子加速器まで持ちだして分析が行われたが、結局何も発見されなかった。また、オリハルコンが大きなエネルギーを放出した後も、放出前と比べてエネルギーの放出に衰えがないことも確認された。これにより、オリハルコン自体がエネルギーを持っているという仮説は否定されることになった。

そこで新たに考えられたのが、生命体がなんらかの観測されないエネルギーを持っていて、オリハルコンを「触媒」としてそのエネルギーが物理的なエネルギーに変換されるという仮説だった。この

仮説は、これまで観測された事実を矛盾なく説明しているように思われたため、急速に科学者の支持を得ていった。

この未知のエネルギーは、当初「オーラ」と呼ばれ、後に「精神エネルギー」という正式名称が与えられた。そして、オーラ「精神エネルギー」を研究する学問分野として「超心理物理学」という分野が急速に立ち上がり、オリハルコンの反応は「サイコキネシス」または「超心理物理現象」と呼ばれるようになった。

このようにして、19世紀に超能力を科学的に研究する学問として流行し、超能力が存在しないことを証明する形で終わってしまった「超心理学」は、オリハルコンの発見によって、現在最も有望な学問分野の一つとして生まれ変わり、世界中の科学者の注目を集めることとなったのだった。

金子が所属して、4人がこれから実験に参加する研究所は、文部科学省の所轄にある「国立自然エネルギー研究所」の下位組織の「超心理物理センター」という機関だ。ここは、超心理物理学の隆盛を受けて、日本の超心理物理学の最先端の研究を行うために、最先端の研究者を集めて数年前に設立されたばかりの機関で、超心理物理学のすべての分野を網羅的に研究している日本最高峰の研究機関だ。

「超心理物理学」という学問領域が立ち上がると、研究は一気に加速した。研究分野は多岐に渡ったが、その一分野としてオーラそのものの性質を解明するという分野が形成された。その研究により、人が持つオーラの強さには個人差があるだけでなく、年齢差があることも徐々にわかってきた。特に注目を集めたのが、一般的に子供のほうが大人よりも強いオーラを持っているのだが、中でも10代後半の時期に特異的にオーラが強くなる時期があるという研究

結果だった。

#2 サイコキネシス（後書き）

超能力の設定を、よくあるタイプの、量子論に基づいた、確率をゆがめるといふ仕組みではなくて、現代科学で発見されていない未知のエネルギーがあつて、それを物理的なエネルギーに変換するといふ仕組みにしてみました。

発現の条件が厳しい（深海底にあるオリハルコンを触媒にする）ので、これまでの科学では発見できなかったという設定です。

#3 研究所の人々

金子の話は、4人にとっては想像を超えた話ばかりで、呆気に取りられたような状態で聞いていた。すると突然、会議室のドアが開いて、金子よりだいぶ年上の男性が入ってきた。「あ、浅田さん」と金子が言うと、「金子先生、どんな感じですか?」と、浅田と呼ばれたその男性は言った。「ちょうど、背景の説明が終わったところです」と金子が答えると、浅田は軽くうなずいて、「主任研究員の浅田和也あまたかずやです。よろしく」と言った。すかさず、「私のボスです」と金子が付け加えた。

「藤田先生は?」と、浅田が金子に聞くと、「そろそろ来ると思っています」と答えるやいなや、会議室のドアが薄く開けられて、中を覗き込む様子がした。「どうぞ」という金子の声に促されて入ってきたのは、浅田より年が若そうで、その割に目の下に大きな隈ができていて、顔色のよくなさそうな男性だった。「あれ、浅田さん、先に来てたんですか?探してたんですけど」と、その男性が言うのと、「何か用ですか?」と、浅田が答えた。「いえ、ここに一緒に来ようと思っただけです」と、その男性が言うのを遮って、金子が「藤田さん、自己紹介」と言った。

「あ。」金子に促されて、藤田は話し始めた。「えっと、藤田智ふじたとせ之ゆまです。そこにいる浅田さんの研究室で研究員をやっています。皆さんがこれから参加する『10代後半における精神エネルギーの特異的増大の分析とその応用に関する研究』を担当しています。えっと、オリハルコンの話は・・・」と言いながら、金子をちらつと見た。金子が「もう説明しました」と答えたのを聞いて、藤田は話を続けた。「10代後半はオリハルコンの反応が特異的に強く出るところが最近わかってきたので、今回、文部科学省に協力してもらって、

今年高校に入学する高校生の中から特にオーラの強い子に実験に協力してもらうことになったのです。」

「その何とかという実験に参加するのはこの4人だけですか？」と、バスで一緒だった女子が聞いた。「そうです。この実験は日本では初めての試みで、世界でも知っている範囲では初めての試みです。なので、どう進めていくのか、まだ正直手探りなところで、一応、いろいろな案はあるのですが、やりながら考えていく感じになるかと思えます。」そう言って、藤田は金子の方を見た。

藤田の視線を受けて金子は、「確認だけど、みんな、推薦で桜山高校に今年入学するんだよね」と、さっきまでよりも少しくだけた口調で話し始めた。4人がめいめいにうなずくと、金子は、「今日はまだいろいろやることあるんだけど、とりあえず、自己紹介してもらおうのがいいかな」と言って、一番手前の男子に向かって、「じゃあ、時計回りで」と言って、自己紹介を促した。

「じゃあ、えっと」と言いながら、指名された男子が椅子から立ち上がった。「俺は田中慧たなかさとしと言います。桜山高校にこの4月に入学します。えっと、家は横浜ですが、昨日から近くの寮に住んでいます」と、そこまで言ったときに金子が口を挟んだ。「あ、そうだ。みんな、もう相沢寮に住んでるんだよね。後で送って行くから。」4人が全員うなずくのを見て、金子は田中に視線で続きを促す。「えっと、以上です。よろしくお願いします。」と言って、田中は座った。

続いて、右隣に座っていた女子が立ち上がった。バスで一緒だった女子だ。「高橋希海たかはしのぞみです。埼玉出身です。田中さんと同じで今年桜山高校に入学です。中学では吹奏楽をやっていました。一人暮らしは初めてなので、ちょっとわくわくしています。よろしくお願いします」と、ハキハキした声で自己紹介をした。しかし、佐藤は、次

は自分の番だということまで頭がいっぱいで、最後の方は話を聞いていなかった。何を話すか考えて周りを見ていなかったところに、「じゃあ、次」と金子に促されて、慌てて立ち上がった。

「わ……。」「一瞬、「わし」と言いそうになって、慌てて言い直す。うっかり方言が出てしまわないように、気を引き締めて、「僕は、佐藤勇人（さいとうゆうにん）です。出身は奈良です」と、できるだけ、アクセントが関東アクセントになるように注意しながら、慎重にしゃべった。「東京は初めてなので、緊張しています。よろしくお願いします。」

言い終わって、ほっとして急いで座ると、金子が話しかけてきた。「奈良って、遠いね。そんなところまで実験の募集をやったんだ。」佐藤は、選抜の基準を含む募集の詳細については知らなかったの
で、なんと答えていいか困って、「そうみたいです」と曖昧に答えた。金子は少し驚いた顔で浅田の顔をちよつと見たが、すぐに最後の女の子に視線を移した。

「はい。私は、近藤裕子（こんどうゆうこ）と言います。家は東京で、ここから北西のほうに行つたところにあります。自転車でも通えるのですが、寮に住むことになりました。」と、そこで高橋が口を挟んだ。「通えるのに寮に住むの？」それに対して、一瞬どう答えたものかという
ような顔をして言いよどんだが、すぐに、「推薦の時の条件に寮で暮らすことというのがあつたし、それに、えつと、寮の方が静かに集中できるかと思つて」と答えた。

すると突然、浅田が、「あの寮って実は結構人気なんだよね、昔から。東京って狭い家が多いでしょ？だから大学受験の時に自分だけの個室があるってのはなかなか魅力的なんだよ」と言つて会話に入ってきた。「だから、寮の部屋が優先的に割り当てられて、しかもタダって言うのは結構メリットなんじゃないかと思つてね」と言

った。

金子が「じゃあ、寮の件は浅田さんのアイデアなんですか？」と聞いたところ、「まあ、機密保持の問題もあつただけど、実験のために勉強時間を割いてもらうんだし、一石二鳥かなと思ってね」と、浅田はニコニコと笑いながら言った。それまで黙っていた藤田が「詳しいですね」と言うと、浅田がニコニコしたまま、「僕も桜山高校の相沢寮出身だからね」と言った。それを聞いた、藤田と金子は「初耳だ」という顔で浅田の笑顔を眺めた。

金子が何かを思い出したように、「そうそう、機密保持契約の件」と言つて、「みんな、多分、事前に渡した書類にサインをしてきてもらったと思うんだけど、回収していいかな」というと、4人は靴からA4の紙を取り出した。それを回収しながら金子は、「オリハルコンの研究はいろいろと機密事項が多くて、実験の内容は、基本的に研究所の外では話をしないでください。学校ではもちろん、家族にも話さないようお願いします。」と言つた。

田中が、「それはなぜですか？」とちよつと挑戦的なニュアンスで聞くと、金子は、「オリハルコンの研究は、今や、国を上げての競争になっていて、次世代の主力産業の主導権をどの国がとるかということで、産業スパイもかなり暗躍しているという話なんです。論文の発表も、特に海外の論文誌への投稿はかなり制限されていて、基本的には、実用化の目処が付いて、基幹部分を特許で固めてからでない論文発表はできないことになってるんですよ。実験は研究の最先端の内容を含むから、その内容が外に漏れるのはかなりまずいということ。」「と答えた。

#3 研究所の人々（後書き）

主人公を高校生にしたかったので、オーラが高校生の時に特に強くなるという設定にしてみました。まあ、動機はやや不純ですが、最終的にはその設定は話の中心になってくる予定ですので。

当面は、佐藤から見た視点で物語は進みます。

#4 オーラの測定

話はそれで終わって、その後は、簡単な質問にたくさん答えていくだけのテストを受けさせられ、健康診断の時に行うような身体計測を行って、最後に身長よりも高い、大掛かりな装置の前に集まった。浅田と藤田はいつの間にかいなくなって、残った金子が装置の説明を始めた。「この装置は、人間のオーラを測る装置です。多分、推薦の前に、みんな、一度簡単な装置でオーラを測っていると思うんだけど、これは全身のオーラをもっと精密に測る機械です。測定する時は測定器を身体に合わせて調整しないといけないので、使うときには私か藤田さんを選んでください。」

すると、高橋が不意に口を開いた。「オーラって、精神エネルギーが正式の言い方なんですよね。どうしてオーラって言うんですか？」そういえば、確かに正式名称は精神エネルギーだと説明していたことを思い出す。自分は、狐につままれたような話を聞いて、ただ呆然としていただけなのに、そんなところまで気が回っていたんだ、と佐藤は少し驚いた。「オーラは通称です。確かに精神エネルギーというのが正しいんだけど、オーラのほうが言いやすいからね。他に、サイコキネシスってという言葉もあるけど、これも通称で、正式名称は超心理物理現象と言います」と金子が説明した。

「あと、それから大事なことだけど、今度から、研究所に来たときは、他のどの実験よりも前に、この装置で測定をしてください。私か藤田さんが必ずいるはずですよ。じゃあ、順番に測定しましょう」と金子は言って、一番近くに立っていた田中から測定を始めた。測定は、装置の中に立って、周囲にアームで固定してある10個くらいあるマイクのようなものを、金子が1つ1つ身体の回りに丁寧に動かして固定して、脇においてあるパソコンを操作すると、30秒

ほどで完了した。パソコンにはマイクの数と同じ10個くらいのグラフが表示されている。測定している間は動けないので、自分の結果を覗くことはできないが、他人のものは見れるので、皆、金子の回りに集まって見慣れないグラフの様子を興味本位で見ていた。

最後の佐藤の番になって、測定を始めると、何やら「おー」という歓声が上がって少しざわざわとしているのが聞こえた。何が起ったのだろうかと思ったけれども、測定中は顔も動かしてはいけないと言われているので、内心ドキドキしながらじつと我慢した。測定が終わってマイクを元の位置に戻す金子に、「何があっただんですか？」と聞いてみた。

「佐藤さんのオーラが、他の3人の2倍くらいあっただよ。」という金子の言葉を聞いて、「それは結構多いんですか？」と聞くと、「正直、どの辺が上限か、まだ研究が進んでないからなんとも言えないんだけど、少なくとも今までこの装置で測定してきた中では一番多いかな。今、一般的に言われている人の平均値の20倍位だね」という返事が返ってきた。心のなかに、わずかながら優越感が沸き上がってきて、なんとも意味のない優越感だなど思いながらも少ししい気分で測定器を降りた。

気がつくと、もう外は夕闇に包まれていて、佐藤は、少しおなかがすいてきていた。高橋が「このあとどうするんですか？」と聞いたが、佐藤はそれを聞いて、「多分、皆も、そろそろ疲れてきたのかな」と思った。「そういうえば、ここからどうやって帰るんだろう。金子さんは送っていくとか言ってたけど」と考えたとき、金子が「今日は、もうこれで終わりなので、帰り支度をしてください。寮までは車で送って行きます。次は、明後日、学校が終わったら、研究所に来てください」と言った。

4月といつても、まだ夜は寒い。5人はめいめい厚手の上着を羽織って外に出た。研究所は、山の上に立っていて、周囲に家がないので、夜になるとあたりはだいぶ暗くなる。晴れた日なので、空の星がよく見える。はく息が白くなるのを見ながら、金子の後をついて歩いて行った。

「車、5人で乗るのはちょっと窮屈かもしれないけど、ごめんね。次はもう少し大きなのが使えるように頼んでおくから」と金子が言った。車が見えてきたところで、「助手席に誰か乗って、後ろに3人乗ることになるんだけど」と言われたので、見ると、セダンタイプの普通の乗用車だった。「後ろは身体が小さいほうがいいから、田中くんが助手席に乗るってことでいいかな」と金子に言われて、田中は「分かりました」と言って助手席に乗り込んだ。

言われるままに状況に流されていたが、田中が助手席に乗って、外に高橋と近藤と自分の3人が残った状況に気づいて、急に心拍が早くなった。金子が「じゃあ、後は適当に乗ってね」と言って、運転席に乗ってしまうのを見て、「どうしよう」と思いながら、恐る恐る高橋と近藤の方を見た。「とりあえず、佐藤くんは奥に乗って」と、高橋にすかさず声を掛けられて、運転席の後ろの席に乗り込む。「シートベルトしてね」と金子に言われて、シートベルトをした。早くなった心拍はまだ収まらず、気づかれないように深呼吸してみる。

一呼吸おいて、反対側のドアが開いて、高橋が入ってきた。近藤もその後ろに続く。「シートベルトしてね」という金子の言葉に、高橋と近藤がシートを探してシートベルトを探す。佐藤の心拍はますます早くなり、息苦しくなって、窓の外を見てただじつとしていると、エンジンがかかり車が動き始めた。あまりこれまで女性に免疫をつける機会のなかった佐藤にとって、後部座席に女子2人と座

る状況は、かなり厳しい状況だった。

車は、4人乗りとしては十分な広さなんだろう。でも、5人乗りとしては窮屈だ。車体が揺れるたびに肩が当たって、そのたびに心拍が早くなる。ずっと窓の外を見てみると、坂の上から街の光が見えた。東京の夜景は明るい。そんなことを思っていると、金子が「音楽かけていい？」と声をかけた。助手席にいる田中が「いいですよ」と答えると、車内には女性ボーカルのアップテンポな曲が流れ始めた。

高橋が「あ、これ超好きなんだよね」と小さく鼻歌を歌い始める。多分、最近の流行りの歌なんだろう。佐藤は、どこかで聞いたことがある歌だと思ったが、誰の曲かは全くわからなかった。佐藤の家では、兄の趣味で、車の中ではシヨパンと決まっていたし、テレビの音楽番組も見ないので、見当もつかなかった。「明るい歌だな」と思って耳を澄ましているうちに、車は寮に到着した。

「じゃあ、また、明後日」と言って金子は車で帰り、残った4人は、高橋の先導で寮の食堂に晩ご飯を食べに行った。食事中の会話は、やはり高橋が主導で、田中がところどころ話に割り込んで、高橋に話をふられると近藤が答えて、佐藤はほとんど相槌を打つだけで終わってしまった。

#4 オーラの測定（後書き）

未知のエネルギー「オーラ」が元になっている超能力の話なので、そのエネルギーの量を測定するというプロセスが必然的に起こります。この測定器の原理や開発の歴史を語り始めると長くなるのですが、それは多分、おいおい本編で説明する予定です。

#5 入学式

風呂から上がって一人になった佐藤は、大きなため息をついた。

「今日の自分あまりに情けなかったんじゃないか。せつかくこれから一緒の高校で同じ寮に住んで同じ研究所に通う同級生と知り合いになったのに、ほとんど会話に参加できなかった。自分ってこんなに内気な人間だったんだっけ」と心のなかでつぶやきながら、ベッドに腰掛けた。

佐藤がいるのは寮の自室で、6畳1間の個室にはデスク、椅子、本棚、ベッド、クローゼット、洗面台に小型の冷蔵庫と、生活と勉学に必要な最低限の設備が用意されている。風呂、トイレ、食堂は共同のものを使うので、自室は主に睡眠と勉学のための場所だ。

「いや、そんなことはなかったはず。女子と話すのはともかく、男子と話すだけなら、これまでそんなに内気になったことはなかったと思う。田中と自己紹介していた彼のキャラのせいなんだろうかと、夕飯の時まで一緒だった4人のことを思い返す。」

「あ、そうか。きつと、あの話し方なんだ。テレビみたいな気取った感じのあの話し方。東京の人はみんなあんな感じなんだろうか」「生まれてこの方、ずっと関西で育った佐藤は、頭の中で考えるときでも関西アクセントなので、関東アクセントで自分が話しているという状態を想像するだけで気恥ずかしくなってしまう。「勢いで推薦をもらって、ここまで来ちゃったけど、この先大丈夫かなあ」と少し弱気になりながら、ベッドに仰向けに寝転がった。

次の日は入学式だ。緊張のためか少し早く起きた佐藤は、余裕を持って朝ごはんを食べて支度をして、部屋を出た。寮から高校まで

は、路線バスが出ていて、20分くらいで着く。しかし、一学年20人くらいの寮生がいて、朝は総勢60人くらいの高校生が一斉にバスに乗ることになるため、特別にスクールバスが運行している。それに乗ると、直通で10分くらいで高校に行くことができる。佐藤は、このバスに乗るのは初めてなので、遅刻しないように少し早めにバス停に向かった。

佐藤がバス停に着いたときには、既に何人がバス停で待っていた。その中に見知った顔を見つけた佐藤は、昨日のこともあったので、少し積極的に声をかけようと思って近づいた。「田中くん。」田中は、立ったまま、英語の参考書を読んでいたが、呼びかけられたのに気づいて振り向いた。「あ、・・・昨日の。」佐藤です。「僅かな沈黙は、名前を思い出せないのだと思った佐藤は、自ら自分の名前を名乗った。

「昨日はすごい話だったね」と切り出すと、田中は、「あれってどこまで本当なんだろうね」と返してきた。思ってもいかなかった切り返しに、佐藤は「え？」と聞き返すと、田中は、「いや、あれから一人になって考えてみたんだけど、超能力の研究を真面目にしているなんて今まで聞いたことがないんだよね。そんなネタならテレビで取り上げていても良さそうなものに」と言った。「確かにそうかもしれない」と思って、佐藤は、「じゃあ、田中くんは、あれは嘘だと思ってるの？でも、じゃあ、何のために？」と、自分でも答えを考えながら聞いてみた。

その時、「田中くん、佐藤くん、おはよう」と声を掛けられた。その声に振り返ると、後ろに高橋と近藤がいた。「おはよう。」突如後ろから高橋に声をかけられたことで、すこしどきまぎしながら挨拶を返した。「昨日はすごい話だったね」と高橋が言うと、「同じ事を佐藤くんにも言われたよ」と田中が笑いながら言った。「だ

って」と言つて、まわりを気にして声を落として、「サイコなんとかつてつまりは超能力でしょ。つまり、あれに参加するってことは、あーしたちは超能力が使えるってことだよ、潜在的に」とまくし立てる。

高橋は「わたし」というときに、舌が回り切らないのか「あーし」に近い音になる。それがまた似合ってるなど、佐藤は頭の片隅で考えていた。

高橋の超能力についての発言に突っ込みを入れようと、田中が口を開いたときに、バスが到着した。佐藤がふと腕時計を見ると、出発時間の10分ほど前だった。4人は最後列の席に座った。参考書を読みたい田中は窓際に、話をしたい高橋は通路側に座り、必然的に佐藤は田中と高橋の間に座り、近藤は窓際に座った。高橋は話題の切れない人だった。さすがに秘密保持契約書の件があつて、バスの中でサイコキネシスの話をするのは憚られたのか、話題は超能力以外の話になった。

高橋はどうかやら制服にこだわりがあるようだった。高校選びでは制服選びがかなり重要で、ブレザーの高校には行きたくなかったそう。桜山高校の推薦を受けた理由は、制服が気に入ったことが一番重要なポイントだったらしい。あまり理解のできないこだわりについてそんなものなのかと思つて相槌を打ちながら、ふと近藤の方を見てみると、同意しているというよりは不審な顔をしている様子を見て、どうかやら高橋だけのこだわりであるらしいと理解した。

高校に着くと、新入生受付という案内板が立っていて、名前を伝えると入学書類一式の入った袋を渡された。「A組だ」と田中が言った。どうかやら書類の中にクラス分けの紙が入っていたらしい。「あ、同じA組」と高橋が言った。「D組だ」と近藤が言う。佐藤は

もらった袋の中を急いで探って、クラス分けの紙を探す。「C組。」
一人でも一緒のクラスになれば、少し安心だ思っていたので、バラバラになってしまったのは少し残念だった。その紙には、入学式の座席番号も書いてあったので、4人は会場の講堂に入って別れ、指定された座席に着席した。

入学式は、特に面白いものではなかった。まあ、面白い入学式なんていう方が普通ではないので、面白くないことは予想通りだったのだが、予想通りだからといって退屈が紛れることもなかった。入学式の後には教室に移動して、これからの学校生活のことについての説明を聞いて、教科書を受け取った。

今日の予定は、公式にはこれで終わりだが、午後は自由参加のクラブ紹介がある。体育館に各クラブがブースを構えて、部員と入部希望者が直接話をしたり、その場で入部できる他、各クラブが持ち時間制でクラブ紹介をするためのステージが設けられている。部活をするかしないかは生徒の自由に任されていて、例年半数くらいの生徒がどこかのクラブに所属するらしい。たいていのクラブは一年中入部を受け付けているが、一部の運動系クラブは4月の最初しか入部を受け付けないところもある。

教室で佐藤がまわりを見回すと、元々知り合いだったらしい生徒のグループがちらほらと固まっている。その他の生徒たちは、受け取った書類に目を通していたり、話しかけられそうな相手がいなかを探してキョロキョロしたりしている。すぐに出ていった生徒は、他のクラスの友人と待ち合わせがあるのだろうか。

「さて、どうしようかな」と心のなかでつぶやく。サイコキネシスの件があるから、すでにそれが部活のようなもので、週の何日かはそれで放課後が潰れるはずで、その上さらにクラブ活動をするの

はしんどそうだ。そもそも佐藤は、部活が必須だった中学の時も、美術部に入っただけのもの、活動内容は帰宅部同然で、ほとんど部活らしい部活をしたことがない。「そんなことよりも」と考えたところで、声をかけられた。

#5 入学式（後書き）

ようやく高校生活が始まりました。佐藤（ ）は慎重で引っ込み思案な性格という位置づけで。田中（ ）はプライドが高い感じで、高橋（ ）は明るいタイプで、近藤は（ ）は静かなタイプです。

「おい、一緒に食堂に行く？」声の方向を見ると、男子2人がこちらに歩いてきていているところだった。よく見ると、教室には他にはもう誰も残っていない。「いいけど、クラブ紹介はいかないよ」と答えると、「いいよ。俺もクラブ紹介は行かないし」と声を掛けてきた男子は言って、「正直、宿題とか勉強とかどのくらい大変かわからないから、クラブ活動は様子見だよな」と続けた。

それを聞いて、「そういえばここは進学校だったんだ」と、佐藤は思い出して、「宿題って結構あるのかな」と聞いてみると、声をかけてきたのとは別の男子が、「親戚の知り合いが今3年生なんだけど、その噂によると宿題はそれほどでもないけど、宿題だけやってるのだとついていけないから、結構予習していかないとダメみたいだよ」と言った。

佐藤はその2人と昼を食べることにした。話を聞くと、2人は特に初めから知り合いだったというわけではなく、たまたま席が隣だったので一緒に食べようということになったのだそうだ。そして、教室に1人残っている佐藤を見て、せっかくだから仲間に誘おうということになったらしい。最初に声を掛けてきた男子は太田弘樹おおたひろき、もう一人は池島健治いけしまけんじという名前で、2人とも自宅から電車で通学しているということだった。

「へー、じゃあ佐藤は寮生なんだ」と太田が言った。いつの間にかくん付けから呼び捨てに変わっている。出身中学の話をしていて、奈良から上京して来たという話になって、どこに住んでいるのかという話になったのだ。サイコキネシスの話を2人にしていいものか迷って、「まあ、自宅からは通えないし」と曖昧に佐藤は答えた。

「でも、奈良つて遠いよね。どうしてまた？」という池島の質問には答えに窮したが、「まあ、家の事情もあってね。一人暮らしができる環境が欲しかったというか」と言うと、聞いてはいけないものを聞いたかもしれないと思った2人は、その話はそれきりになった。

「家の事情」というのは、とつさに口を衝いて出た言葉だが、あながち嘘というほどのことでもない。もちろん、桜山高校に入ったのはサイコネシスのことで推薦があったからだが、それを受ける決断をする背景には、確かに「家の事情」があった。佐藤は2人兄弟の弟だが、兄はかなり優秀だ。地元の名門の私立の中高一貫校に通っていて、今年高校3年生だが、順調に行けば、どこかの国立大学の医学部には確実に受かると言われている。それに対して佐藤は、とてもそれには及ばず、公立中学に通っていた。桜山高校も、受験をしたら確実に落ちていたはずだった。

親は特に勉強を強いるわけでもなく、兄弟に差をつけるわけでもないが、兄がやすやすとできていたことで、弟がつまずくと、どうしても驚いてしまう。初めのうちは何か理由があるのではないかと心配されたり励まされたりしたが、だんだんとそれが兄弟の「才能の差」であって、弟が怠けているわけでも努力が足りないわけでも問題を抱えているわけでもないことがわかると、極力、驚いたことを顔に出さないようになった。ところが、佐藤は、両親が驚いていることが、顔に出さなくてもどういうわけかわかってしまうので、兄との差を何とかして埋めたいと切望したが、どうしてもその差を埋めることは出来なかった。桜山高校への推薦は、そういう状況を脱する千載一遇のチャンスだったのだ。

昼食の後、2人と分かれて、佐藤は図書館に向かった。朝、田中に言われたことが気になっていて、サイコネシスについて、少しでも参考になる情報が、図書館にあるかもしれないと思ったのだ。

桜山高校は、伝統校だけあってかなり立派な図書館がある。もらったばかりの学生証を使って入館すると、図書館の中をゆっくりと歩いて行った。「サイコネシスは確か正式名称があるって言ったな。心理とか物理とか」と、昨日の説明を思い出しながら、棚のラベルを1つ1つ確認していく。

かなり時間をかけて1周してみたが、オカルトめいた超能力の話ばかりで昨日の話のようなことについて書いてある本は1冊も見当たらなかった。「やっぱり嘘なんだろうか」と思って、ふと気づくと、インターネットコーナーがあるのに気づいた。インターネットは、中学の時に授業で少し触ったことがあるけれど、それだけしかないのであまり使い方はよくわからない。でも、インターネットを使えばもつとたくさん情報を探すことができることは知っていた。

「検索をすればいいんだっけ」と授業の内容を思い出す。機密保持契約があるので、他の人に手伝ってもらうこともできないので、自分でなんとかしないといけない。記憶をたどりながら「お気に入り」を開くと「Google」という文字がある。キーボードの使い方も曖昧なので、苦労しながら「サイコネシス」と入力して検索すると、「Wikipedia」というサイトが表示された。

そこに書いてある内容は、昨日聞いた話とほとんど同じ内容だった。「嘘じゃなかったんだ」と、安心した気持ちになりながら、その内容を読み進めていくと、昨日聞いた話にはなかった内容が書いてあることに気づいた。「サイコネシスは、軍事技術への応用への期待が非常に高く、最先端の研究開発は各国で最高機密扱いとされている、ほとんど公にされることはない。」

「軍事技術？」佐藤はその言葉を見て固まった。頭に浮かぶのは、超能力を使って殺人をしたり、超能力者同士がバトルをするような

SFやアクションの映画やアニメのイメージ。軍事技術とは、つまり人を傷つける技術という意味ではないんだろうか。そのイメージは、昨日の機密保持契約と奇妙に符合する。「今の日本で軍事技術の開発を行って、しかも、高校生がそれに関与するなんて公になつたら大変なことになるんじゃないだろうか？」そう思うと、大変な研究に参加してしまったのではないかと不安になってきた。

「いや、たとえそうでも、僕自身が危険な目にあうというわけじゃないはず。だったら、問題ないんじゃないか？」と不安な気持ちを振り切ろうとしてみた。しかし、不安な気持ちを拭い去ることはできず、しかし、それ以上図書館にいても何もできないので、寮に帰ることにした。

帰る道すがら、佐藤はそのことを考えていた。「そもそも、どうして日本が軍事技術の研究なんてやっているんだろう。」その時、昨日の話の内容の一部をふと思い出した。「オリハルコンは太平洋の深海底から採取される。」社会の勉強で覚えた世界地図を思い出す。太平洋は日本とアメリカの間にある海だ。「もしかして、オリハルコンを発見したのは日本なんじゃないだろうか。そして、世界の関心が薄いうちに強力な軍事技術を開発してしまおうと考えているのかも。」

考えれば考えるほど、すべての事実が符合して、日本はサイコキネシスを使った軍事技術を開発していて、佐藤たちはその開発の協力をすることになっている、という仮説が現実味を帯びてきた。

しかし、逆に、考えがまとまるにつれて、次第に不安が和らいでいくことにも気づいていた。「どっちにしても、これは僕がどうこうできるようなレベルの話ではないんだろう。だったら、黙って知らないふりをしているのが一番なんじゃないか。金子さんの話にも、

軍事技術の話は一言も出なかったのだし、そんなことは初めから知らないことだということにしておけば、何も問題はないんじゃないか。「そう割り切りをつけると、随分気分が軽くなった気がした。

「この話はこれで終わりにしよう。いずれ時が来ればわかることだろうし」と、佐藤は考えをそこで打ち切った。

#6 図書館（後書き）

佐藤がサイコネシスの実験に参加するために推薦で進学したのは、東京西部にある桜山高校という国立の進学校だったのですが、結構勉強が大変だということです。

佐藤は推薦で実力以上の高校に入ることができたのですが、逆に言えば、頑張って勉強しないと落ちこぼれてしまうということでもあるわけで・・・

#7 実験初日

入学式の翌日からは、通常授業で、時間割通り午後まで授業があった。放課後になると、佐藤は、クラスメイトの太田と池島と歩いて駅まで行つて、そこで2人とは違う電車に乗って研究所に向かった。研究所までは、高校の最寄り駅から乗り換え1回で20分くらい電車に乗ったところの駅で降りて、そこからバスで5分ほどのところにある。

研究所の最寄りの駅で電車を降りて、改札に向かって歩いていると、佐藤の前を見覚えのある後ろ姿が歩いているのが見えた。

「あれは、確か、近藤さんだっけ」と佐藤は記憶をたどった。実験と一緒に参加する3人の中で、一番印象の薄い人だ。どう声をかけようかと迷っていると、近藤がふと振り返った。「あ、・・・えっと」と一瞬どもったのを見て、「佐藤です」と言つて、「4人”の中で一番印象が薄いのは、間違いなく僕だな」と思った。「あ、えっと、バス停つてどっちでしたっけ？」と近藤が聞いた。「こっちですよ」と言つて、佐藤は近藤を案内するようにバス停に向かつて歩き始めた。

「あとの2人は一緒じゃないんですか？」と、とりあえず佐藤は、あたりさわりのない話題を話しかけてみた。「クラスが違いますから」と近藤は答えた。「・・・」。「さすがにあたりさわりのない話題だけあって、話が続かない。「太田や池島と話すときはもつと気楽に話せるのに」と思いながら、何か話題はないかと考えてみるけれど、思いつかないまま時間が過ぎていった。2人とも黙つたまま、バスを待っていると、しばらくしてバスが到着した。

バスは駅が始発で、乗り込んだのは2人だけだった。どこに座ろうかと思つて、近藤の方を見ると、どうしようと考えている顔をして車内を見ていた。バスには1人掛けの席と2人掛けの席と、最後尾の5人掛けの席と、中央付近の横掛けの長椅子があつた。1人掛けの席に座るのはよそよそしすぎるし、2人掛けの席に一緒に座るのは親密すぎるし、最後尾の席に2人で座るのは居心地が悪そうだし、ということ、中央付近の長椅子に座ることにした。近藤は、佐藤の横に、鞆ひとつ分空けて座つた。

「昨日のクラブ紹介、行きました？」佐藤は、別の話題を話しかけてみた。「一応」と近藤は答えた。「何か、面白いものありましたか？」と佐藤が聞くと、「私はいくらもありません。クラブ活動をやる余裕があるのかよくわかりません」と答えた。「やっぱりそうですね」と佐藤は言った。

佐藤は、中学の部活の話聞いてみた。近藤は、中学の時の友達に誘われて弓道部にいたのだが、友達がいたから入つていただけで特別、弓道に興味があるわけではないのだそうだ。佐藤も、自分が美術部にいたという話をした。「じゃあ、絵が得意なんですか？」と近藤が聞いたところで、バスが研究所に到着した。

今日は、初めて本格的に実験に参加するということで、佐藤はどういう内容になるのかと内心やや緊張していた。佐藤と近藤は、一昨日言われた通り、まず金子を訪れた。パソコンに向かつて集中している金子を見つけて声をかけると、金子は「5分待つて」と言つて、部屋の入口付近のソファで待つように指示した。佐藤と近藤がソファに腰を掛けようとしたところで、「えっと、佐藤さんと近藤さんだね」と声を掛けられた。見ると、一昨日会つた覚えのある顔があつた。「誰だったかな」と佐藤が少し考えていると、「じゃあ、行こうか」と先導して歩き始めた。

「研究室の人は、金子さんと浅田さんと、・・・あと一人なんて名前だったっけ。」佐藤は、オーラの測定を受けながら考えたが、全く思い出せない。近藤の方を見ると、近藤も何かを思い出そうとしているような顔をしている。と、そこへ、高橋と田中が到着した。「あ、藤田さん、こんにちは」と高橋が自然に言ったのを聞いて、3人は顔には出さないものの、高橋が名前を覚えていたことに内心驚いていた。

4人がオーラの測定を終えると、金子が若そうな男性を連れて入ってきた。「あ、小野くん」と藤田が声を掛けると、小野と呼ばれた男性は頭をひよいと軽く下げた。金子が、「こちら、実験に参加してくれる高校生の皆さん」と小野に向かって4人を紹介した。「東大の小野です」と小野は言った。

高校生、特に進学校の高校生である4人にとって、特別な響きを持つ言葉が突然出てきて、4人は驚きを隠せない表情をしていた。佐藤にとって、東大のイメージは、眼鏡を掛けていつも勉強しているキテレッツ大百科の勉三さんのようなガリ勉イメージか、あるいは、文武両道のエリートでプライドの塊で周囲の人を蔑んでいるような目付きをしているイメージだったので、目の前の極めて普通の男性が東大と名乗ったことに、驚いていた。

「た、高橋です。こんにちは。」口火を切ったのは高橋だった。残りの3人も後に続いて簡単に自己紹介する。「小野くんは東大の超心理物理の、何年だったっけ？」と金子が言っつて、「M1です」と小野が答えたのを受けて、「修士1年で、今年から研究所に通って実験の手伝いをしてもらうことになりました」と金子は続けた。

高橋が「小野さんも、オーラが強いんですか？」と聞くと、小野

は「いや。だったら面白かったんだけど、僕は測ってみたら平均より低くて。金子さんくらい強かったら、自分で実験できて便利なんだけど」と答えた。佐藤は、小野の話が、金子のオーラが強いということを示唆していることに気づいて、意外な気持ちで金子を見た。

すると、田中が、「それなんですけど、俺はまだ納得できないというか」と言い出した。「オーラとか超能力とかって本当の話なんですか?」とやや挑発的に聞くと、金子が「そんな嘘をつく理由がないでしょ」と言いかけたところで、藤田が「超能力じゃなくて超心理物理現象ね。超能力はオカルトだけど、超心理物理現象は科学的な現象だから」と口を挟んだ。

佐藤は、「どこが違うんだろう」と思ったが、口に出すのはやめた。ところが、「どこが違うんですか?」と田中はしつこく食い下がった。藤田は「超能力は実験で再現できないけど、超心理物理現象は実験で再現できるからね。正しい手順でやれば、誰がやっても現象が再現できて、誰がやっても同じ観測値を観測できるようなものだけが、科学の対象と言えるんだよ」と説明した。その言い方を聞いて、佐藤は「藤田さんって、理屈っぽい感じの人だな」と思ったが、口に出すのはやめた。

その時、小野が「藤田さん、多分、実際実演してみたほうがいいですよ。百聞は一見に如かずと言いますし。正直、僕も、初めて聞いたときは嘘だと思いましたがね」と提案した。それもそうだと合意した藤田と金子は、何を見せようかと考えたが、小野が「あの例の、手をかざすと飛ぶ奴がいいんじゃないですか」と言った。

部屋の隅から、藤田が大きなシートを持ってきて、金子は肘まである手袋をして直径1cm程の小さなメダルを持ってきた。藤田がシートを広げるとそこには目盛りがふられている同心円がたくさん

書いてあった。金子がメダルを同心円の中央に置くと、小野が小型の測定器らしいものを持って現れた。

#7 実験初日（後書き）

みんな、名前全然覚えてないし。そういう私自身、人の名前を覚えるのは苦手なので、人のことは言えないですが。ということ、登場人物のおさらいです。

サイコキネシスの実験に参加する高校生たち

佐藤（ ） C組

田中（ ） A組

高橋（ ） A組

近藤（ ） D組

佐藤の同級生

太田（ ） C組

池島（ ） C組

研究所の人

浅田（ ） 主任研究員

藤田（ ） 研究員

金子（ ） 研究員

小野（ ） 東大修士1年

8 オーラ

小野が、「この測定器はオーラを測定する装置で、あっちにある全身を測定するのと同じなんだけれど、こっちは簡易版なんだ。この下の丸のところの手を当てるとオーラの強さを計測してくれるんだよ。で、例えば僕の手を当てると」と言っつて、右手を当てた。すると、目盛りの値は2MPあたりの数値を示した。

「2MPは、メガサイコまあ、全然ないつて言っつていい数値なんだけど、これでこの手をさっきのメダルの上にかざすと」と言っつて、小野は右手をさっきのシートの上に置いたメダルにかざした。すると、メダルがピクピクとしゃっくりをするように動いた。「と、こんなくらいしか動かなくつて、こんなくらいだとメダルを普通につかむこともできる」と言いながら、小野はメダルを手にとつた。

「ところが、これが金子さんだとどうなるかという」と小野が言っつて、メダルを元の位置に戻して、金子の方を見た。金子が、手袋を脱いで、右手をメダルの上にかざすと、メダルがピヨンと飛んでかざした手の外に飛び出した。それを見ていた4人は「おおっ」という声を上げた。

「こんなふう^に動いちゃうと実験器具の操作の時に困るから、金子さんは実験器具を触るときはオーラを遮断する手袋をはめないとダメなんだよ」と小野が説明した。「それでさっき手袋をしていたのか」と佐藤は納得したが、「その手袋はどうやって作つているんだらう」と、また別の疑問が浮かんだ。

しかし、その疑問を口にする前に金子が口を開いた。「私の場合、オーラの強さは小野くんの5倍くらいあつて、実際にいま測定して

みると」と言つて、測定器の上に手を置くと、測定器は10MPよりもやや少ない目盛りを指した。「みんなの方が私よりもオーラが強いから、もつと飛ぶよ」と言つて、手袋をはめ直してメダルを同心円の中央に位置に戻した。同心円はメダルが飛んだ距離を測るためのものだという事に、佐藤はようやく気づいた。

高橋が「これって、どつちに飛ぶかは決まってるんですか？」と聞くと、小野は「全く予測不能だね」と答えた。藤田がそれに補足して、「あらかじめ加速度がかかっていると、それを加速する方向で力加わるけれど、停止した状態からはどちらに加速するかはほとんどランダムなんだよね。だから、これを思い通りの向きに加速をかけたり、減速させたりする技術を研究するのは、今ホットな分野のひとつなんだよ」と言つた。

それから促されるままに4人はメダルに手をかざして、自分のオーラでメダルが飛ぶ様子を観察した。田中、高橋、近藤が手をかざすと、メダルは手の外側5cmほど外に飛び出した。3人が測定器でオーラを測定すると、18MPから25MP程度の目盛りを指していた。「大体、3人は私の2倍くらいのオーラの強さがあるから、メダルの飛距離も2倍くらいになるんだよ」と金子が説明した。佐藤が手をかざすと、メダルは10cmほど外側に飛び出した。測つてみると、佐藤のオーラは40MPを少し上回るくらいあった。「佐藤くんは3人の2倍くらいあるから、飛距離もそれだけ大きくなるね」と金子が言つた。

田中はまだ納得できないという顔をしていたが、目の前で起こつた現象の手の種を探そうとしても、全く見つからないため、黙つたまま考え込んでいた。

「このMPってなんですか？マジックポイント？」と佐藤はさっ

きから疑問に思っていたことを聞いた。プツと小野が吹き出した音を聞いて、佐藤は「しまった」と思ったが、すぐに藤田が口を開いた。

「メガサイコという、精神エネルギーの濃度を示す単位だよ。精神エネルギーも他のエネルギーと同じエネルギーだから、Jという単位を使うんだけど、空間中の精神エネルギーの量はPと^{サイコ}いう単位を使うことになっているんだ。1Pは1J/m³(ジュール毎立法メートル)で、1Pの濃度の精神エネルギーが1立方メートルあれば、全体で1Jの精神エネルギーが存在するっていうことになって、Mは^{メガ}1000x1000だから、1MPは1立方メートルで100万Jのエネルギーが存在するってことになるね」と説明した。

この時点で、4人はほとんどついていけなくて、ギブアップ寸前の状態だったが、藤田は立ち上がって、部屋の隅においてあったホワイトボードを持ってきて、更に説明を続けた。「例えば、10MPの濃度の場合、このメダルは半減期が1時間くらいで質量が1gくらいなので・・・」とホワイトボードに数式を書きながらどんどん計算を進めていく。4人は目が点になってその様子を見ていたが、金子と小野の二人はいつものことのように、ところどころ計算の間違いを指摘しながら、話を聞いていた。

「一体ここはどういう世界なんだ」と佐藤は思いながら、全く理解できない計算が進んでいく様子を黙って見ていると、「というわけで、2〜3cmくらいメダルが飛び出すという計算になるということだね」と藤田が言った。どうやら計算が終わったようだ。さすがの田中もあきらめたのか、藤田の長々とした講義の後にはそれ以上抵抗しようという気力は失っているように見えた。

「わかったかな」と藤田が振り返って聞いた。誰もが、一体どう

答えたらいいのか途方にくれた顔をしたが、すぐに気を取り直した高橋が「とりあえずMPがマジックポイントではないことと、エネルギーの強さを表していることとはわかりました」と答えた。小野が「いや、もうこの際、マジックポイントでいいんじゃないかな」とにこにこしながら言う様子を見て、佐藤は後悔の念を強くしていた。

どうやら話についてこれなかったことを理解した金子が「大事なことは、エネルギーの濃度を表しているところかな。あと、オリハルコン合金にはそれぞれ固有の半減期っていうのがあって、外からエネルギーが補充されないと、半減期でオーラ濃度が半分になって、その分のエネルギーが物理エネルギーに変換されるっていうのも、覚えておくといいかもしれない」と言った。

「エネルギーの濃度ですか？なんか、イメージがわからないんですけど」と高橋が聞くと、小野が「うーん、なんていうか、例えば、霧みたいなのをイメージするといいかもね。霧の細かい水の粒ひとつひとつが精神エネルギーだとして、この粒がオリハルコン合金に触れると、それが物理エネルギー、このメダルだと運動エネルギーに変換される。で、霧が濃いと、メダルに触れる水滴も増えるから発生する運動エネルギーも大きくなる。メダルに水滴が触れるとその水滴は消えるから、たくさん触れればその分霧は薄くなる。MPはこの霧の濃さを表していると思うたらいいんじゃないかな」と説明した。

小野の説明は、これまでの説明よりもかなりわかりやすかったので、4人とも納得した表情でうなずいた。

#8 オーラ（後書き）

延々とオーラの説明でくどかったかもしれない・・・

オーラはオリハルコンとしか反応しないのですが、逆にオリハルコンは無条件にオーラと反応するので、オーラを遮蔽しないとオリハルコンの破片をつかむこともできなかつたりするんですね。

オリハルコンが必須とか、反応が制御できないとか、そもそもメダルをちよつと動かすだけとか、いろいろ使えなさそうな力ですけど、大丈夫でしょうかね・・・

#9 実験の概要

オーラの説明が終わった所で、「じゃあ、これから実験の概要を説明しようか」と、藤田が切り出した。いよいよかと思った4人は心なしか身を乗り出す。「実験は大きく3つの種類に分けられるんだけど・・・」と、さっきから使っているホワイトボードにキーワードを書きながら、藤田は説明を始めた。

.....

1つ目は、オーラを直接操作する実験である。オーラを物理エネルギーに変換するにはオリハルコンが必要だが、変換をせずにオーラのまま操作することは、オリハルコンの助けを借りる必要はなく、人間の意志で操作できることがわかっていてる。

たとえば、手から放出したオーラを10m先の的に当てたり、2倍程度の濃度までオーラを凝縮したりすることは、個人差はあるが訓練によってできるようになる。しかし、そのメカニズムはまだ解明されていないため、オーラ操作の原理の解明と効率的なオーラ操作技術の開発が活発な研究対象になっている他、オーラ操作の活用方法の発見も興味深い分野と考えられている。

オーラ操作は金子がエキスパートで、4人は金子の指導のもとにオーラ操作の訓練を行うことになる。金子の研究のメインテーマは効率的なオーラ操作技術の開発であるので、4人の指導を通して、オーラ操作の訓練技法やカリキュラムの研究を行うことになっている。

2つ目は、オリハルコン合金に関する実験である。サイコキネシ

ス、つまりオーラから物理エネルギーへの変換は、現在のところオリハルコン及びオリハルコン合金を用いる方法しか確認されていない。オリハルコン合金の種類や形状によって、変換される物理エネルギーの種類や効率が変わってくる。そのため、オリハルコン合金の開発はサイコキネシスの研究の花形であって、研究開発競争が最も激しい分野でもあり、その分、機密保持の扱いもセンシティブである。

オリハルコン合金の開発は、別の研究室が中心で行っているので、4人が直接、最先端の新合金の開発に参加することはないが、金子がオーラ操作のエキスパートである関係で、新デバイスのテストを行うことが頻繁にあるため、その時に4人もテストに参加する可能性も少なくないと思われる。デバイスの操作には相性があるので、相性によっては特定のデバイスのテストを重点的にお願いされることがあるかもしれない。

3つ目は、精神活動とオーラの関連を調べる実験である。精神活動とオーラ、サイコキネシスの関連は、浅田研のメインテーマであるので、3つ目のテーマが4人が参加する実験のメインテーマとなる。

最近になって、オーラやサイコキネシスが精神活動と大きく関連している可能性があるということが、浅田の研究により発見され、この分野は急速に注目を集めてきている。この関連で、長い間、謎であった10代後半に特異的にオーラが強くなるという現象も、精神活動との関連から解き明かすことができるかもしれないとの期待がある。

このテーマは藤田と小野が中心になって取り組むことになっている。集中状態と弛緩状態のオーラの状態の違いを観察したり、喜怒

哀楽などの感情との関連を調べたり、スポーツや芸術活動を行っている時のオーラの状態を調べたり、オーラの操作中やサイコキネシスを発現中の脳波を調べたりと様々なアイデアがあるが、一度に全てはできないので、できることから進めていく。

関連研究で、アルコールや向精神薬などの薬物を摂取した時のサイコキネシスに対する影響を調べるといふものがあるが、4人は未成年対象なので、薬物を使う実験は行わないことになっている。

まず、当面は、金子の指導でオーラ操作の訓練をしながら、訓練中のオーラのモニタリングを通じて、集中状態と弛緩状態のオーラの状態の違いを観察する。折を見て、脳波を調べたり、喜怒哀楽との関連を調べるためにオーラのモニタリングをしながら映画を見たりする機会を作る。

.....

「という方針で、これからの実験を進めていこうと考えています。」と藤田は説明した。ところどころ藤田の説明がわかりにくいところは、金子と小野が補足して、4人とも話についてきたようだった。

「あと、精神活動と精神エネルギーの関連の研究のために、ヒヤリングの時間を作ります。ヒヤリングの内容は心の中のことについて聞くことになると思っているので、プライベートのことを考えて個別に時間を設けます。といっても、趣味とか特技とか性格とか、そういう内容を聞くだけで、私生活について突っ込んだ質問をしたりすることはないです。もし、ヒヤリング中に話したくないことがあっても、無理に話さなくても大丈夫なので、心配しないでください」と言って、藤田は説明を終えた。

その日は、サイコキネシスと実験の内容の説明で時間を使ってしまったため、金子がオーラ操作の実演をして、4人がその真似を試みるだけで終わった。結局、4人とも誰もオーラ操作には成功しなかった。

#9 実験の概要（後書き）

はつきり言って、誰もサイコキネシスのことをほとんど何も分かっていない状況なので、実験の内容もはじめの一步から手探りな感じ
です。

新しい分野を開拓するときってのは、こんな感じかなーと思いなが
ら書いてみました。

多分、この話が始まるまでのところで、2つ大きな発見があて、ひ
つつはオリハルコンの発見で、もうひとつはオーラ測定器の発明だ
ったのだと思います。いろいろな実験も、とりあえず測定できてこ
そですよね。

#10 学生生活

本格的に始まった高校の授業は、想像よりもはるかにハードだった。事前情報通り、宿題の量は大きかったことはなかったが、佐藤は、高校の授業というのはこんなに難しいのかと実感していた。

五教科の授業時間数の割合が増えている上に、英語なら、宿題にはなっていないものの、英文が難しくなっって予習していないと意味が全くわからないし、読む量も中学の時の数倍に増えた。数学なら、授業中にどんどん演習問題が進んでいって、予習していないと全くついていけない。国語は、現代文はともかく古文は中学の時に読んでいたものと同じ言語だろうかというほど難しくなっったし、理科、社会は、毎回小テストがある上に、教科書の注や資料集の隅に書いてあるような内容まで普通に出題される。

「これが高校の普通なのか、それともここが特別なのか。」佐藤はあまりの予想との差に思わずぼやいた。「こんなペースで本当についていけるのだろうか」と不安になっって、入学した時の高揚した気持ちは吹き飛んでしまい、焦燥感に追われるように勉強をするようになっていった。せっかく推薦を受けて、奈良から上京して、東京の進学校に進学したのに、そこで落ちこぼれになっってしまうというのは、想像すらしたくない結末なので、佐藤には死に物狂いで勉強する以外の道はなかった。

もっとも、授業が難しいと感じているのは佐藤だけではなかったよう、クラスの中でも、授業についていけないのでクラブを止めるという話がちらほらと聞かれた。例年半数くらいしかクラブに所属しないと聞いていたが、今年は7割くらいクラブに入ったらしいので、今年は特に多いのかと思っっていたが、脱落者が出て半数くら

いに落ち着くのが恒例なのだそうだ。

更に佐藤をがっかりさせる情報は、昼食時に太田からもたらされた。「なあ、俺、今日はじめて知ったんだけど、A組って成績上位者だけが集められた特別クラスなんだって。知ってた？」という太田の話に、親戚の知り合いが桜山高生の池島は、「何をいまさら」という反応を返していたが、佐藤にとっては全く予想外の話だった。「じゃあ、田中さんと高橋さんって頭いいんだ・・・」と実験参加メンバーのことを思い出した。

田中と高橋がA組。佐藤がC組で近藤がD組。A組以外はランダムにクラス編成されているらしいので、佐藤と近藤は同じレベルで田中と高橋だけが特別クラス。佐藤はこれまで、4人は同じ推薦で入学したので、学力も同じくらいだろうと無意識に考えていたが、すでに授業についていくのに辛さを感じている佐藤に対して、田中と高橋は特別クラスの授業を受けていると聞いて、突然距離感を感じてしまう。特に田中は同じ男子、高橋はいつも気さくに話しかけてくれる相手であったこともあって、突然感じた距離感にどう対処したものかと苦慮する。

佐藤は、もともと、入学以来、周囲と打ち解けるのに苦労していた。これは佐藤の性格というよりも、佐藤が自分のアクセントを気にしていて、なるべく自然な関東アクセントになるように気にしながらしゃべるため、どうしても話しにくく感じてしまったためであった。

ただ、この変換はかなり規則的なので、テレビで慣れた現代人なら、すぐに無意識にできるようになる。あとは、関東に存在しない単語にさえ気をつけられいだけで、実際、佐藤のアクセントは、本人が意識していたこともあって、すぐに関東アクセントに切り替

わっていた。しかし、一度固まってしまった自己イメージを覆すことはなかなか難しく、人と会話することに対して無意識の苦手意識が佐藤の中に刻み込まれてしまっていた。

そんな佐藤の学校面での苦悩とは別に、研究所では目覚ましい成果を遂げていた。実験に参加する高校生4人の中で、佐藤は初めてオーラの操作に成功して、その後も、安定的にオーラの操作に習熟していった。1ヶ月経って、オーラの操作を安定してできるのは佐藤だけで、他の3人からは、佐藤には超能力の才能があると言われるようになった。

4人が取り組んでいる課題は、10M先に置いた小さなメダルにオーラをぶつけて、サイコキネシスでメダルを動かすというものだ。メダルは実験初日に使ったものと同じものを使っている。オーラは目で見ることも手で触れることもできないので、オリハルコンでサイコキネシスを発生させることで初めて、操作している本人も、操作できていることがわかるのだ。

メダルの動く大きさは、単に手をかざすよりも2倍程度大きく動くことが目標だった。これは、つまり、オーラを10M先まで動かすだけではなく、さらにオーラを圧縮しなければできない。佐藤以外の3人は、まだメダルを時々ピクリと動かすことができる程度だが、佐藤だけは安定して5cmくらい動かすことができるようになっていた。

#10 学生生活（後書き）

佐藤くん、苦勞してます。でも、なんかこの高校、結構厳しそうです。勉強が大変で部活を辞めるとか、相当な感じがしますが・・・。

あと、田中と高橋は頭がいいという設定が追加されました。

1 1 "超"能力

ある日、いつものように恒例のオーラ測定が終わると、高橋が佐藤に話しかけてきた。「佐藤くん、オーラ操作って何かコツとがあるの？」高橋は、いつも佐藤に気さくに話しかけてくる。いや、高橋は誰に対しても気さくに話しかけるのだが、高校入学以来、若干対人恐怖気味の佐藤にとって、こうやって気さくに話しかけてくる高橋は、貴重な存在だ。A組が特別クラスと聞いたときには、戸惑いを感じたが、その後も普通に話しかけられているうちに、そういう緊張感も取れてしまった。

「うーん。あんまり、どうやってるのか、自分でもよくわかってないんですよ。金子さんに言われたように、手でボールをつかんで、それをメダルに向かって投げるようなイメージをしているだけで、特別それ以上何かやっているわけじゃないですから。」どうしても丁寧語が抜けないのは、まだ距離感を感じているからだろうか、と話しながらふと思った。

気がつくと、佐藤の周りに、みんな集まってきた。田中と近藤の他、金子と小野もその場にいた。「それは、あーしもやってるんだけど、ダメなんだよね。何でなんだろう？」と高橋は更に聞いた。しかし、聞かれても佐藤に答えられるものはなく、「うーん」と唸ってしまった。

すると、金子が、「高橋さんは、逆に、いつもどうやってるの？」と口を挟んだ。「え？えつと、・・・」と高橋はいつもの様子を思い出しながら答えた。「言われたとおりボールを投げるイメージをしているんですけど、まず、両手でボールを掴むようなイメージをして、次にそれを右手だけで頭の後ろの方に持ち上げて、そのまま前

に投げるようなイメージをしています。」

「あ、上から投げてるんだ」と佐藤がちょっと驚いたような声で言った。その声で、逆に佐藤以外の全員が驚いて佐藤を見た。「あれ？僕は下投げなんですけど、変ですか？」と佐藤が付け足した。

「あ、いえ、別に変じゃないと思うけど、ちなみにどうして下投げなの？」と金子が聞いた。

佐藤は、「えっと、つまり、あまりコントロールに自身がないから、上投げだとメダルに命中させられないかと思つて。ゴミをゴミ箱に投げ込むときとか、上投げの人もいるけど、僕は下投げじゃないと当てられないから」と答えた。「そっか。コントロールとか考えたことなかったけど、確かに投げるだけじゃなくて当てられないとだめだよな。考えてみれば、あたりまえだけど」と、高橋がつぶやいた。

その日のそれからの時間は、いろいろな動作のイメージを試してみ、それでオーラ操作にどういふ影響があるのかを確認する実験を最後まで続けた。遅れて参加した藤田も含めて、いろいろなアイデアを試してみ、高橋は佐藤と同じく下投げでオーラ操作が向上することがわかり、近藤は下投げよりも弓道のイメージをする方がよいことがわかった。

小野が、イメージする動作に対してどのくらい慣れ親しんでいるかが、オーラ操作に対する成功率の向上の鍵となっているのはいかという仮説を言い出したので、中学の時に吹奏楽部にいた高橋が、管楽器を吹くイメージを試してみたところ、オーラが強化されることがわかった。ただ、管楽器を吹くイメージとボールを投げるイメージを同時に行うことができないので、オーラをメダルに当てる実験には使えなかった。

また、残念ながら、田中には、相性のよい動作のイメージは、その日の最後まで見つからなかった。

いつもより遅くまで実験を行うことになったことを、車で送った金子は謝っていたが、4人は新しい発見に興奮していて、むしろ機嫌がよかった。遅めの晩御飯を食べ、風呂から上がった佐藤は、部屋に戻ると、冷静さを取り戻す頭で今日のことを思い出していた。

今日の発見の功績は、佐藤の手柄だった。佐藤は、今、研究所の中で、最も強いオーラを持って、人よりも早くオーラの操作に習熟してきている。その上、今日の発見であった。研究所での佐藤の評価は確実に上がっているということは、佐藤にも感じることができると。それは、佐藤にとつて嬉しいことであり、研究所は佐藤にとつて居心地のいい場所になりつつあった。

「だけど」と佐藤は思った。「それに、どういう意味があるんだろう。僕にできることは、目に見ることもできないし、触れることもできない、何か得体のしれないものが人よりたくさんあって、それを動かすことができるだけ。眼に見えることといったら、ほんの小さなメダルが数cm動くことくらいしかないんだよな。研究所以外の人には、誰にも言えないし、言っても誰も意味が分からないだろうし。」

佐藤は、思わず、小さなため息をついた。「学校の勉強は相変わらずについていくのがやっとだし、かといって運動もできるわけじゃない。オーラ操作で下投げにしたのも、上投げで的に当てる自信がなかっただけのことだし。・・・こうしてみると、本当にオーラ以外は何の取り柄もないな。」

それでも、佐藤には、さっきまで感じていた興奮、オーラに対する自信と優越感を拭い去れない自分が残っていることを感じていた。しかし、雑念を振り払うように鞆を開けて、明日の予習のために教科書とノートを取り出す。「超」能力か。オーラが超能力じゃなくて、誰もが理解して認めてくれる、普通能力だったら、こんなことは考えなくてもいいのにな」と思ったが、それ以上考えても仕方ないと諦め、椅子に座って英語の予習を始めた。

1 1 "超" ; 能力（後書き）

誰でも何か一つは才能があると言ったりしますが、あまり使い所のない才能だったり、そもそも人に理解されない才能だったりすると、結局才能がないのと変わらないかもしれないですね。

佐藤の超能力はまさにそんな状態なわけで。

でも、使い道のわからない才能の使い道を考えるのも、人生の醍醐味だったりするわけですが。

1 2 中間試験

それからしばらくして、1学期の中間試験が始まった。試験期間中は、学業に集中するために、実験はお休みとなった。佐藤は、試験が始まるまでとても不安で、試験前1週間は、授業と食事、睡眠、入浴の他はほとんど机に向かっていた。

推薦を受けて、自分の実力よりも上の高校に、奈良から上京して、寮生活をしながら通うというのは、想像以上のプレッシャーで、なんとか最初の試験で結果を残して、この先もやっていけるといいう自信を持ちたいという、焦りに似た思いが佐藤の原動力になっていた。入学当初はそれほどの焦りはなく、むしろ開放感を感じていたはずだったのだが、その変化を振り返る余裕すら、佐藤は失っていた。

試験が始まると、むしろ佐藤は落ち着きを取り戻した。試験の内容は、佐藤にとってはやはり難しかったが、想像して恐れていたほどは難しくなく、手が出るところは手が出る内容だったためだった。クラスメイトの太田や池島と試験後に話した感じでも、佐藤が特に悪い点数をとることはなさそうだという観測を強めた。試験結果が帰ってくるまでにはまだ1週間くらいはかかるものの、多分なんとなかなるだろうという、ささやかな自信が芽生えてきた。

試験最終日の最後の試験が終わった後、佐藤は太田と池島と連れ立って、打ち上げと称して、息抜きに少し遊んで帰ることにした。といっても、昼ごはんをファミレスで食べて、1時間くらいカラオケをして帰るだけだった。

さらに、佐藤には、他にもやっておきたいことがあった。携帯電話を買っておきたかったのだ。寮の部屋には電話はあるが、着信は

外線も受けられるものの、発信は内線しかできなかった。そのため、実家に電話するときは、一旦ロビーにある公衆電話から実家に電話をかけて、部屋の外線を折り返してもらう必要があった。電話は週に一度くらいしているのだが、やはり不便なのと何かあったときに困るということで、携帯電話を持つ許可が最近親から得られたのだ。

ファミレスで昼ごはんを食べて、携帯電話を買って、カラオケに行つて、佐藤は久々に開放感を味わっていた。なんというか、高校生になった、という気分を実感していた。佐藤は、特別歌える歌も少ないし、カラオケも中学の時に一度行っただけだった。家庭の方針であまりテレビを自由に見れなかったし、特に見たいとも思っていないかった。でも寮の部屋にはテレビはない。そんなわけで流し歌には全く疎かったが、それでも探せば何かしら歌える歌はあつて、太田も池島も、佐藤が風変わりな選曲をしても特別変な顔もせずに乗ってきてくれる。佐藤にとって、太田と池島は全く気のおけない相手であつた。

中間試験の後から、佐藤はようやく歯車が噛みあつてきたような気がしていた。学校生活に対する控えめな自信を取り戻し、周囲とのコミュニケーションの違和感も解消しつつあつた。友人関係も、太田と池島以外と会話することも多くなつてきたし、必要以上の丁寧語もなくなつて、自然な会話ができるようになってきた。勉強面でも、予習復習の力加減を覚えてきて、以前よりも効率良く時間を使えるようになってきた。予習を忘れてしまったときでも、周囲の友人にノートを借りて書き写すくらいのアドリブもできるようになった。端的に言うと、佐藤もようやく高校に馴染んできて、普通の桜山高校生になつてきたのだ。

試験の結果は普通だつた。可もなく不可もなく。5教科のうちで平均点をわずかに超えたのが3教科、わずかに下回つたのが2教科

だった。点数を教えあっているわけではないが、実験に参加しているあとの3人のうち、田中と高橋はさすがに高得点だったようだが、近藤は佐藤よりも若干悪かったようだ。近藤は試験結果にがっかりしているようだった。意外なことに、田中も試験結果には不満のようだった。佐藤からすると、何が不満なのかと思うのだが、田中は当初、「恥ずかしいほど悪いから言いたくない」と言っていた。

「はあ。徹夜して頑張ったのになあ」と、今日返ってきたばかりの数学の試験について、近藤がつぶやいた。「何の話？」と声をかけてきたのは、さつきまではいなかったはずの小野だった。「そういえば、小野さんって、東大なんですよ」と、田中が横から声をかけた。「そうだけど、それが？」と小野は話の意図がつかめずに答える。「いえ、今、中間試験の話をしてたところなので。小野さんって、どうやって勉強していたんですか？」と田中が言う。

「あー、勉強の話か。そうかそうか。高校生だもんな」といって、小野は少し考える。「僕の話が参考になるかどうか、あやしいけど、僕の場合は勉強するのが楽しかったから、空いてる時間はずっと勉強してたね。もっとも、勉強っていつても机に向かって問題集をずっとやってるって感じよりも、面白そうな英語の本を借りてきて、辞書を引きながら読んでたりとか。そういうえば、あんまり授業とか聞いてなかったかもしれない。」

確かにあまり参考にならないと、佐藤は思った。多分、他の3人も同じ事を思ったに違いなかった。ところが、小野が続けて、「あ、もしわからない所があったら、質問してくれば教えてあげるよ」と言っただのを聞いて、「こんな最高の家庭教師候補がこんな近くにいなから、なぜそれを試験前に思いつかなかったんだらう」と思った。「えっ、いいんですか？」と高橋が聞くと、「うん。まあ、あんまり上手く説明できるかわからないけど」と小野は答えた。

「それじゃあ」といって、高橋が早速鞆を探り始めたのをみて、小野が慌てて、「あ、ちょっと待って。その前に佐藤くんに用があるから」と言った。

「え？僕ですか？」と、佐藤は聞き返した。「うん。金子さんがちょっと話があるってことで、佐藤くんを連行してこいって言われて」と小野が答えた。「連行」というのは小野のいたずらっぽい表現だとは思ったが、わざわざ別の部屋で話をしたのはヒヤリングの時くらいだったので、いつもと違う雰囲気には少し緊張した。「何の話ですか？」と佐藤は聞いてみたが、「まあ、行ったら分かるよ」と言って、小野は答えてくれなかった。

小野に連れられて、会議室まで来ると、金子が先に来て待っていた。「あ、佐藤くん。わざわざごめんね」と金子が言う。「いえ。大丈夫です」と佐藤は答える。「で、早速なんだけど、佐藤くん、サイコネシスを世の中の役に立ててみたいと思わない？」と金子が言った。

12 中間試験（後書き）

中間試験まで来てようやく一段落です。

佐藤の場合、入学時の成績は下の方だったはずなので、平均点というのはかなり頑張った結果ですね。

小野は、もともと勉強が好きなタイプなので、そもそも勉強の苦痛をどう乗り越えるかみたいな根本的な問題が始めから解決されているので、勉強の仕方を聞いても意味がなかったりします。答えを教えてください、なら的確に答えてくれそうですけど。

13 超能力兵器

「・・・何ですか？」佐藤は金子が何を言いたいか分からず、少し間を空けて聞き返した。「だからね、サイコネシスを世の中の役に立ててみない？」と金子は繰り返した。「話が見えないんですが」と佐藤が答える。「うん。見えないよね。でも、うまい説明が難しくって」と金子は言って、少し考えて、「ものすごく簡単に言うと、火事が起きている現場に行つて、そこにオーラを撃ちこんで消火するっていうのを手伝ってもらえないかと思っているんだけど」と言つた。

「オーラを撃ちこんで消火？」と、佐藤は違和感を感じた。これまでの理解では、オーラは物質との相互作用がないため、一般の物理現象に対して干渉できなかったはずだった。その唯一の例外がオリハルコンで、オリハルコンに触れた時のみオーラは物理現象を引き起こすのだ。だから、火事をオーラで消火するなんてできるはずがない。

「金子さんは、できるはずがないことを、どうして僕にさせようとするのだろう」と考えたところで、佐藤はすっかり忘れていたあることを思い出した。入学式の時に図書館で見た、サイコネシスの秘密。しかし、それが本当ならば、ここからのやり取りは慎重にしたほうがいい。

「どうしてその話を僕に？」と佐藤は聞いてみた。核心に触れる前に、まず外堀から聞いていくほうがいいと思つたのだ。「佐藤くんのオーラ操作の上達が早くて、もう私と遜色なくらいの威力が出るようになってきているから、十分戦力になるかなと。もちろん当初の実験の範囲には入らないから、断つてもらっても構わないんだ

けど」と金子が答える。

「戦力・・・というほどのことができるような気がしないですけど」と、微妙に引つかかったキーワードを繰り返して、佐藤が言う。「いやいや、佐藤くんはすごいよ。多分もう1週間もすれば、私なんか完全に超えちゃうよ。きっと」と金子が言った。

このままでは埒があかないと思った佐藤は、少し踏み込んでみることにした。「金子さんは、どうしてそんなことをやっているんですか？」と聞くと、「どうしてっていうと、まあ、もともとは人から頼まれたことではあるんだけど、一応、これもなかなか興味深い研究の一つなんだよ。それに、研究は研究んだけど、実際にサイコキネシスが人の役に立っているっていうのを実感できるっていうのは、やりがいもあるんだよね」と金子は答えた。

「・・・その頼まれた人っていうのは？」と佐藤が恐る恐る聞いてみた。防衛省や軍需企業の関係者で、兵器開発の担当者のようなものを想像していた。ところが、「そのうち佐藤くんも会う機会があると思うけど、浅田さんの高校の同級生で、宮内庁に勤めているちょっと変わった人がいてね、なんか先祖代々伝わる術でオーラが操作できるみたいなんだけど、その人に頼まれてね」と金子が言った。

「え、宮内庁？防衛省じゃなくて？」と佐藤は驚いて、うつかり声に出して言うてしまった。佐藤の予想外の反応に、金子も「え？防衛省？」と驚く。そのやり取りを傍で聞いていた小野は、何かに気づいたのかニヤリと笑う。金子が小野の様子に気づいて「小野くん、何か知ってるの？」と聞いた。小野は佐藤に「Wikipediaを見たんじゃない？」と聞いた。

佐藤は、一度見たきりのサイトの名前をすっかり忘れていたため、Wikipediaが何を意味しているのかピンと来なかったが、インターネットの件を話さないでうまく取り繕う方法が思いつかないため、観念することにした。「前に、インターネットでサイコキネシスのことを調べたら、サイコキネシスは軍事技術で、そのせいで最高機密扱いになっているって書いてあったんです」と佐藤は説明した。

「それ、多分Wikipediaだよ。あれは便利だけど、書いてあることが本当のこととは限らないから気を付けないと。要出典タグとかついてなかった？」と小野が笑みを浮かべたまま言った。最後のところは何を言っているのか分からなかったが、佐藤はその前半の話を聞いて、「え、じゃあ軍事技術ってというのは？」と聞き返した。

それに対する返事は金子がして、「サイコキネシスはまだ海のものとも山のものともわからないから、可能性としては軍事技術っていうのもあると思うけど、まだそこまで応用段階には進んでいないんじゃないかな。少なくとも、日本では防衛省の関連でサイコキネシスで何かやっているって話は聞いたことないけど。アメリカとかだと国防予算で基礎研究的なところをやる可能性もあるのかもじゃないけど、兵器にできるほどの大出力のオリハルコン合金が開発された話は聞いたことがないかな」と答えた。

「超能力兵器・・・」と言って、クスクスと笑っている小野を見て、佐藤は顔中真っ赤になってうつむいてしまった。小野に笑われていることよりも、子供っぽい妄想を信じこんで、世のなかの裏事情を知っている気持ちになって優越感を感じていた自分が恥ずかしくなったためだった。

金子が「小野くん！」といつまでも笑っている小野に釘をさすように言った。「ごめんなさい。昔、同じような誤解を盛大にやったことを思い出して」と小野が謝りながら言った。「あの Wikipediaの記事は、畏ですよ。他にも引っかけかかっている人いるんじゃないかな」と付け加えた。それを聞いて、他にも同じ間違いをした人がいるらしいことに、佐藤は少し安堵した。

落ち着いたところで、金子が再度問いかけた。「誤解も解けたみたいだから、話を戻すけど、佐藤くんは興味ある？」佐藤は、元の話が何だったかを少し考えて、話のきっかけになった疑問を思い出した。

「オーラで火が消せるって言うのは本当なんですか？」と佐藤が聞くと、「まあ、消すっていうか、直接消すんじゃないんだけど、・・・、ちよつと説明すると長くなるかな」と金子は言って、ホワイトボードのところまで歩いて言った。何か小難しい話をするときにホワイトボードを使うのは、研究所の人々の習性みたいなものだということを、佐藤は2ヶ月弱の間に理解していたので、また頭を使う話かと覚悟して話を聞き始めた。

13 超能力兵器（後書き）

最近、PCだけじゃなくて携帯でも書くようにしたので、少しは更新速度が上がるかもしれないです。

活動報告を書いてみました。裏話的なこととか、そっちに書いてみようかと思うので、興味があればそちらも見てみてください。

佐藤の盛大な勘違いがやっと解けました。入学式の時から2ヶ月弱も誤解していたんですね。

ところで、もしこの技術が急速に発展して、最終的に大量破壊兵器的なものができてしまったとして、この時点でそれを予見できなかった科学者には、倫理的な罪はあるんでしょうかね。

14 悪霊退治

超心理物理現象「サイキネシスは、精神エネルギー」オーラがオリハルコンを触媒にして物理エネルギーに変換されることで引き起こされるといふプロセス以外に、「自然発火現象」と呼ばれるプロセスが存在していることが知られている。オリハルコンを使ったプロセスは実験室での再現が容易なため、かなり詳しく現象が分析されているが、自然発火現象は屋外で突発的に発生する現象であり、実験室での再現に成功していないため、その詳細はほとんど解明されていない。

オーラは生命体の周囲に偏在するが、生命体から離れたところにも存在できないわけではない。特に、人口密集地はオーラ濃度が高い場所が多く、新宿駅などは1kPキロサイコほどの濃度がある。ちなみに、1kPはすべてのエネルギーを気温上昇に使うと気温が1上がるほどのエネルギーである。佐藤の手のひらは、40MP「4万kP」なので、新宿駅のオーラは濃度にして佐藤の手のひらの0.0025%しか存在しない換算ではあるが、佐藤のオーラは佐藤の身体の周囲にしか存在しないのに対して、新宿駅は駅全体に存在するので総量としては結構な量になる。

余談だが、ガソリン1リットルのエネルギーが約35MJなので、佐藤のオーラ濃度のオーラを1立方メートル集めると、ちょうどガソリン1.15リットルと等しいエネルギーで、燃費20kmの車に例えるとおおよそ23km走らせるくらいのエネルギーである。

環境中のオーラ濃度が十数MPくらいになると、オリハルコンの助けを借りずに、物理エネルギーへの変換が起きることがあるという報告があり、街中でそれが起きると、大抵の場合火事になる。そ

うという火事はオーラ濃度が十分低くなるまで鎮火しづらい傾向にある。濃度が高い間は自然発火現象が続くため、放水によって温度が下がり難いためだ。そういう時、オーラが滞留しているところに、別のオーラをぶつけてやると、オーラの相互作用で滞留しているオーラが拡散され、その結果、自然発火現象が停止して消火がしやすくなる。

この説明は、現在のところ最も一般的に受け入れられている仮説で、自然発火現象を最もうまく説明できていると考えられているが、自然界だけで観測される現象で、実験室で再現できないため、その細部は不明な点も多い。最大の疑問は、なぜオリハルコンなしにサイコキネシスが発生するのかという点である。なお、オーラに働く相互作用についても、不明な点が多いが、こちらはある程度実験室で再現ができるので、オーラ測定器の機能上の限界はあるものの、徐々に説明が進んでいる。

.....

「そんなわけで、実験室で再現できないなら、こっちから出向いていつて何が起こっているのかを調べてみようっていうことで、消火活動のお手伝いをしようという話になったんだよ」と金子が言った。なるほど、と佐藤はうなずくが、何か引つかかっている気がして、首を傾げる。しかし、何が引つかかっているのかいまいちわからない。

そこへ小野が「そもそも、火事はたくさんあるのだから、自然発火現象が引き起こした火事はどの火事なのか、どうやって調べるのかって思っていない？」と聞いてきた。佐藤は、一瞬面食らったが、まさにそのことが引つかかっていたと気づいて、うなずいた。小野は、「原理的には、事前にオーラ濃度の地図を作っておけば、あと

は火事が発生したときに、オーラ濃度が自然発火現象が起きるほど高い場所で起きた火事かどうかを確認して、現場に向かうかどうかを決めればいいってことなんだよ」と説明した。

ところが、「まあ、とはいえ、それをこの研究室でやるのは無理があるんだけどね」と小野が続けた。

「無理なんですか？」と佐藤は聞く。それに対する返事は金子が答えた。「オーラの濃度は時間と共に変化するからね。毎日都内をオーラ測定器を持って隈なく走りまわるのは不可能だから」といつて、なぜか不意そうな顔をして、少し間が開いた。すると、小野がその後を受けて「例の宮内庁の人っていうのが、先祖代々陰陽師の家系だとかで、代々伝わる秘術で広範囲のオーラの分布を把握できるらしくって、ついでに警察や消防によく分らないコネがあるらしくって、そこから横流しされた情報を組み合わせて、自然発火現象の情報を教えてくれるんだよ」と言った。

「まあ、話だけ聞くとオカルト臭たつぷりの話で、眉がつばでべたべたになりそうだけど、なにせオーラのことはまだ全然わかっていないことばかりだから、そんなオカルトっぽいこともあるのかもしれないよ。なんにしろ、オーラ測定器を持って現場に行くと、毎回必ず自然発火現象が起きてるから、情報は正確なんだよね」と、小野が続けた。「何回か、その秘術の中身を教えてくれるように頼んだんだけど、先祖代々の『秘術』だからって言って、教えてくれなかったんだよね」と、金子が不意な顔のままつぶやいた。

佐藤は、金子の顔の理由を考えてみたが、科学的な研究である超心理物理学の実験が、オカルトな話に頼らざるを得ないところになだかまりがあるのかもしれないと思った。

金子のわだかまりとは別に、佐藤には別の懸念があった。「確かに、話は信じてもいいような気がする。でも、今の実験に加えて、これに参加して勉強の時間とか大丈夫かな。」しかし、中間試験を予想以上にスムーズに乗り切った佐藤は、高校生活に自信を持ってきていたところだった。その上、これまで何の役にも立たないと思っていたサイコキネシスが、実際に役に立つということを実感できるということにも魅力を感じていた。「もし両立が難しいということになったら、その時に言って、止めればいいか」と自分を説得した。

「分かりました。やります。」

佐藤の同意を言んだ金子は、連絡方法の確認をした。ちょうど佐藤が買ったばかりの携帯電話を連絡手段にすることにして、火事が起きたら金子が佐藤にメールをして、予定が空いていれば、5分以内に佐藤が金子に電話することになった。電話を受けた金子が佐藤を車で拾って現場に向かう。電話がなければ金子がひとりで向かうことになる。佐藤と金子と、ついでに小野は、それぞれの携帯の連絡先を交換した。小野もこのプロジェクトに参加しているためだ。

「そういえば、このプロジェクトのコードネームってもう聞いたっけ」と小野がいたずらっぽいな笑顔で言った。佐藤が首をかしげると、小野が「悪霊退治って言うんだよ」と言って「生命体を離れて滞留しているオーラを幽霊に見立ててるんだけど、実際、幽霊って呼ばれてきたものも、浮遊してるオーラだったのかもしれないね」と続けた。「オカルトだ」と佐藤は思った。「東大で頭がいいはずの小野が、こういう話に嬉々としている様子は、イメージが違うな」と佐藤は思っていた。

それから1週間経ったが、悪霊退治の出動要請は来なかった。聞

いたところによると、一度あったのだが、平日の昼間で確実に授業中の時間帯だったので、メールを送らなかったのだそう。

気がつくともう6月になっていて、7時頃まで日が暮れなくなっていた。その日は研究所に行かない日だったので、早めの晩御飯を食べた後、まだ外が明るいのを見て寮の近くを流れる川の堤防を散歩することにした。日中は時折暑い日もあるが、夕方はまだしぶん涼しい。堤防の上はあまり人通りはなく、佐藤は沈む夕日を見ながらリラックスした気持ちで歩いていた。「ジー」という虫の声がどこからか聞こえてくるが、佐藤は何の虫かは分からなかった。

と、その時、佐藤の携帯が鳴った。見ると、メールが届いていて、差出人は金子だった。「とうとう来た」と佐藤は思った。すぐに電話をかけると金子が出た。「今、どこ？」と金子に問われ、「寮の裏の川の堤防です」と答えた。「じゃあ、10分くらいで寮に着くから、バス停のあたりで待ってて」と金子が言った。電話を切った佐藤は、急いで寮に向かった。

#14 悪霊退治（後書き）

やっとなんか超能力っぽいことができるようになりました。でも、まだ地味ですが。

オーラの量の計算をあれこれやってみて、多すぎず少なすぎずというようなところを考えてみたのですが、計算の方法がよくわからないところとかもあって。例えば、ものを空中で静止させるにはどれだけのエネルギーが要るんでしょうね？

コードネームですが、最初「ゴーストバスターズ」にしようかと考えたのですが、結局、漢字を使うことにしました。後の話とのつながりを考えて。

15 初実戦

20分程で、佐藤たちは現場についた。現場は低層住宅が密集する住宅地の真ん中で、現場ではすでに消防隊の手で消火活動が行われていた。現場に着くまでの間に金子から聞いたことによると、出火はおそらく1階で、消防隊が現場に着いた時点ではまだ火はそれほど大きくなかったらしい。ところが、消火活動にも関わらず火の勢いは止まらず、すでに2階にまで火の手が及んでいた。幸い、出火時に家の中には誰も人がいなかったため、現在のところ死傷者はいなかった。

現場近くに車を止めると、人混みの中を急いで現場に走った。非常線の内側に入ると、すでに小野がいて慌ただしくしていた。金子は「五条さん」と誰かに声をかけた。佐藤がその方向を見ると、身長の高いスーツを着た男性が立っていた。その五条と呼ばれた男は、声のする方向を振り返って、軽く会釈をし、「その子が例の？」と言った。金子は、「そうですね」というと佐藤の方に振り返って、「この人が例の宮内庁を人だよ」と言った。佐藤は会釈をして、「佐藤です」と挨拶した。

「早速だけど、状況は厳しめだよ」と五条は厳しい声で言った。小野が見せてくれたオーラ測定器の値は50kPを示していた。通常、人口密集地でも1kPが上限にも関わらず、現場から10m以上離れた地点でこの値ということは、火事の建物内はどうなっているか、想像できる。「おそらく、最も濃度の濃いのは、まだ延焼があまり進んでいない2階で、濃度は30MP程度はある」とかなり確信を持った口調で、五条は言った。

「測定器も持たないで、どうしてこんなに自信を持って言い切れ

るんだろう」と佐藤は思ったが、金子も小野も、そのことに疑問を持つていないようなので、佐藤も何か理由があるのかと納得することにした。

「ハナがいない。」突然の叫びに佐藤が驚いて後ろを振り向くと、泣いている小さな女の子が火事に向かって走ろうとしているところを、母親らしい人に抱きしめられて止められているところだった。女の子は「ハナ、ハナ」となおも叫んで泣き続けていた。

佐藤はその様子にしばらく目を奪われていたが、「30MPだと私一人だと難しいね」と金子が言うのを聞いて、我に返った。「そのため、佐藤くんに参加してもらったんだよ」と五条が言うのを聞いて、佐藤は驚いて声の主を見つめる。五条は、佐藤の視線を受け止め、何事もないように佐藤を促した。「別に特別なことはないよ。ただいつもやってるように、オーラを2階に向かって投げれば大丈夫。」

大丈夫と言われても、佐藤は成功する自信がなかった。「あそこはちよつと遠すぎると思うんですが。」と言うと、五条は、「心配いらないよ。ただあそこまで届くイメージさえ持てば大丈夫。オーラには重力は影響しないからね」と答えた。

いつまでも泣いている女の子の声を後ろに聞きながら、佐藤は燃え盛る家の2階を見た。「あの中には、まだ誰が残っているんだろうか。だとすると、これから僕がやるうとしていることは、その人の運命も変えてしまうかもしれない」と考えて、プレッシャーに身震いした。「そもそも、僕に、本当にあの火事を止める力なんてあるんだろうか。」佐藤の経験と常識は、目の前の火事に対して、佐藤が無力であることを示していて、失敗した時の恥ずかしさを考えると尻込みして逃げたくなかった。

しかし、泣き止まない女の子の声に、「誰かが中にいるならのんびりしている時間はないんじゃないか？」とも思っていた。しばらく葛藤した後に、「オーラは目に見えないんだから、何をやっててもどうせ僕が何をやってるか、本当に分かる人なんていないわけだし」と思っ、「失敗しても、誰かに文句を言われることでもない」と、やや開き直った。

心が決まった佐藤は、いつものように的に向かって、方向と距離を覚えたまま目をつむり、頭の中の的をイメージする。そのイメージを残したまま、両手を前に伸ばすイメージをし、両手の手のひらを合わせて、手の中に野球ボール程度の大きさのものがあることるを想像する。そのままそれをイメージの中の右手で掴んで、後ろに振りかぶる。そして下手投げでそのボールを的に向かって投げつける。ボールは真っ直ぐに飛んで、的に当たる。

全部が終わって目を開くまで、佐藤には全く手応えはない。ボールを掴む感触も、手を振る感覚も、ボールが手から離れる感触も、的に当たった手応えも何もない。ただ全ては佐藤の想像の中の出来事に過ぎない。実験室の場合は、目を開けた時に的のメダルが移動しているのを見て、初めて成功したことが分かるのだが、今回はそのメダルはない。何が起きるのか想像もつかないまま、佐藤は目を開けた。

「成功だよ、佐藤くん」と五条が言った。「2階のオーラの集まりは、吹き飛ばされて消えたから、もうすぐ火も消えるよ。お疲れさん。」佐藤が2階を見上げると、火はまださつきまでと同じように燃えていて、すぐに消えそうな気配はない。小野の持っている測定器を見るとむしろさつきより数値が上がっている。「本当に成功したのかな。」佐藤が不安を口にすると、金子が「もうちょっと見

てればわかるよ」と言う。すると見ているうちに、消防隊の放水で、さっきまで全く衰えなかった火の勢いが、見る間に鎮火していった。

ここまで佐藤が現場に着いてからわずか10分強の出来事だった。佐藤は信じられない思いで消火の進む現場の様子を見ていた。さっきまでどれだけ放水しても一向に収まらなかった炎が、見る見るうちに小さくなっていく。その理屈は、以前、金子から聞いていたもので頭では理解していたが、目の前で起きている現象はすぐに納得できるものではなかった。

しかし、これがさっきの自分の行為の結果であることは間違いないと感じた。というか信じたいと思った。そして、周囲からの視線は、それを信じてもよいと語っていた。佐藤は、自分のなかの自信と優越感が大きくなってくるのを感じていた。

#15 初実戦（後書き）

人間測定器の五条が登場しました。金子や佐藤にオーラの操作を任せているのは、五条がオーラを操作できないからなんです。で、なんでも操作できないかはそのうち判明すると思います。

活動報告を更新するようにしたので、よかったら見てやって下さい。お気に入り登録するとユーザーページで更新の確認ができるようになります。

「じゃあ、僕はこれで。」火が小さくなるのを見ながら、佐藤はそう言った。金子はもうしばらく残って測定データの整理を手伝っていくことになったが、もう遅いので、佐藤は五条が寮まで送っていくことになったのだ。「うん。今日はありがとう。また明日、研究所でね」と金子が言って、佐藤は五条に連れられてその場を離れた。さっきまで泣いていた女の子は、まだぐずっていたが、火が鎮火したことで落ち着きを取り戻しつつあった。しかし、「ハナ」はまだ見つかっていないようだった。佐藤は、後で金子に事の顛末を聞くことにした。

車に乗り込むと、五条は佐藤に話しかけてきた。「そういえば、自己紹介をまだしていなかったね。僕は、五条慎一郎といって、宮内庁で占いのようなことをやっているんだけど、超心理物理センターの浅田さんの紹介で、金子さんたちと協力して悪霊退治のプロジエクトをやっているんだよ。」

「確か、君は、奈良の出身だったっけ？」と聞かれて、佐藤は「はい」と答えた。「僕も、年に一度くらいは奈良に行っているんだよ。春日大社って知ってる？」もちろん、佐藤は知っている。奈良公園にある超由緒正しい神社だ。「はい」と答えると、「あれが、僕の家のお氏神様なんですね。仕事柄もあって、最低でも年に一度は行かなきゃいけないんだよ」と五条は言った。

佐藤はその話に関心少し驚いた。なんといっても春日大社は余裕で1000年以上は昔からある超古い神社で、そこが氏神ということとは五条家もそれに匹敵する歴史があるということになる。とはいえ、それ以上のことは知らないし、そのことについてそれ以上聞い

たほうがいいことも思いつかなかったので、「そうなんですか」と平凡な返事しか返せなかった。

五条は、特にその話をそれ以上続けるつもりはないようので、「ところで、さっきの佐藤くんはすぐかつたね。多分、80MPくらいは出てたんじゃないかな？」と違う話を出してきた。そこで、佐藤は気になって聞いたことを聞いてみることにした。「五条さんは、オーラの強さを測定器を使わないでも分かるみたいですけど、どうやって測定しているんですか？金子さんは、秘術だと言っていましたけど。」

それに対し、五条は「金子さんから話を聞いてるなら、僕の家系が陰陽師の家系だって話も聞いたと思うんだけど、僕の家は特に悪霊退治を専門にしてるんだよ。それで、悪霊とか霊的なエネルギーとかを感じる技術が代々伝えられてきたんだけど、その悪霊とか霊的なエネルギーとかが、いわゆる精神エネルギー、つまりオーラと同じものだったんだね。だから、オーラの強さとかは測定器とかなくとも分かるんだけど、じゃあ、それがどういう仕組みで分かるのかって聞かれると、それは僕にも分からないんだよ。だから、まあ、秘術としか言いようがないよね」と言った。

「……」佐藤は、五条の分かったような分からないような説明を聞いて、どう相槌を打ったものか分からなかった。しかし、その次に五条が、「あ、でも、もしかしたら、佐藤くんでもできるようになるかもしれないよ」と言ったことで、佐藤の好奇心が揺さぶられ、思わず、「え、どうやってやるんですか？」と聞いた。

「やり方っていうのはなくって、感じられるかどうかはほとんど才能なんだけど、そもそもこの能力の開発には指導者が必要なんだよ。ていうのは、オーラの濃度の違いを指導者が指摘しないと、オ

オーラを感じる能力はあっても、その感覚とオーラの濃度の対応付けを覚えることができないからね。対応付けを覚えないと、ただ得体のしれない感覚があるだけでしかないし、使っていないとほとんど鈍感になっていくから。でも、佐藤くんの場合、オーラ測定器があるから、指導者がいなくてもその感覚を磨くことができるかもしれないよ」と五条は答えた。

五条の話は興味深かったが、それだけでは参考にならない情報だった。しかし、やはり新しい能力というのには興味があったので、もう少しヒントが欲しいと思った。そこで少し考えて、「その感覚って、具体的にどんな感覚なんですか？目で見えるとか、肌で感じるとか、あるいは音が聞こえるとか」と、佐藤は聞いてみた。

「五感とは別の感覚だから、他の感覚とは似てる似てないというか別物なんだよね。他の感覚とは直接的には干渉しないから、オーラが強いと眩しくて何も見えないとか、うるさくて何も聞こえないとかってことにはならないし。気になって集中できないってことはあるけどね。でも、強いて言えば、視覚と触覚の中間くらいの感覚かな。視覚は遮られなければ無限の彼方まで見えるし、逆に触覚は触ったところしか感じないけど、オーラを感じるのは、自分のオーラが届く範囲内なら空間的に把握できるんだよ。手を伸ばして触る感じかな。でも、視覚や触覚とは違って、物理的には遮られないけどね」と五条は答えた。

「ということとは、五条さんは東京全部にまでオーラを広げることができるとですか？」と佐藤はかなり驚いて聞き返した。五条がオーラの自然発火の現場を知るために、かなり広い範囲でオーラの分布を監視していることは、以前金子から聞いていた。今の話が本当なら、その範囲すべてにオーラを広げることができないと、監視できないことになる。

「正しくは、東京全部じゃなくて日本全部だけだね。ただ、それはさすがに僕の力というより先祖代々の秘術の力ってことになるんだけど、もう寮につくから、この話はまた今度にしようか」と言って、五条は車を止めた。佐藤はそこで初めて、自分が寮の前にいることに気づいて、その場で五条と別れ、自分の部屋へと戻った。

#16 陰陽師（後書き）

春日大社が氏神ってことは、藤原不比等の流れを汲んでるってことです。まあ、それはほとんど物語に関係しないと思いますが、陰陽師といえば安倍晴明とか土御門家（晴明の直系）ですが、実際の人物は面倒だったので、架空の人物を作りました。

#17 スケッチブック

部屋に戻った佐藤は、大浴場の使用時間が終わる前に風呂に入り、予習をするために机に向かった。しかし、さっきまでの興奮が残っていて、なかなか勉強が手につかなかった。集中力を欠いたまま、机の前の本棚の本やノートを眺めながら、今日の出来事を思い返していた。

実戦、という言い方が適切かどうかはよく分からないが、今日の出来事は佐藤にとっての初の実戦だった。そして、その実戦で、佐藤は十分すぎる活躍ができたのだ。興奮しないわけがなかった。しかし、その反面、冷静な部分の佐藤は、これが持つ客観的な意味をよく考えるようにしつこく促してくる。「浮かれすぎじゃないか？」

今日の活躍は、研究所の人ならすぐに理解してくれるだろう。五条も、高橋たちも同じだ。でも、それ以外の人は相変わらず理解してくることはないだろう。目で見えないものを目に見えない力で吹き飛ばしたら、火事が消えましたという話に説得力があるとは思えない。そもそも秘密保持契約があるから、話すことすらできない。結局、状況は何一つ変わっておらず、勉強を頑張っているいい大学に行くことが、目下の最大かつ唯一の目標であることに変わりはない。

しかし、それでもなお、自分が持っているかもしれないオーラとサイコキネシスの才能について、興奮を抑えきえることはできないことに気づいていて、その気持ちをどう制御したらいいのか、困っていた。「今すぐ、このつまらない数学の予習を投げ捨てて、オーラ制御の練習と、今日、五条さんから聞いたオーラを知覚する能力の開発に取り掛かりたい。」そう思う気持ちを抑えて、数学の予習を

進めることは、困難を極めた。

そういう中途半端な気持ちのまま机に向かっていた佐藤は、何気なく眺めていた本棚に立てられた本やノートの中から、懐かしいノートを見つけた。それは使いかけのスケッチブックだった。中学の時、佐藤は美術部所属の帰宅部員だったのだが、学校で絵を描かないだけであって、絵を全く描かないわけではなかった。むしろ、絵を描くことは好きだった。ただ、佐藤が絵を描くときは、対象を見ながら描くことはなく、自室で頭に記憶したものを思い出しながら描くのが好きだったので、学校の部室で絵を描くことがなかった。けなのだ。それに、佐藤は、自分の絵を他人に見られることを恥ずかしがっていた。

見つけたスケッチブックは、中学校の時に使っていたもので、まだ紙が余っていたからすぐに取り出せる本棚に立てておいたものだった。入学後、勉強が忙しくなって、そこに立てかけたことをすっかり忘れていたのだ。中を見てみると、上京する直前まで描いていた絵があつた。久しぶりに自分の絵を見て、しばらくじつと鑑賞していたが、不意に何か新しい絵を描いてみたいと思つた。もう勉強しようにも集中力が切れてしまつていたので、気分転換に数力月ぶりに絵を描くことにした。

「何を描こうか」と佐藤は考えた。学校、寮、研究所。オーラがメダルに作用してメダルが跳ね上がる瞬間を描くと面白いかと思つて、しばらく考えていたが、オーラの視覚的なイメージを固めることができなかった。断念することにした。その後、人物を描こうと決めて、誰を描こうかと考えて、すぐに高橋を描くことに決めた。絵を描こうとした時、普段から一番よく観察していて印象に残っていたのが高橋だったことに気づいたのだ。

佐藤の絵は、授業中に描くノートの落書きの延長上にあるので、画材はたいていシャープペンシルのみだった。スケッチブックの新しいページを開いて、これから描く絵の大まかなあたりをつけた後、目のあたりから描き始めた。佐藤の画風は、記憶を頼りに描くにもかかわらず、写実的だった。佐藤は記憶をたぐりながら、ペン先に集中する。

佐藤の記憶の中にある高橋は、金子に質問をしているところだった。高橋は頭の回転が速い上に物怖じしない性格らしく、金子や藤田が新しい話をする、必ず何か質問していた。その目は好奇心に溢れ、眉は意志を持ち、鼻は自信を表して、口は目に表れる好奇心を言葉に出そうとしている。そういう瞬間の高橋を見るのが、佐藤は好きだったのだろう。それは、引っ込み思案で自信に欠け、言葉を飲み込んでしまいがちな佐藤の対極にあるように感じられた。「高橋さんが今の僕の立場だったら、どうしただろう」と、ペンを走らせながら、佐藤はぼんやりと考えていた。

目、眉、鼻、口、耳、喉、うなじ、頬、額、髪、肩、胸、腕、手、背中、腹、腰、臀、脚、足。佐藤は、記憶の中の高橋の像を、紙の平面上の黒鉛の跡に変換する作業に没頭していた。しかし、その変換作業は、ただ黒鉛の跡をつけているだけではなく、佐藤の持つ記憶、感情、思考、価値観を刻みつける過程でもあった。作業の前には、ただ佐藤の頭の中にだけあって、誰にも知られることのなかったものに、黒鉛の跡という形を与えることで、他の誰かに伝えられるようになるのだ。それは、佐藤にとってはただ形を変える作業に過ぎないが、他の人からは無から有を創り出す神秘的な過程のようにも見えるものだった。ただ、佐藤は、この過程も、この作品も、自分一人の中だけに留めて、誰かに見せるつもりはなかった。

ひと通り書き上げて、ふと目を上げると、もう夜中の2時を回っ

ていた。「予習をサボった上に夜更かしをしてしまったのは、明日の授業が大変なことになってしまう。」佐藤は慌ててスケッチブックを畳むと、本棚にしまって急いでベッドに潜り込んだ。

#17 スケッチブック（後書き）

2日連続投稿です。活動報告も更新しました。

佐藤の隠れた才能がもう一つ出てきました。相変わらず使いどころのない才能ですが。

あと、佐藤が高橋に好意を持っていることに、それとなく触れてみました。これはこれから恋話に発展するのでしょうか？

翌日、研究所に着くと、高橋に声をかけられた。「昨日は大活躍だったって聞いたよ。」佐藤は、昨日の夜の絵のモデルの本人からいきなり話しかけられて、恥ずかしくなって目を逸らした。「金子さんから聞いたの？」と言うと、「ううん。小野さんから」と返ってきた。

ふと気づくと、小野が近くに座っていた。「僕は、別に大したこととはやってないですよ」と小野に向かって言うと、「30MPのオーラを一発で吹き飛ばすつてのは大したことだよ。金子さんだったら、オーラを撃ち込む方向を考えて、何発か連続で撃ち込まないとダメだったと思う。本当なら観測班も忙しくなるはずだったんだけど、あっけなく終わっちゃったからね」と小野は言った。

3人が話している様子を見て、田中と近藤も集まってきた。「何の話ですか？」と田中が聞いた。「昨日、佐藤くんが大活躍したつて話だよ」と小野が答えた。田中はあまり表情を変えなかったが、近藤は興味深そうな顔をした。「何があったんですか？」と近藤が聞いたので、小野は簡単に昨日の話を説明した。悪霊退治の件は、高橋は早耳ですでに知っていたようだが、田中と近藤は知らなかった。小野の話に驚いた顔をしていた。

「サイコキネシスが、もうすでに実際に世の中の役に立ってるつてのは、すごいことだよ」と高橋は言った。「まだ役に立ってるつていっても、限られた状況で地味な形で使えるつてだけだね。全部の火事が消せるつてわけじゃないし、そもそも火そのものを消すことはできないし」と小野は水を差したが、高橋は「それでも役に立ってるつてのはすごいよ。あーしは最初手品くらいしか使い方

を思いつかなかったもん。あーしも何か役に立つことやってみたいなあ」と言った。

佐藤は、その話をややくすぐったい気持ちで聞いていた。佐藤は、これまでの人生で、基本的に優秀な兄の後塵を拝していて、直接的に褒められるような経験はあまりなかった。だから、目の前で繰り広げられる小野と高橋の手放しの贅辞に、佐藤はこれまで感じたことのない満足感を感じていた。「もっと自信を持っていいのかな」と、佐藤は心のなかで自問していた。

「そういえば、現場で女の子が『ハナ』って言って泣いてたと思うんですけど、あの後どうなったか知ってます？」と、佐藤は昨日から心に引っかかっていたことを聞いてみた。「ん？あ、あの猫の話だね」と小野が言った。「ハナって猫だったんですか？」と佐藤が聞くと、「多分、そんな名前だったと思うけど、片付けて帰ろうとしたら、機材をしまう箱の中に猫が一匹入ってて、なんでこんなところに猫が、と思ってたら、火事の家飼猫だったんだよ」と答えた。佐藤はそれを聞いてほっと安心したところ、小野が「でも、よくそんなこと覚えてるね」と聞いたので、「もし人が取り残されていたとしたら大変だと思ったので」と答えた。

その後、佐藤は、五条に教えてもらったことを試してみようと思つて、オーラ測定器を借りて、とりあえず部屋の中を歩きまわってみたが、部屋の中はどこも同じように低いオーラ濃度で、練習にならないことが分かっただけだった。「オーラ濃度が高いところっていうと、やっぱり昨日みたいに自然発火の現場に行かないとダメかな」と思つて、昨日の火事の現場を思い出してみた。しかし、五条が言っていたような特別な感覚の心当たりはなく、「才能の問題なのかな」とちょっとがっかりしたが、次の出勤の時にはもう少し注意してみることにした。

高橋は、佐藤の話聞いて触発されたらしく、オーラの射出操作の練習に、今まで以上に力を入れて取り組んでいた。「ドーン」「バーン」などと時折叫んでいるのは、声を出すと精度と威力が上がっているのではないかと思つて実験しているらしかった。他の3人には、ちよつと恥ずかしくて真似できないが、高橋は気にならないらしい。その甲斐あつてか、高橋のオーラ操作能力は少しずつ向上し、オーラの強さ自体も若干強くなつたようだった。

佐藤も、悪霊退治の件があつたので、これまで以上にオーラの射出操作の練習に力を入れていた。練習するほど少しずつオーラの強度とコントロールと速度が上がつてきて、6月頭くらいには80MPくらいまでの濃度のオーラを的にぶつけることができていたのが、6月末には100MP程度にまで向上した。

佐藤や高橋の頑張りで、金子のオーラ操作の研究は目に見える成果を上げつつあつたが、藤田と小野の精神活動とオーラの関連の方でも徐々に成果が出始めていた。当初予想されていた集中状態、弛緩状態での顕著な差は見つからず、代わりに映画を見た時の感想とオーラの強さとの間に相関がみられた。映画が面白く感動的だと感じるほど観測されるオーラが強くなって、逆につまらないと思う場合にはオーラの強さに変化が見られなかった。この研究のために、多い時には週に2本の映画を見て、その感想を映画のストーリーに合わせて時系列で記録する必要があつたので、6月終わりごろには4人はちよつとした映画通になつていた。

悪霊退治は、翌週も出勤があり、その後しばらく間が開いて、6月末にもう一度あつた。2回共、初回と同じく、佐藤の一撃ですぐに解決してしまつた。佐藤も3回目には随分現場に慣れてきて、悪霊退治のメンバーの顔も覚えてきた。オーラの射出は攻撃班と呼ば

れ、金子と佐藤が担当した。残りの人は観測班と呼ばれていて、オーラの状態を観測して記録する作業をしていた。観測班は小野を含めて5人が参加していた。五条は初回だけ顔を出して以来、顔を出してはいない。

悪霊退治に出動するたびに、佐藤は、五条に言われたオーラの知覚ができないかと、目を凝らしてみたり、逆に目を閉じてオーラを見るイメージを試してみたりしたが、結局オーラの知覚の片鱗もつかむことはできなかった。

絵の方は、最初の失敗に懲りて、授業のある日の前日の夜には絵を描かないようにして、週末だけに絵を描くことにした。5月までは絵を描く余裕もなく勉強していたのだが、中間試験が終わって少し気持ちの余裕ができていた。とはいえ、研究所の件もあり悪霊退治もあったので、残りの時間をなるべく勉強に使うほうがよいことは分かっていたのだが、そのために絵を描きたい気持ちを抑え過ぎるとストレスになってしまい、息抜きが必要だった。また、週末だけというルールは作ったものの、数分で描ける落書き程度のもものは、描きたい時に描いていた。

そんなようにして、いつの間にか梅雨も始まり、慌ただしく6月も過ぎていった。

#18 自信（後書き）

結局、恋話はそのまま発展しませんでした。残念。またその内機
会を狙ってみます。

佐藤は、だいぶ生活に余裕が出てきたみたいでよかったです。こ
れがそのまま続けばいいんですが。

19 期末試験

7月に入ると、突然、期末試験が迫って来た。いや、期末試験の日程は初めから決まっていたので、月が変わるまで危機感を感じていなかった佐藤の問題だっただけなのだが、とにかく、急に現実感を増した期末試験の存在に、佐藤は焦りを感じていた。

勉強してこなかったわけではなかったが、中間試験の時に感じていた不安が再燃してきたように感じていた。「失敗したくない」と思うと余計に不安が増してきて、勉強をしても空回りしているような気がしてくる。中間試験の時も不安だったものの、もっと集中できていたような気がするが、佐藤には、なぜ集中できていたのか、その理由は分からなかった。

中間試験の時と同様、試験期間中は実験はお休みになった。それは悪霊退治の手伝いも同じだった。佐藤は、前回と同様に、試験前1週間は、授業と食事、睡眠、入浴の他はずっと机に向かっていた。絵を描くのも、落書きをするものやめていた。むしろ、前の試験の時よりも勉強時間は増やし、その分、睡眠時間を犠牲にしていた。

前の試験の後、小野が分からないところを教えてくれるという話があったが、その後質問してみたところ、余計に難しい説明が返ってきたので、時間に余裕のある時ならともかく、試験前に聞くのは時間の無駄かもしれないと思ったのに加え、特別、研究所に行く用事もないので、結局、寮で自習をしていた。

中間試験の時とは違って、期末試験が始まって、不安が収まることはなかった。特に、初日の一教科目の英語の試験で、長文読解に失敗したことが精神的に響いて、残りの教科で気持ちを切り替え

られなかった。それでも、比較的得意な社会の科目でなんとか踏みとどまって、最後の数学の試験はなんとか無難に乗り切った。

「これなら、なんとかなるんじゃないか」と安心して、太田と池島と連れ立って、例によってファミレスにいつて、雑談している時に、ふとした事で数学の試験の話になって、何気なく答え合わせをしてみると、佐藤が問題文を読み間違えて、大問1問をまるまる落としていることが分かった。

「なんでこんなまちがいを・・・」と佐藤は思ったが、間違いなく睡眠不足のせいだった。佐藤もそのことにはすぐに気づいて、試験前に夜遅くまで起きていたことを後悔していた。しかし、数学はともかく、英語の長文読解の失敗は睡眠不足のせいとは思えなかった。後で読み返しても、やはりちゃんと理解できなかったからだ。

その後、太田、池島とわかれた後も、頭の中で試験の反省を続けていた。最終的には、「数学の件にしても、普段からもっと勉強ができていたら、睡眠時間を削る必要はなかったはずなのに」という結論に至り、「サイコネシスや絵にかまけて、きちんと勉強してこなかったからこんなことになったんだ」と佐藤は考えて、落ち込んだ。

翌日は土曜日で、学校も研究所も休みだった。試験の反省をしたのだから、翌日から早速勉強をする方がいいということは、佐藤も分かってはいたのだが、それ以上にもう勉強をしたくないという気持ちの方が強かった。とはいえ、反省したばかりで絵を描く気にもなれず、落ち込んだ気持ちのまま、ベッドにうつ伏せで、朝からずっと寝ていた。

と、突然、携帯電話が鳴った。メールが届いたのだ。見ると、金

子からだった。悪霊退治の連絡だった。佐藤はそれを見て、一瞬、無視しようかと思ったが、その次の瞬間には金子に電話をかけていた。「はい。じゃあ、寮の前で待ってます。」電話を切ると、すぐに着替えて、待ち合わせの場所に向かった。行動に矛盾を感じていたものの、悪霊退治で活躍することで認められることで、気分が軽くなればと漠然と考えていた。

現場は、海岸沿いの倉庫だった。佐藤が着いたときには、まだ火の手は広がってはいなかった。「結構、濃いね」と、先に着いて観測をしていた小野が言っ、「ほっとくと、結構大火事になりそうだよ」と続けた。金子が「どの辺が中心？」と聞くと、小野が「あそここの入り口をちよっと入ったところあたりだと思う」と答えた。「じゃあ、佐藤くん、お願いね」と金子が言っ、「佐藤はいつものように構えをとって、オーラを撃ち込んだ。」

「おかしいね、火が大きくなってる。」しばらくして、金子が言っ「た。確かに、いつもならすぐに消防隊の放水で火が小さくなっていくのだが、今日は一向に小さくならない。」オーラの位置が間違っ「てたんじゃない？」と金子が言っ「たのを受けて、小野が観測班のところ」に相談に戻った。

少しして小野が戻っ「てきて、もしかすると、中心がもう少し倉庫の奥の方だったか、あるいは上の方だったかかもしれない。後2回、一つはさっきよりも少し奥の方と、もう一つはさっきの場所の上の2階くらいのところを狙っ「てみてくれる？」と言っ「た。」「分かりました」と言っ「て、佐藤は再び構えを取っ「て、2発、オーラを撃ち込んだ。」

ちょうどその時、五条が現場に現れた。「金子さん。今日は金子さんがやる方がいいみたいだよ」と五条は切り出した。「どうして

ですか」と金子が聞くと、五条は「今日は佐藤くんはオーラが操作できてないよ」と言った。

その後のことは、あまり佐藤は覚えていなかった。現場のオーラの規模は、金子では一発で終わらせることができない規模だったのだ。五条が細かく的を指示して何発か撃ち込んでオーラを霧散させた。しかし、佐藤はその様子を心ここにあらずで眺めるだけだった。金子たちは佐藤の様子を心配したが、佐藤は「大丈夫」とだけ言い続けていた。

#19 期末試験（後書き）

活動報告を更新しています。

前回まで調子よく進んでいたのに、突然、佐藤の調子が真つ逆さまに悪くなってしまいました。しかも、泣きつ面に蜂で勉強だけでなくサイコキネシスまで不調。この先どうしましょ。

ところで、佐藤が不調になった後で、金子がオーラを撃ち込んでるやり方が、佐藤が参加するまでの普通のやり方で、一発で吹き飛ばしていた佐藤のほうが無普通ではなかったんです。

#20 高校生の議論

佐藤は目に見えて落ち込んでいたが、同情はされなくなかった。

翌日の日曜日は一人で一日中寝ていたが、月曜日はいつものように学校に出席した。学校では、期末試験の結果が、採点できたところから返却された。佐藤は、英語の試験結果だけを受け取ったが、案の定、長文読解に失敗していて、平均点を大きく下回っていた。よく見ると、単語と文法の単問群は中間試験の時よりも改善していたのだが、長文読解の失敗で気持ちが萎えてしまった佐藤は、そのことに気づく余裕もなかった。

研究所への足取りも重かったが、休む理由はなかった。いつものようにオーラの全身測定をすることになり、できればスキップしたかったが、理由もないので諦めて測定をした。測定中は自分の結果を見ることはできないので、終わるまで不安で仕方がなかったが、終わってから確認すると、いつもと変わらない値だった。「じゃあ、なんで土曜日はオーラが操作できなかったんだろう」と、佐藤は思ったが、その後いつものようにオーラ操作の練習を始めると、やはり全くオーラが操作できなかった。何度も失敗しているうちに、そもそもそれまでどうやって操作していたのかも分からなくなってしまうた。

「佐藤くん、調子わるいの？」と、高橋が佐藤に声をかけた。金子も小野も、土曜日の佐藤のことは、3人には言っていないかったので、高橋は佐藤がオーラ操作ができなくなったことを知らなかった。「あ、・・・うん」と、佐藤はどう返事をしたらいいか分からず、曖昧な返事をした。高橋は、「試験休み明けだもんねー。なんか鈍っちゃうよね」と明るく言った。いつもなら、そういう高橋を見て気を取り直すことができるのだから、今日はそれでも気分は晴れな

った。

その後、休憩をしているときに、サイコキネシスをどう社会に役立てることができるかという話になった。口火を切ったのは、田中だった。「俺さ、サイコキネシスのことを最初に聞いたときは、絶対嘘だと思ったんだよ。でも、結局俺はまだオーラ操作とかちつとも上手くできないけど、佐藤のとかを見てて、本当にあるのかなと思えてきたんだよな」と切り出した。

それを聞いて、佐藤は、入学式当日の朝、田中がサイコキネシスを全く信じていなくて、それがきっかけで図書館に言っただけでインターネットでサイコキネシスについて調べて、軍事機密という話を信じてしまって、後で恥をかいてしまったことを思い出した。

「で、じゃあ、もしサイコキネシスが本物なら、それが何に使えるのかって、思ったんだよ。佐藤がやってる火事を消すつてもあって、それもいいんだけど、もっと能動的に何か役に立つようなことはないかって。どう思う？」と田中は言った。

佐藤は、サイコキネシスの活用方法について、自分から何かを考へ出そうとは考えたこともなかったもので、さすがに賢い奴は違うなと思って、普段は意識しない自分と田中の差を意識してしまった。

少し間が開いて、高橋が口を開いた。「『能動的』ってのがどういう意味か分からないけど、確かに、もっと他にも何かに使えてもいいよね。例えば、自動車のガソリンの代わりにするとか」というと、田中は「そういうのも考えたんだけど、小さなメダルを飛ばす程度の力しかないよ、車を動かすのは難しそうだよな」と言った。高橋は「確かにね。でも、そもそも使えるオーラの量が足りないのか、それとも物理エネルギーへの変換効率の問題なのかで、話は変

わって来るよね」と言った。「あー、確かに。効率の問題ならオパールコン合金の開発次第だもんな」と、田中が答えた。

しばらく2人で議論した後、「近藤さんはどう思う?」と高橋は近藤に話をふった。近藤は、ちょっとびくりしたような表情でいたが、少しして、「私はまだあんまりオパールのこととか分かってないんだけど、オパールが感情とか感性とかと関連してるなら、教育とかに活用できないかなと思ってるかな」と言った。「あ、近藤さんは、教師になりたいんだったよね」と、高橋がうなづいた。

「確かにオパールは物理的な側面ばかり考えてたけど、心理学的な側面の可能性もあるはずだよな。それは考えてなかった」と、田中が感心したように言った。そして、少し心理学的な側面について議論していたが、その方面の知識が少ないせいであり実りのある議論にはならなかった。

「そういえば、この間、試験前に、面白いことを発見したんだよ」と言つて、田中が席を立った。戻って来ると、オパール遮蔽手袋をして、実験用のメダルを箱で持ってきた。実験室には、色々な種類のオパールコン合金でできたメダルが準備されていて、佐藤たちは自由に使う事ができた。いつもはオパール操作の練習に使う1種類しか使わなかったが、田中はいつもとは違うものを取り出した。

「この2つを少し離して置いて、片方を持ち上げると」と言つて、手袋を脱いで片方のメダルを持ち上げた。すると、もう一方のメダルと一緒に持ち上がった。持っているメダルを動かすと、もう一方のメダルもその動きを追従する。2つのメダルは完全に離れているので、手で持っていない方のメダルは完全に宙に浮いていた。見ている3人から「おー」という歓声が上がった。メダルとメダルの間にものを挟んでも、宙に浮いたメダルの動きに変化はなかった。

#20 高校生の議論（後書き）

田中は、ある意味真面目なやつなんですが、自分が常に正しいという自信があるタイプなんですね。影の努力を惜しまない代わりに、人に対しても厳しくて、時折挑戦的になってしまふという。

付き合いにくそうなタイプに聞こえますけど、多分、引っ込み思案な佐藤よりは友達が多いと思います。

2 1 疎外感

ちょうどその時に、藤田、金子、小野が部屋に入ってきて来て、4人の話に加わった。「面白そうなことをやってるね」と藤田が話しかけた。「あ、藤田さん。勝手に使っててすみません」と田中が言うのと、「後で片付けてくれれば大丈夫だよ。というか、むしろ積極的にいろいろ実験してもらって、何か面白いことを見つけたら教えてもらえる嬉しいな」と藤田が言った。

すると、田中が、「俺、将来医者になりたいと思ってるんですけど、このメダルを使えば、胃カメラとか、手の届きにくいところでも使えるメスとかにできないかなと思っただんですけど」と言うと、藤田が、「あ、それはいいかもね。医療用じゃなくても、例えば、工具とかに使ってもいいし、掃除用具とかにも使えそうだね」と言っていて、ちよつと考えて、「ちよつと山科先生やましなのところに行ってみようか。もしかしたらもうすでに誰かが手をつけた後かもしれないけど、そういう応用研究ってあんまり進んでないし、面白い話が聞けるかもしれないよ」と言った。

田中が「山科先生って誰ですか?」と聞くと、藤田は「オリハルコンを使ったデバイス作成の方面で、日本で一番有名な人で、世界で初めてオーラ測定器を発明した人だよ」と言ったので、高校生4人は驚いた。そもそも、オーラ測定器のような基本的な装置が、身近で発明されるようなものだという発想がなかったのだ。

「とりあえず何か新しいデバイスのアイデアがあったら、山科先生に話に行ってみるといいんだよ。せつかくだからちよつと行って、田中くんのアイデアを話してみようか。誰もまだやってないんだったら、そのまま特許取っちゃえばいいよ」と藤田は言って、田中を

連れて部屋を出ていった。あまりの急展開に啞然としている高校生3人を見て、金子は「藤田さんはスイッチが入ると誰も止められないからね。後で、帰る前に田中くんを助けに行かないとね」と言った。3人は、いつも冷静で、どちらかというところと慎重な藤田の意外な一面を見た気がした。

その後高校生3人と金子と小野は、残りのメダルを使って面白いことができないか、いろいろアイデアを話しあったり、実験したりしていた。といっても、主に高橋が話して、それに金子と小野が突っ込みを入れて、その議論を佐藤と近藤が聞いているという形だったのだが。

話が進む中で、佐藤は、やや疎外感を感じていた。期末試験の前までは、佐藤はオーラ操作の面では誰よりも優れていて、サイコキネシスの才能に溢れていると誰もが認めていた。日本で初めての高校生参加のサイコキネシス実験のエースであるとの自負があった。佐藤は、それを度々心のなかで否定しようとしていたが、しかし、逆にそれが佐藤の心の拠り所にもなっていた。ところが、期末試験が終わってみると、佐藤はオーラ操作ができなくなり、オーラ操作で一番の落ちこぼれだった田中が、オリハルコンを使ったデバイスの発明をするかもしれないということで、藤田に連れて行かれた。急速に周囲の感心が佐藤から離れていくのを感じていた。

突然、風が顔にあたって、佐藤は我に返った。気がつく和高橋が驚いた顔をしてメダルを手に使っていた。隣を見ると、金子と小野も同様に驚いた顔をしている。近藤は、何が起きたかわからないという様子だった。「何か起きた？」と佐藤は聞いてみた。高橋が「メダルに息を吹きかけてみたら、風が起きたんだけど」と言って、高橋がメダルに息を吹きかけると、また、風が佐藤の顔にあたった。明らかに、高橋が息を吹いたのとは違う方向に違う強さで風が起き

ていた。

「ちょっと、メダルを見せてもらっていい？」と小野が言って、メダルを受け取った。「やっぱり、純オリハルコンだよな」とメダルを見ながら言った。不思議そうな顔をしている高校生3人に向かって、金子が「純オリハルコンは、サイコキネシスの触媒としては、性能が悪い上に、熱エネルギーにしか変換できないと思われてたんだよね。息を吹きかけたら風が起きるっていうのは、世界で初めての発見じゃないかな」と言った。

近藤が小野からメダルを受け取って、息を吹きかけてみたが、何も起こらなかった。「あれ？」もう一度やってみたが、やはり何も起こらなかった。佐藤が受け取ってやってみたが、それでも何も起こらなかった。「あれ、おかしいね。高橋さん、もう一度やってみて」と金子が言って、高橋がメダルを受け取ってもう一度息を吹きかけると、やはり風が起きた。

「高橋さんだけしか起こせないんだ。これはちょっと大変な発見かもしれない」と金子が言って、小野に向かって、「ちょっと山科先生のところに行つて、藤田さん呼び戻してきて。山科先生も時間があつたら来てもらつてもいいかも。私は浅田さん呼んでくるから」と言って、2人は部屋を出ていった。

その後は、浅田、藤田、金子、小野、山科が高橋を囲んで大騒ぎになって、結局4人が解放されたのはいつもよりだいぶ遅くなってからだった。浅田たち5人は、夜遅くなったことを頻りに謝っていたが、高橋の力の発見はそれほどの大きな発見だったということは、高校生4人にもよく分かった。この騒ぎの中、佐藤は、研究所の中で完全に居場所を失ってしまったことを実感していた。

#21 疎外感（後書き）

さて、ようやく超能力らしい能力が出てきました。まだオリハルコンが必要ですが、他の人には再現できないというところは、これま
では違います。本当に再現できないかはもっと調べないと分から
ないですが。

あと、前に、オーラ測定器って大事だよね、ということの後書きで
書いてましたが、それを発明した人が登場しました。そのうち、仕
組みを説明してもらいましょう。

佐藤には、なんか止めを刺してしまったような感じですが、大丈夫
ですかね。

#22 音信不通（前書き）

この回は、視点が近藤に変わります。

#22 音信不通

近藤と佐藤は別のクラスだったが、英語と数学は成績別のクラスだったので、同じ位の成績だった2人は英語と数学だけは同じクラスだった。ところが、高橋の件で大騒ぎになった翌日から2日間、クラスに佐藤の姿はなかった。近藤は不思議に思っ、池島の席が近藤の斜め前だったので、2コマ連続の英語の授業の休み時間に、佐藤の様子を聞いてみることにした。近藤は、休み時間によく話している様子を見て、池島と太田が佐藤の友達だということを知っていたのだ。

「あの・・・」と背後から声をかけられ、休み時間に池島の席に集まっていた太田と池島は振り返った。声をかけてきたのは、時々、佐藤と車で話をしている様子を見かける女子だった。「お、佐藤の彼女（未確認）だ。何の用だろう」と太田と池島は思った。「彼女」というのは、太田と池島が勝手に想像していることで、佐藤に確認をとったわけではない。太田も池島も、佐藤が参加している実験のことは知らないのです、佐藤と近藤の関係も知らなかったのだ。

「えっと、佐藤ですか？」と池島が言った。「あ、はい。えっと、昨日も今日も佐藤くん、見かけないですけど、何か知りませんか？」と近藤は聞いた。池島は太田に、「何か知ってるか？」という視線を送ったが、太田も知らなかった。「いや。風邪かなんかで休んでるんだと思いますよ」と返事をした。「そうですか。ありがとうございます」と言っ、近藤は自席に戻った。その様子を見て、太田と池島は、「絶対に彼女だ」と確信を強めていた。

その日は、実験の日だったので、研究所に向かった。実験のある日は、たいてい近藤は駅から研究所まで佐藤と一緒にだったので、一

人で向かうというのはいつもと違う感覚だった。最初の頃は話題に困っていたが、最近では、なんだかんだと佐藤と話をするようになった。このルートを一人で電車やバスに乗るのは久しぶりで、近藤は、手持ち無沙汰でただ外を眺めていた。もうすっかり梅雨は明け、真夏の太陽が降り注いでいた。既に日が陰ってきている時間帯にもかかわらず、全く衰えることのない暑さに辟易しながら、「もうすぐ、夏休みだな」とぼんやりと考えていた。

研究所に着いて、いつものようにオーラの測定をしていると、金子から「佐藤くんは？」と聞かれた。「昨日から休みみたいですけど、どういう理由かは分からないです。連絡とか来ていないんですか？」と、近藤は逆に聞き返してみた。「そうなんだ」と言った金子は、何か浮かない顔で考えている様子だった。高橋と田中が来ると、同じ質問をしていたが、2人とも佐藤のことについては知らなかった。

金子の様子を不思議に思った近藤は、「あの、佐藤くんがどうしたんですか？」と聞いてみた。金子は、佐藤の気持ちを考えて、どう返事をしようかと少し考えたが、全部話して相談することに決めた。高校生同士の方が話しやすいこともあるから、なにか知っているかも知れないと思ったからだ。オーラに関するトラブルだったので、思春期の感情がオーラに対して与える影響について何かヒントが得られるかもしれないという興味がないとは言いつけなかったが、それよりも佐藤の心に傷を与えたかも知れないという心配の方が大きかった。

「みんなは、悪霊退治ってプロジェクトは知ってるよね」と、金子は切り出した。悪霊退治については、もうすでに一度話していたので、3人は知っていた。「先週の土曜日に出勤があって、試験明けだった佐藤くんも参加したんだけど、佐藤くんがオーラ操作に失

敗して、火が消えなくてね。結局、私が代わってオーラを操作したんだけど、オーラ操作に失敗してから、佐藤くんが目に見えて落ち込んだりして、何を言っても『大丈夫』としか言わなくなっちゃって。月曜には、元氣そうに来てたから大丈夫かなと思っただけで、高橋さんの件で大騒ぎだった後で、また暗くなってたみたいだったから、声をかけなきゃと思っただけで、あの日はそんな余裕もなくて。」

「昨日、心配だったから、携帯にメールをしてみたんだけど、返事が返ってこないから心配したら、昨日から学校を休んでるって言うから」と、金子は状況を簡単に説明した。「それで、月曜、佐藤くん、なんか調子悪そうだったのか」と高橋がつぶやいた。「何か気づいたことがあったの？」と金子が聞くと、高橋は、「オーラ操作の練習をしているときに、難しい顔をしてたから、どうしたのかなと。試験明けで疲れてるだけかとおもっただけで」と言った。

佐藤のオーラ操作のトラブルについて、誰も心当たりはなかったし、佐藤の欠席の理由についても、具体的な話を知っている人は一人もいなかった。この話はそれ以上発展しなかった。「風邪とかならいいんだけど、オーラの件が原因だったら、私にも責任があるから」と責任を感じて、心配している様子の金子を見て、高橋はふと思いついたことを口にした。「今日は、実験はお休みにして、みんなで佐藤くんのお見舞いにいかない？風邪なら風邪だし、オーラの件が関係しているのなら、話を聞いてみたらいいし。せっかくだから、お見舞いに何か買って行くよ。」

その後は、金子が浅田と藤田に佐藤の見舞いに行くことを伝えて、高校生3人を車に乗せて寮に向かった。小野はたまたま休みだった寮に行く途中で、スーパーに寄って、お見舞いにりんごを2つ買った。「風邪のお見舞いはりんごだ」という高橋の主張によるものだ。

った。寮は男子寮と女子寮に分かれていて、本来なら高橋と近藤は佐藤のいる男子寮には入れないのだが、金子が同伴することで、特別に許可してもらったことができた。

#22 音信不通（後書き）

この回から、話の雰囲気が変わります。これまで視点は佐藤のみでしたが、近藤の視点を入れていきます。話も、佐藤に起きる出来事だけで構成していましたが、この回からはもう少し広い視野で物語を追いかけていきます。

佐藤と周囲の関わりが深くなってきて、佐藤の与える影響も、佐藤の受ける影響も、これまでより範囲が広がってきたため、物語もそれに合わせて視点を増やして、視野を広げていく必要が出てきたためです。

23 苦悩

高橋の件があつた月曜日、寮に帰ってきた時、佐藤は打ちのめされた気持ちだつた。期末試験の失敗、オーラ操作のスランプ、田中の発明に加えて、高橋の新たなサイコネシスの発現がダメ押しになつていた。

佐藤は、自分の投げり所を、一度に全部失つたような気がしていた。サイコネシスの実験に参加する条件で推薦を受けて、単身、故郷を離れて、身寄りのいない東京の、身の丈を超える進学校に入学した佐藤にとつて、勉強とサイコネシスは東京に居続けるたつた2つの理由だつた。その2つを同時に失つたような気がしていたのだ。

.....

佐藤の家庭は、特に変わったところのない、普通の田舎の家庭だつた。父は県庁勤務の公務員で、地元では余裕のある部類だつたかもしれないが、裕福というほどでもなく、絵に描いたような中流の家庭だつた。兄は、小さい頃から賢い子供だつたらしい。公立の小学校だつたが、テストで90点を下回つたことはなく、通信簿も最高評価のはなまるが全科目に付けられているのが当たり前だつた。そのまま当然のように名門の私立中学に進学し、今年は高校3年で来年からは国立大学の医学部に進学すると皆が信じている。

それに対して佐藤は、兄と同じように育てられたにもかかわらず、小学校のテストで90点を超えるのは何回かに一回で、100点は一度もとつたことがなかった。兄と同じように中学受験をしたが、すべて合格した兄とは違って、一つも合格できずに公立中学に進学した。その後、兄と同じようにやってはいけないと気づいて、

なんとかその差を縮めようと、級友に陰口を叩かれながらも人の数倍は勉強した。それでも、兄との差を縮めることはできず、中学3年の時点で、兄の通う私立高校には手が届かないことがはっきりした。

親は、兄と比較してプレッシャーを与えるようなことはなかった。むしろ、兄は兄、弟は弟と割り切っていた。兄と比較してばかりいないで、自分自身のやりたいことを優先するようにと諭されたこともあった。しかし、親にとっても子育ては初めてのことはかりなので、兄がやすやすとできたことに、弟がつまづいて苦しんでいることに、驚きを感じないわけにはいかなかった。

親はその驚きを、極力表情に出さないように気をつけていた。しかし、どれだけ気をつけても、自分がつまづくたびに親が驚いていることは、佐藤にはなぜか痛いほど分かった。それ以上に、兄のようになると努力している佐藤を見て、親がかわいそうだと思っていることも、佐藤にはなぜか痛切に分かっていた。そして、そういう気持ちができるので、佐藤はなおさら勉強に手を抜くことができなかった。

そんなときに、突然舞い込んできたのが、東京の桜山高校への推薦の話だった。兄の通う高校には及ばないものの、誰もが知る名門難関進学校で、東京にあるという点を無視しても、受験高校の選択肢に入るとは思えないレベルの高校だった。その上、寮が完備されていて、学費も寮費も免除だった。この推薦を断る理由は、佐藤の立場からは何もなかった。この話を初めて聞いた時は、「これでやっと兄に追い付ける」と思って、佐藤はその日、興奮のあまり、夜寝ることができなかつた程だった。

入学後のことについて、佐藤は楽観していた。佐藤にとって、高

校というのは名前であって、中身ではなかった。いや、これは佐藤に限ったことではなく、推薦を受けるときに、レベルの高すぎる学校に進学して、授業についていけない可能性に思いを巡らすような人はめったにいない。佐藤も当然そうだったただけだった。しかし、現実はそのほど甘くはなかったのだ。

授業で要求される水準は、佐藤の想像を超えていた。決してスパルタではなかったのだが、気を抜くと置いていかれる不安を感じた。ただでさえ入学時の学力は同級生よりも低いはずなので、授業についていけないようなことになったら、そのまま落ちこぼれて二度と授業に復帰できるとは思えなかった。

狭い田舎では、佐藤が東京の高校に進学することは誰もが知っていることだった。授業についていけなくなつて、落ちこぼれて地元に戻るなんていうことになったら、どんな噂になるかわかったものではない。想像することすら恐ろしいことで、生き恥をさらすくらいなら死んだほうがましだとまで思った。

それに加えて、クラスでの人間関係にも苦勞していた。佐藤の自信のなさのために周囲に声を掛けるのをためらっていたことが原因なのだが、そのせいで、勉強面での不安を話す相手もいなかったのだ。太田と池島とは、比較的よく話していたが、それでも自分の弱みを腹を割って話せるほどには心を開いてはいなかった。

そんな状況だったので、中間試験が平均点に届いたというのは、素晴らしい知らせだった。「なんとかやっていける」という自信を取り戻すことができたのだ。同時に、サイコネシスの実験の方でも頭角を現しはじめ、勉強とサイコネシスの両方の面で自信を持つことができるようになった。

サイコキネシスの面での成功体験が積み重なるに連れて、勉強は平均点であっても、サイコキネシスの方でナンバーワンであれば、自分が東京に来た意味もあると思うようになって、さらにサイコキネシスへのめり込んでいった。理性はそれを危険だと言っていたが、心は理性に従うことはなかった。佐藤の心は自信に満ちていた。期末試験が始まるまでは。

.....

寮の部屋に戻った時、佐藤は、ショックと不安とで、何も考えられなくなっていた。部屋に入ってからのは、何をどうしたのか全く覚えていなかったが、気がついたときにはスケッチブックを取り出して、何かを一心不乱に描いていた。

いや、正確に言うと、描いていたのではなく、描こうとしていた。なぜなら、佐藤自信、描きたいものは分かっていたが、どう描けばいいのか分かっていなかったのだ。佐藤は、今の佐藤の心を苦しめる最大の元凶であるオーラを描きたかった。目に見えないオーラを紙に描き出して客観的に見ることができたら、今の苦しみを冷静の乗り越えられるかもしれないと思ったのだ。それは、思考力が低下した中、本能的にとった自衛的行動だった。しかし、どれだけ描こうとしても、納得のいくものは描けなかった。

食事も取らずに水だけを飲んで24時間ぶっ通しで描き続けた佐藤は、結局求めていたものを得ることができないまま、ついに力尽きてベッドに倒れこんで、そのまま次の日の夕方まで眠り続けた。

#23 苦悩（後書き）

当面は、登場人物たちの心理面に迫る展開が続きます。

佐藤の話は、これまで断片的に書いてきたものの繰り返しですが、結構心理的に追い詰められる人生を歩んでいますね。誰が悪いということでもないのですが、親の気持ちが変わってしまったというものが、佐藤を追い詰めた最大の原因だったということなんでしょうか。

#24 お見舞い

金子、高橋、近藤、田中の4人は、佐藤の部屋の前までたどり着いた。高橋、近藤にとって（もちろん金子にとってもだが）男子寮の中に入るのは初めての体験で、若干緊張していた。佐藤が中かどうかという状態なのか分からなかったため、まず田中にノックしてもらって、中の様子をうかがうことになった。

田中はまず、控えめにノックしてみたが、返事はなかった。それでも少し強くノックしてみたが、やはり返事はなかった。見舞いに来た4人は、おかしいなと顔を見合ったところ、中から人の気配がした。

田中がもう一度ノックしてみると、今度は中から小さな声で「はい」と返事があった。「田中です。お見舞いに来ただけ」と田中が言うと、中からバタバタと音がして、「ちよつと待って」という返事があった。「金子さんや高橋さんや近藤さんも来てるから」と田中は続けたが、バタバタとするだけでそれに対する返事はなかった。

少しして、部屋のドアが中から開いた。着替えてはいるものの、髪がはねていて、さっきまで寝ていたようなふうの佐藤が立っていた。佐藤の血色はあまりよくなさそうで、本調子ではない様子が見て取れた。「佐藤くん、風邪だつて聞いたけど、体調はどう?」と金子が聞いた。「あ、はい」と佐藤は曖昧な返事をした。佐藤がそれ以上話さないで、金子は「まあ、あんまり無理しないで、座った方がいいんじゃない? 部屋が狭いようならどこか別のところに行こうか?」と言った。佐藤は「中でいいです。椅子とかないですけど」と言って、4人を部屋に入れた。

部屋の中には、最低限の調度品だけで、ほとんどものが置かれていなかった。近藤は、その部屋を見て、「ホテルの部屋みたいだな」と思った。佐藤はベッドに腰を下ろし、田中は奥の机に寄りかかって、残り3人は立っていた。何気なく近藤が高橋を見ると、高橋はお見舞いのりんごを手にしたまま、なぜか顔を紅潮させて、震えているように見えた。普通でない様子の高橋に、近藤は声をかけようとした。

「高橋さん？」その時、高橋の正面に座っていた佐藤も、高橋の様子に気付いたらしく、近藤より先に高橋に声をかけた。すると、突然、高橋の目から涙が溢れ、佐藤に向かって1、2歩歩み、佐藤の首に手を回して、声を殺して泣き出した。佐藤も近藤も他の2人も、何が起きたのか分からず、呆然としていた。抱きつかれる格好になった佐藤は、顔を真っ赤にして口をパクパクさせていたが、今度は佐藤まで声を上げて泣き始めた。

近藤はその様子を見て、「高橋さんって、佐藤くんのが好きだったんだ」と驚いていた。全くそれまで気付かなかったが、そう考えて見ると、高橋は佐藤に積極的に話しかけていたような気がした。「高橋さんは誰に対してもよく話しかけるけど、確かに、佐藤くんのごとは特別に意識をしていたような気もするな。最近、オーラ操作の練習に力を入れてるなと思ってたけど、そういうことだったのか。それにしても、泣きながら抱きつくほど心配してたなんて、そんなに想ってたのなら、言ってくれば協力したのに」と考えていた。

佐藤と高橋は、しばらくそのままの状態で泣いていたが、やがて落ち着いて、正気を取り戻した高橋は、顔を赤くして佐藤から離れて、部屋の壁際に移動した。佐藤も、また、さっきの様に顔を真っ

赤にしていた。

他の3人は、2人の様子に呆気にとられた上に、佐藤と高橋の間に流れる気まずい雰囲気もあって、少しの間、誰も話さなかった。その状態からいち早く気を取り直した金子が「りんご、買って来たんだけど、食べる？」と佐藤に聞くと、佐藤はまだ顔を赤くして、言葉を出さずにうなずいた。りんごを買った張本人は、あいかわらず壁際で小さくなっている。佐藤のうなずきを確認した金子は、「じゃあ、りんご、切ってくるね」と言って、「高橋さんも一緒に来る？」と言って、高橋を連れて部屋を出ていった。気まずい雰囲気の高橋と高橋を離して冷静にさせようという、金子の配慮だったのかもしれない。

金子と高橋がいなくなった部屋は、少しの間沈黙に包まれた。高校生4人の会話の口火は、いつもたいてい高橋が切っていたので、高橋がいないと話題がすぐに見つからない。その上、佐藤と高橋の思いがけない抱擁を見た田中と近藤は、思考力が低下していたし、佐藤の内心はそれどころではない状態だった。

沈黙を破ったのは田中だった。「風邪は大丈夫なのか？」近藤が田中の顔を見ると、感情の読めない表情をしていた。「あ、うん。まあ」と佐藤は答えた。田中は、「まあ、本当に風邪だったのかどうかも怪しいけど、もうすぐ夏休みなんだから、そこまでは頑張りよ」と、非難しているような励ましているような口調で言った。佐藤が風邪ではなく、オーラの件で休んだのだと思っっている田中が、独特の言い方で佐藤を励ましているんだ、ということ、田中の口調から近藤は理解した。

「うん。大丈夫。多分、明日からはまた学校にいけると思う」と佐藤は言った。心なしか、佐藤の表情に生気が戻ってきているよう

だ。「みんな心配してたんだよ。特に高橋さんとか」と近藤は言った。「高橋」という言葉で、佐藤が再び固まったのを見たが、続けて「金子さんのメールにも返信しなかったって聞いたし。今度から体調が悪くて休むときは、ちゃんと誰かに連絡してね」と言った。金子のメールの時には、佐藤は眠りこけていたので、近藤から聞くまで知らなかったのだが、「うん。わかった」と答えた。

また、佐藤の目が潤んで、「ちょっとごめん」と言っ、机の上からティッシュを取って鼻をかんだ。近藤は、どうしてこんなに佐藤が涙もろくなっているのか分からず、「やっぱり風邪じゃなくて何か苦しいことがあったのかな」と思った。何があったのか知りたいう気持ちに駆られたが、「今は話したくないかもな」と思って、後で機会があったら聞いてみよう、心に仕舞った。

しばらくすると、金子が切り分けたりんごを持って帰ってきた。高橋は金子のだいぶ落ち着いている様子で、金子の後ろから入ってきたが、その後もあまり話さなかった。金子は佐藤の体調を気遣って、佐藤はメールの件について謝った。それから、りんごを食べながらしばらく話をした後、「長居しても悪いから」と金子が言って、4人は帰ることにした。

同じ男子寮に住む田中とは、佐藤の部屋の前で別れて、金子と高橋と近藤の3人は寮の出口に向かって並んで歩いていった。寮を出た所で、「それにしても、高橋さんは佐藤くんのが好きだったんだ」と近藤がつぶやいた。高橋は慌てて、「え、なんでそうなるの!？」と叫んだ。「なんでって、さっきのを見て、そう思わないほうが不思議だと思うけど」と近藤は答えて、金子に同意を求めるように視線を送ると、金子は苦笑いを浮かべながらうなずいていた。

「あ、いや、さっきのは、なんか、急に不安で胸が苦しくなっ

悔しいとか悲しいとか、よく分からない気持ちになって、・・・、
気づいたらいつの間にかあなつてたの。好きとかそういうんじゃないよ！」と、高橋は目を白黒させながら、しどろもどろに説明したが、近藤は納得しなかった。「それが好きってことじゃない。胸が高ぶって、名状し難い感情が溢れるのなんて、好きの典型的な気持ちだつて、国語の時間に勉強しなかったの？」と、「冗談混じりに言い返した。

「国語と現実とは別だよ」と、なおも高橋は抵抗したが、「じゃあ、高橋さんは佐藤くんのが嫌いななの？」と近藤が聞くと、高橋は言葉を失って黙ってしまった。

女子寮の前で金子と別れて、寮の階段のところまで高橋と別れて、近藤は自分の部屋に着いた。制服から私服に着替えながら、近藤は、さつき佐藤の部屋で起きたことを思い出していた。「私だったら、好きな人にあんなことできるのかな？」近藤は、自分が男性に抱きついている様子を想像して、思わず赤面した。「高橋さんはいいな。思い切りがあつて」と呟いた。自分にその何分の一かでも、その思い切りがあつたらと、うらやましく思っていた。

#24 お見舞い（後書き）

更新情報をt w i t t e rで流すようにしたので、よかったらフォローしてください。

ところで、#21で第1章終了で、#22から第2章という気分ではありませんが、特に章立てをわけたりはしてません。そのうち、もっと書いてから改訂作業で章立てを分けるかもしれませんが、今のところ。

高橋の突然の抱擁で、事態が一気に展開していきます。当の高橋自身、自分の気持ちに整理がついてないですが、彼女の中で何が起きたのかは、多分、そのうち彼女自身で説明する機会があると思います。

あと、近藤にも恋話のフラグが・・・

#25 心のエネルギー

4人が去った後、佐藤はしばらく呆けていた。佐藤を心配して、4人もお見舞いに来てくれたということが、信じられない気持ちだった。高橋が佐藤を見て、泣き出して抱きついたことは、もっと信じられないことだった。しかし、信じられないことではあったが、嬉しいことでもあった。多分、嬉しいというのが、今の佐藤の気持ちに一番近いに違いなかった。なぜそう思うのか、佐藤にはよく分からなかったが、明日からまた、いままでと同じように学校に行つて、研究所にいく自信が出てきたような気がした。

「結局、何の問題も解決してないけど」と佐藤はつぶやいた。2日間休んでいる間に、勉強の件に見通しが立つた訳でもなく、オーラ操作の不調の理由が分かった訳でもない。状況は全く好転していないのだ。「でも」と佐藤は思った。状況は相変わらず悪いが、それならそれで、また初めから頑張ればいいだけだ。そう思うだけの心のエネルギーが、2日前にはなかったのに、今はあるような気がした。

「精神エネルギーか。」心のエネルギーという表現が心に浮かんだ時、ふとオーラの正式名称が精神エネルギーだったことを思い出した。「まあ、関係ないだろうけど」と考えて、昨日、気が狂ったように絵を描いていたスケッチブックを本棚から取り出した。寝るときは床に投げ出したままだったのだが、金子たちが来たときに急いで本棚に放り込んだのだ。昨日は無我夢中で何を描いたかほとんど覚えていなかったのだ。何が描かれているのか確認したくなかったのだ。

結論から言うと、ほとんど意味のあるものは描かれていなかった。

絵には、苦悩、迷い、焦りの跡が、まざまざと残されてはいたものの、それが完成した絵として結実したものはなかった。「これは、
・多分違うんだろう」と佐藤は思った。佐藤はオーラがどういうものかは結局まだ分からなかったが、オーラを上手く操作していたときの感情は、少なくともこういう感情ではなかったということは覚えていた。確か、それは、安心や信頼や自信のような感情だったと思う。中間試験の前でも、少なくともこの絵にあるようなネガティブな感情に囚われてはいなかったことは確かだった。

佐藤はスケッチブックをしまうと、代わりに英語の期末試験の問題と答案を取り出して、復習を始めた。月曜に答案が返ってきたときは、気力がなく、全く見ていなかったもので、まずそこからやり直すと思ったのだ。

#25 心のエネルギー（後書き）

ちよつと短いですが、切りがいいのでこれで投稿しました。
佐藤はなんとなく立ち直ったようです。

心のエネルギーかどうかは分かりませんが、オーラは精神活動と
なんらかの関連があると考えられているので、この件でも何かしら
オーラに影響があったり、オーラからの影響があったりした可能性
はあります。

翌日、佐藤が学校に行くと、太田と池島が待ち構えていた。1時限目は数学だったので、直接、成績別クラスの教室に行つて、いつものように近藤の席の斜め前にある池島の席に向かった。寮から高校まで出る朝のバスは1本ではないので、必ずしも実験参加の4人が一緒になることはないが、昨日の件もあつて、久しぶりに4人一緒のバスに乗つていた。そのため、その日、教室には、佐藤と近藤が話しながら並んで入つてきた。昨日の今日で、それは正に鴨が葱も背負つているように、太田と池島の目に映つていた。

「病み上がりには彼女連れとは、いい度胸ですね」と、太田はニヤニヤしながら声をかけてきた。当然、太田は近藤のことを言ったのだが、昨日のことで意識してしまつている佐藤は、高橋のことと勘違いして、思わず「えっ」とだけ言つて、赤面してしまつた。それを見た太田と池島は、凶星を当てられて赤面していると誤解して、佐藤と近藤が付き合つてると確信してしまつた。「昨日は、彼女が心配して、お前のことを聞いてきたぞ。お熱いのは結構なんだが、休むときは直接連絡くらいしてあげたらいいんじゃないか？」と太田は追い打ちをかけようとした。

佐藤は昨日の教室での出来事を知らないなので、太田が何を言つていのか分からなくて、何と返したらいいのか分からず、一瞬黙つてしまつたが、斜め後ろの席で話を聞いていた近藤は、自分のことを言われていることにすぐ気づいた。「ちよつ、それは誤解」と思わず声に出してしまつて、我ながら大きな声を出してしまつたと、近藤は後悔した。しかし、時既に遅く、周りの生徒はみな聞き耳を立てていた。

近藤にしてみれば、好きではない男子と噂になるのは不本意だったが、それ以上に、昨日高橋の気持ちに気づいて、それを全面的に応援しようと思っていた矢先のことだったので、その高橋の想い人の相手と噂になるのは、考えてもみないことだった。ところが、そのために思わず強く否定しようとしたのが、完全に裏目に出て、クラスのかなりの人が佐藤と近藤が付き合っていると誤解することになってしまった。

遅ればせながら状況を理解した佐藤は、昨日の高橋の件に続いて、今日の近藤の件で、突然自分が三角関係の渦中に入ってしまったように思つて、頭の中が軽いパニックになっていた。ついさつきまで近藤とは同じサイコネシスの実験に参加する友人だと思つていたのだが、目の前の近藤の慌てぶりは、誤解するには十分なほどに取り乱していた。しかし、佐藤の持ち前の必要以上に慎重な性格は、目の前の状況に騙されてはいけなさと警告を発していたので、太田が示唆した通りに近藤が佐藤に好意を寄せていると、素直に信じ込むことはなかった。

「佐藤くん。否定してよ」と近藤は佐藤に近づいて声をかけた。佐藤は我に返つて、「いや、近藤さんとは、なんていうか、よく一緒にいるけど、ただの友達で、そんな関係じゃないから」と太田に釈明した。「確かに、よく一緒にいるよな」と池島はつぶやいた。「池島まで」と佐藤は絶句した。太田が、「確かに、よく電車で放課後2人が一緒にいるのを見るけど、あれって何してるのかな？確か、佐藤は寮生だったはずだけど」と、決定的な証拠を突きつける刑事のような鋭さで、突っ込みを入れた。

「それは・・・」それに対する答えは、佐藤も近藤も持っていなかった。サイコネシスの実験は守秘義務があるので話せない。正確には、研究所に通っていることは話してもいいが、実験の内容

について話してはいけないことになっていた。しかし、実験の内容に触れずに研究所に通っている理由を説明することはほとんど不可能だと思われた。「あれは、たまたま、同じ方向に用事があって・・」と佐藤は苦し紛れに答えたが、「週に何回も同じ方面で用事があるなんて、本当に偶然だよ」と池島に言われて、それ以上の抵抗は無意味だと悟った。

「こんなやつですが、佐藤のことをよろしくお願いします」と、芝居がかった仕草で太田に頭を下げられた近藤は、内心悲鳴をあげていた。「どうしよう。高橋さんにこの話が伝わったら大変だ。なんとかしないと」と思ったが、もうすでにかなりの人数がこの事件を目撃しているので、噂を止めることは絶望的に思われた。しかし、できる限り噂を否定していくくらいしかできることは思いつかなかった。友人がこの噂をしていたら、とにかく否定していくしかないと思っていた。「早く夏休みにならないかな。夏休みになれば噂も落ち着くのに」と、ただそれだけが唯一の希望だった。

#26 噂（後書き）

よくわからないまま三角関係になりそうな勢いですが・・・

ところで、近藤は、質問とかはあんまりしませんが、普通に話す分には特に無口なわけではないのです。近藤視点の話も増えてくるので、近藤の会話も増えてくるはずですよ。

#27 和解

その日1日、近藤は色々な友達から佐藤のことを聞かれ、そのたびに一所懸命に否定していた。「女子は本当に噂好きだ。」この時ほど心からそう思ったことはなかった。それほど噂の伝達速度は速かった。ほとんど話をしたこともなかったようなクラスメイトまでも、話しかけて来たのだ。「この分じゃ、いつまで持つかかわかんないな」と近藤は考えていた。高橋のクラスのA組は特別クラスなので、他のクラスの生徒と同じ授業を受けている生徒がいないことは、救いだったが、それでもいつまでも持つとは思えなかった。

その日は実験の日ではなかったので、佐藤も近藤も真つ直ぐ寮に帰った。もちろん、あらぬ誤解を招かないように、帰りのバスが一緒ににならないように注意していた。翌日は、実験があつたので、放課後は研究所に向かったが、やはり電車では別々の車両に乗った。さすがに研究所までのバスは一緒だったが、周りに知り合いがいないうことを注意深く確認していた。

「夏休みまで頑張れば、噂は収まるから」と近藤は佐藤を励ました。佐藤は、なぜ近藤がここまで徹底しているのか分からなかったが、この2日間、太田や池島にことあるごとにからかわれていたので、早く収まってほしい思いは同じだった。「後1週間か」と佐藤は心のなかでつぶやいた。

高橋は、佐藤たちよりも先に研究所に着いていた。佐藤は高橋に会うのは、前日の朝のバス以来だったが、その時から2人の会話はギクシャクしていた。2人とも、お互いの顔を見ると、先日のことを思い出してしまって、思わず顔が火照ってしまうのだ。

佐藤と高橋は、お互いの存在を見た後、一瞬恥ずかしさに目をそらしたが、高橋は意を決したような表情をして、佐藤に近づいて行った。「さ、佐藤くん」と高橋が声をかけると、目をそらしていた佐藤は、高橋が近くまで来て初めて高橋が近くにいることに気づいて、驚いた様子で、「はい」と言った。

「あの、この間はごめん。あの、その、いきなり、なんか、だ、抱きついたりして。あの、ほんとごめん。あの時は、なんか、突然、いろんな感情が出てきて、自分が自分じゃないような感じになって、訳が分からなくなって、気づいたらあんなことになってたんだ。ほんとは、そういうつもりじゃなくて、風邪のお見舞いをしようと思っただけで、なんであんなことになったのか分からないんだけど」高橋は、話し始めると、吃りながらも、いつもの倍はある勢いで、話した。

佐藤は、高橋の勢いに押されながらも、すごい剣幕で謝る高橋に何とか割り込んだ。「あ、あの、気にしないでいいですよ。なんていうか、僕は、むしろ、嬉しかったので」と、そこまで言っただけで、佐藤は自分の発言の重大さに気がついて、顔が赤くなった。高橋も、それに気づいて、顔を赤くして驚いた表情をしていた。「あ、いや、その、変な意味じゃなくて、みんながお見舞いに来てくれて嬉しかったってことで、高橋さんの、あの、その」と言いながら、佐藤はだんだん何を言っているのかわからなくなってきた、最後になぜか「ごめんなさい」と謝っていた。

この会話で、佐藤と高橋の件は一応お互いに納得して解決したことになったが、結局、高橋がどういう気持ちで抱きついたのであることは分からずじまいだった。近藤は、佐藤と高橋が両想いであることの確信を深めたが、佐藤はそれほど楽観的ではなかった。

高橋がどう思っているのかもそうだが、それ以前に佐藤自身の気持ちについても確かではなかったからだ。確かに佐藤は高橋のことが好きだったが、これまで恋愛の対象として見たことはなかった。佐藤の中では、もう少し遠い憧れの対象という方が近かった。むしろ、昨日から噂になっっている近藤の方が、恋愛の対象としては近かった。それに、まだ佐藤は、近藤が佐藤のことをどう思っているかも結論も持っていないかった。

「両方勘違いって可能性もあるんだよな」と佐藤は心の中でつぶやいていた。冷静に考えてその可能性はかなりあった。そもそも佐藤は自分のどこに魅力があるのか見当もつかなかった。しかし、それでも、もしかして好意を持たれているかも知れないと思うだけで、高橋と近藤のことを意識しないことはできなかった。

#27 和解（後書き）

立ち直ったとはいえ、佐藤は相変わらず引っ込み思案で慎重です。自分から動く気のないこんなのに恋愛とができるんですかね。

#28 復帰初日

それからは、いつものようにオーラの測定をして、オーラ操作の練習を始めた。田中は、例のアイデアで特許を出願してしまおうということになって、すぐに山科に連れられて部屋を出ていった。高橋は、風を起こす能力の調査が優先ということになって、佐藤たちと同じ部屋で、一人、オリハルコン合金のメダルに向かって息を吹きかけていた。そんな訳で、今まで通りのオーラをメダルに向かって投げる練習は、佐藤と近藤だけでやっていた。

「結局、佐藤くんが不調でも、私は全力を出しても引き分けるのが精一杯なんだね。せつかく勝てると思ったのに」と近藤が言った。メダルがピクリとも動かなかった月曜とは違って、今日の佐藤のメダルは5cm程度は動くようになっていた。期末試験前は、30cmくらい飛んでいたもので、それに比べると威力半減どころではないが、近藤は好調でもその程度動かすのがやっとだったのだ。佐藤は、この威力に不満ではあったが、その不満を近藤に言うのは筋違いだと思ったので、「この前は、ピクリとも動かなかったんだけどね」とだけ言った。

ひとしきり練習して、記録をまとめて金子に渡すと、各種オリハルコン合金のメダルを取り出して、何か新しい使い方はできないかと雑談しながら試してみた。これは、今日から新しく始めた取り組みで、月曜の田中や高橋の発見に続く新しい発見が得られないかと期待してのことだった。しかし、特に新しい発見は得られないまま、次の実験の準備ができた小野が呼びに来た。

藤田と小野は、これまでの実験で分かった、映画を見るとオーラが強くなるという現象に注目していて、その増加したオーラがどこ

から来たのかということを知ることには注力することにしていた。そのため、広い部屋の中の空間を、たくさんの立方体に仮想的に分割して、各立方体の中心に当たる場所にオーラ測定器を設置して、部屋全体のオーラの動きや濃淡を測定できるようにした。特に、部屋を中心付近は立方体の分割の大きさを小さくして、測定精度が上がるように工夫した。その上で、高校生4人が部屋の中心に座って、オーラが強くなりやすい映画を鑑賞することになった。

この装置を使うと、映画を鑑賞する人の周囲で増加したオーラが、周辺のオーラを引き寄せて集められたものなのか、それ以外の別のところから供給されたものなのかを区別することができると考えていた。観測結果を確実にするために、この実験を何回か繰り返し返すので、しばらくの間はこの実験が続くことになる予定になっていた。

「オーラって、壁も突き抜けるんでしたよね。だとすると、部屋の外から入ってくるオーラとかはどうするんですか？」と佐藤は聞いてみた。悪霊退治の現場で、家の外から家の中にあるオーラの集まりに向かって、オーラを撃ちこむことはよくあったので、不思議に思ったのだ。すると藤田が、「だから、こんな広い部屋を使ったんだよ。外から入って来たり、逆に出たりしたオーラの動きは、部屋の壁際の測定器で観測するようになってるんだ」と答えた。

「でも、それだと横からの観測できても、上や下から入って来るのは観測できないんじゃないですか？」と、田中は言った。こういう突っ込みを入れるとき、入学したばかりのころはかなり挑戦的に突っかかっていくところがあつたが、最近はずいぶん落ち着いて質問するようになった。

藤田はうなずいて、「そうなんだよ。一応みんなが座るところに

は台を置いて、上にも下にも測定器を置いてるんだけど、どうしても十分な厚みは取れないからね。まあ、横方向で何も観測されなかったら、縦方向の実験はまた別にやり直すことになるかな。オーラを遮蔽できる部屋があれば、そういうノイズを心配しなくてもいいんだけどね」と言った。佐藤は、「いろいろ大変なんだな」と思っ
て、ふとオーラの遮蔽というところで何か思い出しかけたが、結局、
思い出せなかった。

その日の実験は、それで終わった。復帰1日目ひとまず無事に終わって、佐藤は一安心していた。

#28 復帰初日（後書き）

夏休みになると、時間がたくさん取れるようになるので、実験が早く進むことが期待されます。一つ一つ可能性を拾い上げては潰していくという作業は、時間がかかりますね。真実はいつもひとつで謎はすべて解けたとか言っつて、それですべてが解決すれば楽ですが、それじゃあ科学ではないですから。そつえば、そんな勢いの盛大な誤解を、佐藤が初めの頃にしてましたね。

翌週は、週の半ばまで授業があつて、それからは夏休みだった。近藤は、あと少し乗り切れれば、高橋に例の噂を知られないで済むと、1日1日指折り数えて夏休みを待ちわびていた。

終業式の日は、半日授業だったが、実験の日だったので、佐藤たち4人は待ち合わせして、一緒に食堂で昼御飯を食べてから、研究所に向かうことにした。これまで近藤は、誤解を避けるために佐藤と一緒にいるのを極力避けて来たが、さすがに近藤の周囲では、近藤が佐藤との噂を強烈に否定してきたこともあつて、噂も沈静化してきていた。終業式が終わって実質的に夏休みに入ったことで、警戒を緩めていたこともあり、また、昼食に誘った高橋に対して、誘いを断る適当な言い訳を思いつかなかったので、学校内で4人で昼食をとることに反対はしなかった。

「あ、近藤さん。これからデート？」突然かけられた声に、近藤は戦慄した。慌てて振り返ると、体育の授業で一緒に友人がいた。「よりよって」と近藤は思った。体育は、C組とD組の合同で行われているのだが、その友人とはホームクラスも成績別クラスでも一緒ではなく、体育の授業しか接点がなかったので、近藤は直接噂を否定する機会がなかった。つまり、今日の前いる友人は、今絶対に会いたくない人物だったのだ。

「その人が彼氏？こないだは、授業中に派手に暴露されちゃったみたいで大変だったね」と、その友人は同情するように近藤に言ったが、近藤は「同情するくらいならなぜ呼び止めた」と怒りがこみ上げてきていた。ものすごい形相で友人に詰め寄ると、「ちよつと来て」と言つて、有無を言わさずその場から迷惑な友人を連れ去つ

て行った。

「近藤さんって、あんなキャラだったっけ？」と田中が冷静に突っ込んだが、佐藤はその友人の突然の暴露にヒヤヒヤしていて、田中の発言に返事をする余裕はなかった。少しすると、何事もなかったように近藤が戻ってきて、何事もなかったかのように昼食を食べに行った。佐藤も近藤も高橋も、さっきの事件について触れることを避けていたので、田中も空気を読んで、その話は避けるようになっていた。

「近藤さん、ちょっと。」高橋は、研究所に着くと、トイレにいくふりをして、話を聞かれないように近藤を屋外に連れ出した。7月も後半の午後の屋外は、うだるように暑く、高橋はできるだけ日陰の涼しいところを探して、近藤に話しかけた。「もしかして、間違ってたらごめんなんですけど、さっきの件、もしかして、近藤さん、佐藤さんと付き合ってるの？」高橋は、言葉を選びながら、単刀直入に聞いてみた。

近藤は、恐れていた時が遂に来たと思っていた。ここは全力で否定するしかない。高橋は佐藤のことが好きなのだ。勘違いの噂で人の恋路の邪魔をする訳にはいかない。そう思って、近藤は口を開いて、「そんなことはないよ。あれは、彼女のただの勘違いで、私と佐藤くんは絶対にそんな関係じゃないから」と、言い切った。

「でも、授業中になんかあったって言ってたけど」と高橋が更に追求したので、近藤は、「あれは佐藤くんが休んでた時、心配して様子を聞いたら、それが勘違いされて、佐藤くんと付き合ってるって話になって、それを否定しようとしたら逆に騒ぎが大きくなっちゃって」と弁解して、「完全に誤解だから」とだめ押しに付け加えた。

「でも、さっきの慌てかたはすごかったよね。ほんとに誤解なら、その場で否定すればよかったのに」と高橋は言った。この時、近藤がもう少し冷静で高橋の表情をよく見ていたら、高橋がうつすらといたずらっぽい笑みを浮かべていたことに気づいたかもしれないが、残念ながら今の近藤にはそんな冷静さはなかった。近藤は、即座にそれを反駁しようとしたが、「いや、それは、・・・」と言葉に詰まってしまった。確かに、あの場で彼女を連れ去らなければならぬ理由は、今から考えたらなかったのだ。

「佐藤くんが休んだ時、近藤さん、本当に佐藤くんのこと心配してたみたいだし、佐藤くんのことを気にしてるのは間違いないよね。付き合ってるって話は嘘なのかもしれないけど、近藤さんは佐藤くんのが好きだから、佐藤くんの前で付き合ってるって話を否定出来なかったんじゃない？」と高橋は追い打ちをかけた。「そんなわけない。ただ、あれは衝動的に」と、近藤はなんとか否定しようとしたが、「でも、気づいてないだけで、ほんとは好きなのかもしれない」と高橋に詰め寄られて、返答に困ってしまった。

「私が佐藤くんのことを好きになるわけじゃない。だって・・・」と言いかけて、近藤は黙った。高橋を納得させるには秘密にしていることを言うしかなかったが、近藤は、それを打ち明ける自信と勇気が不足していて、戸惑っていたのだ。

「近藤さんと佐藤くんって、実は結構お似合いのカップルかもよ。前に田中さんと研究所に来るときに、電車で近藤さんと佐藤くんを見かけたけど、田中くんも『お似合いだ』って言ってたし。」高橋は、なぜかむきになったように、近藤をけしかけていた。それは、嫉妬かもしれないし、先日の仕返しかもしれないし、優柔不断な近藤に思い切りをつけさせようとしているだけかもしれないが、

近藤にはその意図は分からなかった。ただ、高橋のその言葉は、近藤に止めを刺した。

「そんな……」近藤は明らかに動揺していた。それを見た高橋は、急に心配そうに「どうしたの？」と聞いた。「私が好きなのは、田中くんなのに」と消え入りそうな声で近藤が言った。

「……、そうだったんだ。ごめん。」思いもかけない急な告白に、高橋はさつきまでの態度を一変させて、本当に申し訳なさそうに言った。「あーしはてつきり、近藤さんが本当に佐藤くんのが好きなんだと思って。なかなか認めないから、ちよつといじわるになったかも。でも、近藤さんが田中くんのが好きなら、あーしは全力で応援するよ！」と、高橋は言いながら徐々に興奮してきて、最後には張り切って断言した。「ちよつとちよつと、声大きい」近藤は慌てて高橋を制した。この炎天下で外にいる人はいないと思うが、万一誰かに聞かれるのは嫌だった。「ごめん」と高橋は謝った。

「高橋さんも佐藤くんとうまくいくといいね」と、近藤はすつきりした表情で言った。元はといえば、そのことが原因で、近藤が佐藤との噂を打ち消そうとしていたのだったので、その誤解が解けた今、近藤は全力で高橋を応援するだけだった。

ところが高橋は、「いや、それは、なんていうか、あの時のあれは、あーしもなんだかよくわからないうちにああいうことになっちゃって。あーし自身、自分の気持ちがよくわからないというか。佐藤くんはもちろん好きだけど、それがそういう意味かっというかと、自信がないというか……」と、高橋が、また顔を赤くして及び腰になって来たので、近藤は、「なにいつてんの。もっと自信持ちなよ」と言っつて、肩を叩いた。

「そろそろ戻らないと。みんな不審に思うよ」と近藤が言ったので、高橋はまだ顔が赤かったが、近藤と一緒に部屋に戻ることにした。

#29 暴露（後書き）

近藤の本心がついに明かされました。佐藤を中心とした三角関係は幻で終わってしまいました。でも、まだ佐藤は三角関係が幻だということに気づいていません。もっとも彼の場合、そもそも全部思い込みじゃないかと疑っているのです、気づいていないからといって彼の側から何か行動を起こすということもなさそうです。

#30 夏休みの計画

高橋と近藤が部屋に戻ると、田中が、「何やってたんだよ、2人とも」と、少し不機嫌そうに言った。歩いてくる間に頭を冷やした高橋が、「女子の会話を詮索するもんじゃないよ」と茶化して受け流した。佐藤は、例の話をしたのかと思って、心配そうに近藤を見たが、近藤がにっこりうなずいたので、佐藤は「うまくいったらしい」とほっとした。

その場には、田中と佐藤の他に、小野もいた。3人は高橋と近藤が帰ってくるまで何かを話していたようだった。「ところで、高橋さんと近藤さん。来週、なんか予定ある？」と、小野が聞いた。2人とも、特に部活をやっているわけでもなかった。特別な予定は入っていないかった。「特にないですけど」と高橋が言っ、近藤もうなずいた。「そうか。じゃあ、来週、海に行かない？」と小野は言った。

「はっ？海って、あの海ですか？」と、高橋が聞き返した。「海って言ったら一つしかないよ」と、小野は言った。「何をしに行くんですか？」と高橋が聞くと、小野は「泳ぎに行くんだよ」と答えた。高橋は噛み合わない会話に少し疲れたようにして、「いや、そうじゃなくて、誰と何のために行くんですか？」と聞き直した。小野は、時々わざと、質問の意図を外したような返事を好んずることとがあつて、それに巻き込まれると大体不毛な消耗する会話になるのが悪い癖だった。

「田中さんと佐藤さんと高橋さんと近藤さんと、後は研究室のメンバーで、浅田さんと藤田さんと金子さんと僕の8人だよ。目的は、ただの慰安旅行かな。今のところ、3泊4日くらいで鎌倉に行こう

って話になつてるところ」と、小野が説明して、「もともと、発案は金子さんで、高校生のみならず実験以外でももつと話をしてお互いにもつとよく知りあうほうがいいんじゃないかって提案したんだよ。で、浅田さんが予算をどっかからぶんどってきて、研究予算で慰安旅行ができるようになったんだ」と追加した。

近藤はそれを聞いて、「金子さんの発案ってことは、この間の佐藤くんの件があったからかな」と思ったが、それを聞くのははばかられたので、黙っていた。

「鎌倉って海なんだ」と佐藤がつぶやいた。関西出身の佐藤にとって、鎌倉と言えば幕府であって、海ではなかったのだ。小野は、「海だよー。三方を山に囲まれ、一方が海に面した地形っていうからね。夏は海水浴場になって、結構人気なんだよ」と、どこかで聞いたことのあるフレーズに絡めて説明して、「海に飽きたら、お寺とか神社とか見て回ったらいいし、おいしいお店もあるはずだよ」と言った。

高校生4人とも、特に夏休みの予定を立ててはいなかった。週に旅行の予定を入れることに何の問題もなかった。急な予約だったにも関わらず、平日だったこともあって、鎌倉の旅館に空きがあったので、予定通りに鎌倉に行くことになった。高校生の親には金子が連絡を取って、問題なく承諾を得た。

夏休みは高校の授業がないので、実験に使える時間が格段に増えた。スケジュールは相変わらず平日の週3日だけでも、いつもは放課後から夕方までの間しか実験に参加できないが、夏休みは昼過ぎから夕方まで使えたので、時間は2倍以上になって、さらに終わる時刻も少し早くなった。しかし、時間が増えたら暇になるかと思つたら、1学期の間に藤田がいろいろな実験のアイデアを貯めてい

たらしく、むしろ忙しいくらいになった。

実験のほうが忙しいのはいいことなのだが、佐藤は別のことで気掛かりなことがあった。それは勉強のことだった。気分的には立ち直ったものの、期末試験の結果が悪かったことは変わらないので、なんとか挽回をしないといけないと考えていた。しかし、どうやって勉強したらいいか、悩んでいた。一応、学校の授業でも夏休みの宿題が出てはいるが、それだけでは心許なかったので、何か別の勉強もするべきかと思っていたのだ。

「近藤さんは塾とか行ってる？」と、佐藤は、一番成績が近い近藤に聞いてみた。近藤は、「行ってない。授業の予習が大変で、塾に行く余裕がないと思ったから。でも、やっぱりどこか行っただほうがいいのかな」と答えた。少し近藤と話して、同じようなことで悩んでいることが分かった佐藤は、他の人の意見も聞いてみようと話して、2人で誰か参考になりそうな人を探した。

ちょうどいいところに小野がいたので、2人は小野に勉強と塾について話を聞く事にした。小野は東大現役合格で勉強に関しては苦労したことがないと言っているような人なので、はっきり言って参考になるかどうかは疑問も多かったが、誰よりも勉強に関してはエキスパートであることは間違いないので、話を聞いておかない理由はないだろうと考えたのだ。

「夏休みの勉強？」と小野は聞き返した。「そうだね！。夏休みになったからって、時間が増えるだけで特別やり方が変わると思わないけど、せつかく時間があるし授業もないから、授業の進度を気にしなくてもいいことをするといいかもね。英語の小説を1冊読んでみるとか、大学1、2年向けのテキストを読んでみるとかしたければ、夏休みはうってつけだよな」と言い始めた。「案の定あ

まり参考にならなそうだな」と佐藤は思っていた。

すると、「無難なとこだと、1学期の復習かな」と小野が続けた。予想外のまともそうな話に、佐藤と近藤は身を乗り出した。「夏休み明けって、実力試験とかってあるんじゃない？一年生なら、あれは1学期の内容から出題されるはずだから、それでいい点を取るのを目標にすればいいかもね。多分、応用問題が中心になって、英語とかも教科書にない長文が出たりすると思うから、問題集とか買ってやってみるといいかもね」といって、小野はさらに願ってもないことを提案した。「なんなら、実験が終わった後に、ここで1時間くらい勉強してたら？分からないところとかあったら見てあげるよ。」

佐藤と近藤は、一も二もなく賛成して、実験の後に勉強をしていくことになった。田中と高橋もその話を聞きつけ、その勉強会に参加することになった。一応、実験室を使う許可を得るために、浅田と藤田と金子に話を通したら、快諾した上に、暇があれば先生役になってもいいと3人も言った。考えてみれば当たり前だが、3人とも高学歴で高校生の勉強くらいなら普通に見られるので、小野と比較しても先生役としては遜色なかった。また、この話の中で、浅田も東大出身だったということがわかって、高校生4人は研究所の学歴の高さを思い知らされていた。

こうして、勉強とサイキネシスに明け暮れる夏休みが始まった。

#30 夏休みの計画（後書き）

そんなわけで海に旅行が決まりました。研究費で海に行くのってありなんですかね。全体的にこの研究室は羽振りが良さそうですから、そのくらいひねり出すのは訳ないんでしょう。

3 1 鎌倉

日に日に気温が上がっていく7月の下旬の日に、浅田研究室一行の8人は、鎌倉駅のホームに降り立っていた。高校の最寄り駅に朝9時に集合してから、新宿の乗り換えを含めて、湘南新宿ラインを使って1時間30分くらいの移動時間だった。3泊4日の滞在先は、由比ガ浜に近い若宮荘という旅館だ。江ノ電で数分で降りて少し歩いたところにあつて、旅館についたときには11時になっていた。

「通勤ラッシュでもないのに何であんなに混んでるんだ」と、佐藤は辟易しながら心のなかでつぶやいていたが、佐藤よりも藤田のほうがそれをより実感していたに違いなかった。藤田以外の7人は3泊4日の着替えや水着や洗面用具などを持っているだけだったが、藤田はそれに加えてもう一つスーツケースを持っていたのだ。その中身について、特に誰も聞かなかったが、浅田と金子と小野はその中身を知っているようだった。

案内された部屋は3室で、すべて和室だった。部屋割りは、浅田と藤田で一部屋、小野と田中と佐藤で一部屋、金子と高橋と近藤で一部屋ということになった。金子が、年齢と性別に基づいてその場で部屋割りを作ったのだが、藤田を除いた全員が賛成した。「これじゃ、慰安旅行にならないよ」と、ぼそつと藤田がこぼしているところを、金子が聞きつけて「藤田さんは半分仕事じゃないですか」と突っ込むと、藤田はため息をつきながら、「浅田さんはワーカホリックすぎるんだよな」と浅田に聞こえないように言った。

「僕と藤田先生は、これから夜までやることがありますから、みんなは金子先生と小野くんと一緒に海に行くなり山に行くなりしててください」と、浅田は言うど、部屋に荷物を置いて、藤田を連れ

てさつさと出掛けて行った。その時、藤田は例のスーツケースを一緒に持って行った。高橋が「浅田さんは何をしに行ったんですか？」と聞くと、金子は「夜になったら直接聞いてみるといいんじゃない？」と言った。

6人は、お昼前なので小腹が空いてきていたが、海に行けば海の家があるはずということで、昼御飯の前に海に行くことにした。旅館は海から歩いて数分のところにあつたので、旅館で水着に着替えて海に行くことにした。男3人は判で押したようにトランクスタイルの水着にビーチサンダルを取り出した。水着は学校指定のものでなく、佐藤は旅行の直前に駅前のデパートで買ったばかりのものであった。

「田中くん、腹筋割れてるじゃん。」小野の声に振り向くと、ここには見慣れない細身のムキムキマッチョが立っていた。「誰？」と佐藤は自問してみたが、田中以外にあり得ないことは百も承知だった。「Tarzanとかに出てきそうなイメージだな」。読んだことないけど。むしろビキニでもよかつたんじゃない？」と小野が言ったが、言いたい気持ちは佐藤にもよくわかつた。「医者は体力ですから、毎日鍛えてます」と田中は言った。「そういえば、田中は医者志望だったな」と佐藤は思い出したが、「だからといって、どんだけ鍛えてるんだ」と心の中で突っ込んでいた。

海水浴にシャツは不要だけでも、旅館から海までは公道を歩くので、海に着くまではみっともないので半袖のTシャツを着た。旅館に着くまでの道のりで、ビキニの水着だけのグループが公道を歩いているのを見たが、それはさすがにどうだろうと思う。田中は着痩せするタイプなのか、Tシャツを着てしまうとムキムキの筋肉は見えなくなつて、ただの背の高い高校生になる。トランクスタイルの水着の裾からのぞく太ももや、Tシャツの袖から見える二の腕の

一部から、その筋肉の片鱗を見ることができると、多分、普通は気づかない。

ロビーに出てしばらく待っていると、金子たちが遅れてやってきた。3人とも、ビキニの上に着を着ていた。金子は白い薄手の夏物のパーカーを羽織っていて、高橋は肩が紐のワンピース、近藤はタンクトップを着ていた。正確には、高橋はワンピースを着ていたから、ビキニかどうかははっきりしなかったのだか。高橋も近藤も水着は学校指定のものではなく、カラフルで柄のかわいいものを着ていた。

水着になると、普段はあまりはつきりしない体型の細部がよく見える。例えば、田中がムキムキマッチョだったということがわかったりする。そういえば、田中のマッチョはまだ女性たちには気づかれていないようだ。

金子は、普段着の時から胸の大きい人だと思っていたが、ビキニに前開きのパーカーを着ると、谷間が強調されて、目のやり場に困る。近藤も、制服の時はあまり気づかなかつたが、意外に胸が大きかった。金子と比べるとやや小さいが、高校1年生としては平均より大きい方なのではないだろうか。それに対して、高橋は、制服の時は近藤とそれほど差があるとは思っていなかったが、水着になってみるとその差ははつきりしていた。別にないわけではないのだが、2人に比べるとやはり差があるのだった。

「そういえば、あの時はどうだったっけ」と、佐藤は高橋に抱きつかれた時のことを思い出して、胸の感触を再現しようとしたが、すぐに、今それを考えるのは危険だと思って、頭からそのイメージを追い払った。

高橋が水着の上に着ているワンピースは、体型的な不利を補って余りあるかわいさを表現していた。一般的に、ワンピースは胸の大きな女性には不利な形状の服だ。というのは、胸を収めると腰回りがぶかぶかになってしまつて、太った印象になってしまうからだ。しかし、胸が小さめだと、スリムでシンプルなAラインのワンピースが自然にフィットする。高橋の選んだワンピースは、そういう特徴をうまく捉えたデザインのものであった。

と、こう書くと、胸ばかり注目しているみたいだけれども、別にそこまで胸フェチな訳ではない。むしろ、水着の女性の胸以外のところに注目するほうが、いろいろと物議をかもしそうな気がする。胸に目が行くというのは若くて初々しい証拠なのだ。と佐藤が思っていたかどうかはわからないが、金子たち3人が現れた時、男3人はほんの数秒、女性3人を見つめたまま、誰も声をかけずに沈黙してしまつた。

それを見て金子が、「こら、その男ども。高橋さんと近藤さんがかわいいからつて、そんなにじろじろ見るんじゃない」と、からかう口調で爆弾を落とした。本人は空気を和らげようと思つたのかもしれないが、爆弾は高橋や近藤までも誤爆して、金子を覗く5人は顔を赤くして余計何も言えなくなつてしまつた。誤爆に気づいた金子は、一瞬「しまつた」という顔をしたが、すぐに気を取り直して、「お腹すいたから、早く海に行こうよ」と言つて、先導して旅館の外に向かつて歩き始めた。5人も、やや気まずい雰囲気のまま、金子に続いた。

#31 鎌倉（後書き）

なぜ女子の着替えのシーンを書かないだと怒られそうですが、この話はお色気皆無なので、この程度で限界です。

ちょっと長めの3泊4日の旅行なので、いろいろなことが起きると思います。特に、佐藤と高橋、田中と近藤の微妙な恋にも進展があるといいですね。サイコキネシスの方でも何かしら進展が見られればと思います。

平家物語も更新しました。「一ノ谷の戦い」です。どうぞよろしく。
<http://ncode.syosetu.com/n7303u/>

#32 海

天気は快晴で、絶好の海水浴日和だった。ビーチは大きく弓型に反っていて、その湾の一番奥のあたりが海水浴場の中心だ。旅館から道なりに歩いてくると、東西に伸びる国道に出たところで一気に視界が広がって、国道を渡るともうそこは海。国道の手前まで続く住宅街と、目の前に広がる海とのギャップが、かえって海の実在感を強く感じさせた。波は穏やかで、満ち潮に合わせて波打ち際で崩れる程度ではあったが、降り注ぐ陽の光がキラキラと反射していて美しかった。時折吹く風は、夏の暑さに火照った体を冷やすと共に、海の匂いを運んできて、本当に海に来たという実感をいだかせた。

ビーチには、国道沿いに隙間なく海の家が立ち並んでいた。夏休みのせいかなんかいいいせいか、ビーチにはすでに大勢の人がいたが、足の踏み場もないという程ではなかった。6人はいかにも海の家という雰囲気の一軒に入って昼食をとり、その後は、まずは海に入っ

て泳ぐことにした。

田中が泳ぐために、上に羽織っていたTシャツを脱いだのを見て、近藤は思わず胸がドキドキした。服を着ている時は、細身で知的なイメージだったのだが、服を脱いで水着になると雰囲気が一変したのだ。正直、こんなに筋肉質なボディだとは想像していなかった。勉強ができる人は運動不足で体力がないと思いついていたので、田中も当然そうだと思っていたのだが、実際には上から下まで均整のとれた筋肉がついていて、近藤くらいなら軽々と持ちあげられそうだった。

「田中くん、カッコいいね」と耳元で高橋にささやかかれて、近藤は我に返った。「そ、そうだね」と答えると、「見とれてたでしょ」

と指摘された。確かに近藤は見とれていて、その上、言われるまでそのことに気づいていなかった。高橋の指摘に思わず赤くなってしまった。

ひとしきり海で泳いだ後、みんなで集まってビーチボールで遊んだ。普段から運動しているわけではなかった。さすがにそれだけ運動すると疲れてしまった。そこで、一休みすることにして、アイスを買ってきた。汗をかけた後に食べるアイスは格別に美味しかった。その後、しばらく砂で山を作ったり、浜辺に絵を描いたりして遊んだ。

普段から運動していて体力のある田中は、もう一度泳いで来ると海に入って行った。高橋は他の海の家を見てみたいと、海岸の端から端まで歩いて来ようと誘った。佐藤は一緒に行くと言ったが、金子と小野は留守番すると言って断った。近藤は、高橋と佐藤を2人きりにしようと思って断ろうとしたが、高橋がしつこく誘うので、一緒に行くことになった。せっかくだから田中も誘おうかと思ったが、海は広くてどこで泳いでいるのか分からなかった。

一口に海の家と言っても、そこにはいろいろな種類のものがあった。おしゃれなカフェのようなものや、野外ステージを備えた開放的なもの、有名ブランドのコンセプトショップのようなものまであった。高橋は完全にシヨッピングモードに入って、次々と気になる海の家を覗いて回ったので、連れ回される形になった。佐藤は、若干疲れているようだった。近藤は、最初こそ佐藤に遠慮していたが、すぐに高橋に巻き込まれて一緒に盛り上がった。

3人で海岸を歩いていると、不意に近藤の真横のすぐ近くから声を掛けられた。「こんにちは。かわいいね。どこから着たの？」声があまりに近かった。近藤がぎょつとしてそちらを見ると、い

かにもチャラチャラした男が2人、こちらを向いて立っていた。「とりあえずさー、その辺でアイスでも食べない？おごるよ？」と言ったところで佐藤に気づいたらしく、「そんな男と遊んでるより楽しいと思うよ」と言ってきた。「ナンパだ。どうしよう」と思って近藤は、3人の中で唯一の男である佐藤の方を見ると、佐藤は目を丸くして雰囲気に飲まれているようだった。

「結構です」と高橋が言い切つて、「行こ」と言つて、佐藤と近藤を引つ張つて、どんどん歩き始めた。ナンパ男2人は、3人を両側から囲むように歩いてきて、なお声をかけてきた。高橋を中心に右に佐藤、左に近藤という並びだったので、右の男からのプレッシャーは佐藤が間に割り込むことで遮られていたが、左の男からのプレッシャーは近藤が直接受けるようになっていた。

男たちは、初めのうちはナンパ目的で、アイスを食べようとかご飯を食べようとかどこに住んでいるとか電話番号を教えたとか言っていたが、高橋が怒つたような顔で完全に無視してどんどん歩いて行くので、だんだん嫌がらせをするようになってきて、プライベートルトなことを聞いてきたり、スリーサイズを聞いてきたり、卑猥な話を聞いてきたりするようになった。近藤は、恥ずかしくなって俯きながら、高橋に遅れないように一所懸命にただ歩いていた。歩いている先には、金子と小野がいるはずだったので、そこまでたどり着けばなんとかなると、それだけを考えていた。

「おい、ちょっと、聞いてんの？」と、突然、近藤は腕を掴まれた。心臓が飛び出しそうなほど驚いて、怖くなって足が完全に止まってしまった。高橋と佐藤も、近藤が突然止まったので、足を止めて振り向いた。その時、不意に、近藤の腕を掴んだその手の手首を、誰かがさらに掴んだ。「嫌がつてるから、手を離してくれないかな」と、突然現れたその男が言った。ナンパ男はびっくりしたのか、そ

れとも掴まれた力があまりに強かったからなのか、手首を掴まれるやいなや近藤の腕を離したので、近藤は解放された。

「田中くん」と高橋が言ったので、近藤は慌てて助けてくれた男の方を見た。すると、そこにいるのは確かに田中だった。海から上がったばかりのせいかな髪も水着も水に濡れて水滴が滴り落ちていた。海岸から走ってきたようで、荒い息遣いが近藤の耳まで届いていた。

田中は、男の手を掴んだまま、特にそれをどうするということなく、ただじつと男の様子を警戒するように観察していた。すると、「チツ、ダッセ」と捨て台詞を言って、男は力任せに田中の手を振りほどいて、去っていった。もう一人の男も、何も言わずにつばを吐いて、男の後を追って去っていった。

近藤は、張り詰めていた気が抜けて、思わずその場に座り込んでしまった。田中が「大丈夫？」と聞いたが、近藤は「大丈夫」と答えたものの、立ち上がることができなかった。「しばらく休んで行ったほうがいいかもね」と言って、田中がその場にしゃがんだので、佐藤と高橋も同様にその場に座った。2人のナンパ男は遠くに行っ てしまつたらしく、あたりを見回しても見当たらなかつた。田中の筋肉に恐れをなしたのか、あるいは田中をライフセーバーと勘違いしたのか、理由は分からなかつたが、とにかくさっきの2人の男はその後、姿を見かけることはなかつた。

#32 海（後書き）

田中の株が急上昇中です。近藤の見る目は確かだったということでしょうが。

#33 迷子

10分ほど休んで、近藤が落ち着いて歩けるようになったので、金子と小野の待つ場所に向かうことにした。4人が着いた時、小野は金子に向かって、砂浜に何かを書きながら、何かを力説しているところだった。砂浜には、何を意味しているのか分からない丸や線や矢印が描かれていて、更に数式もその横にいくつか並んでいた。金子は、小野の話聞きながら、相槌を打ったり、質問をしたりしていた。

4人は、最初、サイコネシスの実験の話かと思ったのだが、よく聞いてみるといつもと少し雰囲気が違うし、中に出てくる単語も聞きなれないものが含まれていた。佐藤は経験上、ここで小野に質問するのは自ら地雷を踏みに行くようなものだと思ったが、みんながそう思った訳ではなかった。

「ダークマターってなんですか？」好奇心に負けた高橋の質問が呼び水になって、小野の特別講義はそれから1時間も続いた。ようやく理解できたのは、オーラは実はダークマターかもしれないという新説を小野が唱えているということだった。ダークマターが何かは、結局よく分からなかった。ただ、さすがに、ただおとなしく聞いているだけでなく、途中で茶化したりできるようになったので、退屈するほどではなかったし、この小野の講義を聞いているうちに、さっきの不快な出来事を忘れてしまったので、結果的にはよかった。

まだ日はあったが、旅館の夕飯の時間が近づいて来たので、旅館に引き上げることにした。旅館に帰って着替えた後は、小野の部屋に集まることにした。まだ夕飯まで時間があるので、金子と小野は夜のためにお菓子や飲み物の買い出しに行くことにして、コンビニ

を探しに出かけていった。

「私、ちよつと海岸に行つてくる」と近藤が言った。高橋が「えっ？一人で？」と言うと、近藤は「タオルをどこかで落としたみたい。ちよつと行つてすぐ帰ってくるから」と言った。高橋は「さつきみたいにおかしなやつがいるかもしれないし、一人はよくないよ。田中くん、一緒に行つてあげてよ」と、意味深な笑みを浮かべて、田中を指名した。「え？俺？」と田中が聞き返すと、高橋は「いいじゃん、別に。何も予定もないでしょ？」と言って、戸惑う近藤と田中を強引にドアの外に追い出した。

「なんで高橋さんは田中くんを追い出したんだろう？」と佐藤は思った。客観的には近藤を心配してボディガードをお願いしたのだが、高橋の態度からそれ以上の何かがあると直感した。おそらく、高橋の真意は、近藤と田中がふたりきりになれる時間を作ろうとしたのだが、副産物として佐藤と高橋がふたりきりになる時間も一緒に作る事になった。そして、近藤が田中に好意を持っている件を、佐藤はまだ知らなかった。佐藤は、高橋の意図が読めなくて、ふたりきりになった部屋の中で、ドキドキを抑えきれなくて息が苦しくなってしまうた。

「あ、えつと、その、せつかくだから外でも散歩しない？」と佐藤は言った。これ以上部屋の中にいると、窒息しそうだった。「いいよ」と高橋は二つ返事で同意した。

話の内容はとりとめもないことばかりだった。ただ、暑いだとか、アイス美味しいだとか、リスがいただとか、江ノ電がかわいいだとか、そんな話をしていた。高橋は好奇心の赴くまま、細い路地をあちこち歩いてきた。鎌倉の道はどこも細く、しかも真っ直ぐに伸びていない。歩き慣れている人でも、初めての道がどこに続いている

かを予測するのは難しいので、観光客は路地には入らない方が無難なのだ。当然、2人は、気がつくまで道に迷っていた。

「あれ、本当、全然道が分かんない」と、高橋はだんだん心細くなってきて、少し涙ぐみながら言った。佐藤は視覚的な記憶力に恵まれているので、道に迷うことは少ないはずだったが、高橋の存在に気を取られてしまっていたことと、あまりにもグルグルと道を歩きまわったことで、もと来た道をたどることは難しかった。

「あっちに行こう」と佐藤は指を指した。高橋は驚いて「道、分かるの」と聞いた。佐藤は「分からないけど、多分、南の方に行けば海に出ると思うから、そこまで行けば帰れると思う」と言った。

何とか旅館にたどり着いた時には、もう日が陰ってきていた。旅館の前では心配そうに金子がうろろうろしていた。「佐藤くん、高橋さん、どこに行ってたの！」金子は少し怒っているようだった。佐藤と高橋はすぐに謝った。「ごめんなさい。ちょっと歩くだけのつもりが、道に迷っちゃって」と高橋が言うと、金子は「携帯はどうしたの？何回もかけたのに」と言った。そういえば、ちょっとだけの散歩だと思っていたから、携帯は電源を切ったまま旅館の部屋に置いたままだった。そのことを言うと、「今度から外出するときは、必ず携帯を持っていくように」と金子に命じられた。

#33 迷子（後書き）

佐藤と高橋、田中と近藤の間に進展はあるんでしょうか？せっかくの旅行ですし。

ダークマターが何か気になる人はググって調べてみてください。

3 4 五条慎一郎

道に迷った佐藤と高橋だったが、夕飯の時間には間に合った。夕食は他の客も食事をする大広間の二画に、8人のための席が設けられていた。海でしつかり運動してお腹が空いていたので、ご飯は特に美味しかった。もちろん観光地バイアスも、味覚に影響していたことは間違いがない。お腹いっぱいになって幸せな気分になった後、風呂に入ることにした。風呂は大浴場で、残念ながら温泉ではなかった。寮暮らしの佐藤たちには、大浴場はそれほど感銘を与えるものではなかったが、さすがに観光地だけあって、雰囲気のあるお風呂ではあった。

お腹いっぱいになって、さっぱりした8人は、小野の部屋に集まった。部屋には既に布団が布いてあった。3人部屋に8人が入るのは、さすがに狭かったが、それぞれ思い思いの場所に座って雑談をしていた。雑談で一番盛り上がっているネタは海で起きたナンパ野郎と田中の活躍の件だった。例によって高橋が少し脚色を入れながら、面白おかしく話を盛り上げていた。

田中の話も一段落したところで、佐藤は疑問に思っていたことを聞いてみた。「浅田さんと藤田さんはどこに行ってたんですか？」それに対して、浅田は「ちよつとオーラの測定にね」と答えた。「また悪霊退治の件ですか？」と佐藤は聞いたが、悪霊退治に参加している金子と小野が2人も関わっていないのか不思議だった。浅田は「まあ、広い意味ではそうだけど、そのものではないかな」と言って、説明を始めた。

「環境中のオーラの分布についてはまだ分かっていないことが多いんだけど、五条の話を中心に、今までいろんな人がバラバラに観測

した結果をつなぎあわせて分析したら、古くからある寺社仏閣の中にオーラが多く集まっているものが見つかったんだよ。で、こういうところは、五条によれば、浮遊しているオーラを引き寄せて安定化する効果があるんだって言うんだね。しかも、自然発生したものでなく、昔の僧侶や神官や陰陽師とかが、オーラの自然発火現象による災害を抑えるために、工夫を重ねて作ったものなんだそうだよ。」

「それで、金子先生が旅行に行きたいって言うから、せっかくだから鎌倉に行って寺社仏閣の詳細なオーラの調査をやってみようと思ってるね。鎌倉は歴史的な寺社仏閣が狭い範囲に集中している場所だから、面白い結果が得られるんじゃないかと思ったんだよ。」と浅田は言った。「じゃあ、藤田さんが持っていた荷物って」と近藤が言うと、「オーラ測定器だよ。しかも簡易式のだけじゃなくて精密測定用のも持ってきたから重くって」と藤田が言った。

「そんなわけで午後いっぱいかけて鎌倉を測定して回ったんだけど、鎌倉は本当に寺とか神社とかが多いね」と浅田が言った。「まだ半分以上残ってるから、明日も一日観測だよ」と言うと、藤田が「浅田さんは歩いてるだけだからいいですけど、僕は測定器を持って歩いてるんですから。もう今日だけで全身筋肉痛ですよ」と愚痴をこぼした。

「五条さんって誰？」と高橋が言った。佐藤を除く高校生3人はまだ五条にあつたことがないのだ。金子が「五条さんは浅田さんの高校の同級生で、宮内庁に勤めている人だね」と説明しかけると、浅田が「陰陽師だよ」と言った。

「陰陽師？」と高橋は聞いた。田中と近藤も訝しげな表情をしている。浅田が、「そう。陰陽師。彼の家は世間的にはあんまり有名

じゃない陰陽師の家系でね、でも特殊な職で代わりがないってことで、生まれた時から宮内庁に入って陰陽師としての仕事をするこ
とが決まっていたんだよ」と言っ、浅田と五条の関係を説明し始め
た。

.....

五条の家は、平安時代から続く陰陽師の家系だった。当時の貴族
社会を牛耳っていた藤原氏の傍流の傍流であった人の一人が、陰陽
道を極めることで身を立って、五条を名乗ったのがその起こりだっ
た。政治的に成功した安倍氏とは異なり、道を極めても表舞台に立
つことを嫌っていた五条家は、歴史の文献にはほとんど姿を見せな
いものの、陰陽師の世界では名前の知られた存在だった。特に、悪
霊退治の知識と技能において、五条家を上回る陰陽師は存在しないと
とされていた。

明治維新の後、陰陽寮が廃止になってからも、悪霊退治に長けた
五条家はそのまま宮内省に所属し、戦後、宮内庁に変わった後もそ
の職務を変えることはなかった。表向きは陰陽道に関する文献の収
集管理という名目だが、実際には陰陽師として日本全国を飛び回っ
て、各地の悪霊を鎮めて災害を未然に防ぐ仕事をしている。

浅田と五条の出会いには桜山高校に入ってからだった。たまたま席
が隣り合わせになった2人はすぐに意気投合して、いつも一緒に行
動するようになった。浅田は五条のいう陰陽道というものにたまた
なく知的好奇心を刺激されて、五条はいつも胡散臭い目で見られる
陰陽師という肩書きに純粋な好奇心を向ける浅田に興味を感じてい
たのだ。

2人は別々の大学に進学したが、進学後も交流は続いた。五条は、

高校時代にお見合いした相手と大学在学中に結婚し、大学卒業後は予定通り宮内庁に入庁した。その数年後に、五条は父を仕事中の事故で亡くした。陰陽師の仕事は危険と隣り合わせのため、伝統を絶やさないためにできるだけ若い内に子どもを作って後継者を育てることが求められているのだ。

浅田は高校時代から抱き続けていた陰陽道への疑問を解決するために、大学在学中にさまざまな分野の文献を読みあさったが、陰陽道に裏付けを与えるような科学的な糸口を発見することはできなかった。さすがに諦めて、陰陽道のことを半ば忘れかけていたところに飛び込んできたのが、オリハルコンの発見の知らせだった。

これが陰陽道の解明の鍵に違いないと直感した浅田は、途中まで進めていた研究に見切りをつけて、オリハルコンの研究に没頭した。表舞台に立つことを嫌がる五条に、匿名を条件に個人的に研究に協力してもらって、陰陽道でいうところの悪霊と浮遊オーラの自然発火現象とが同一の現象であることを発見した。これは重要な発見であったものの、五条の希望により論文として発表されることはなかった。

ある時、五条の方から浅田に、オーラ操作の指導をする代わりに悪霊退治に協力して欲しいという依頼があり、オーラの強かった金子に白羽の矢が立って悪霊退治プロジェクトが始まった。このプロジェクトも五条の希望により非公式として扱われたが、オーラ操作の方は陰陽道との関連を伏せて論文として発表した。

さらに五条はオーラ操作の素質のある高校生を選抜して、特別なプログラムで訓練することにより強力なオーラ操作能力を開発するプロジェクトを提案した。これに、浅田自身が興味を持っていたテーマである、精神活動とオーラの関連や、10代後半のオーラの極

大期の解明のプロジェクトを組み合わせることで、佐藤たちが参加するプロジェクトが始まったのだ。

・
・
・
・

#34 五条慎一郎（後書き）

悪霊退治のところで登場して、オーラを直接感じる事ができるとで知られた五条ですが、実はもっとすごい人でしたという話でした。

#35 市内観光

「え、じゃあ、僕達がサイコネシスの実験に参加することになったのって、もともと五条さんが言い出した話なんですか？」と佐藤が聞くと、「提案しただけじゃなくて、文科省との交渉も五条がまとめたんだよ」と浅田が言った。他の高校生3人は、五条に会ったことがないため、そんな人がいたのかと感心していたが、佐藤は「まさか、あの五条さんがそんなに重要人物だったとは」と内心驚いていた。

「そろそろもう遅いから寝ないとね」と金子が言っつて、全員、自分の部屋へ戻って寝ることになった。昼間、海で疲れていたため、電気を消して布団に入ると、佐藤はすぐに意識を失った。

翌朝、佐藤は朝7時半頃に起きた。もう田中は起きて着替えて顔を洗った後だった。小野は全く起きる気配もない様子だった。朝食は9時までなので、小野はもう少し寝かせておくことにして、佐藤は手早く着替えて顔を洗った。

洗面所は玄関の脇にあつて、顔を洗つて戻ってくる時に、玄関の床に何か落ちていることに気づいた。じつと見てみると朝刊が置かれていたのだった。おそらく旅館のサービスだった。佐藤は何気なく拾つて、部屋に戻った。上京してから、テレビも新聞も見えないので、すっかり時事に疎くなっていたので、たまには新聞でも読んでみようと思つたのだ。

「あれ、天皇陛下って体調わるいの？」佐藤は一面の隅の方にあつた、天皇陛下が入院したという記事を見て、田中に聞いた。「あー、確かにそんなニュースを最近新聞で見たな」と田中が言いなが

ら、佐藤が見ている新聞を覗き込んだ。「五条さんって、確か宮内庁だよ。何か関係してたりするのかな？」と佐藤が言くと、田中は「五条さんって人は悪霊退治の専門家なんだろ？なら、関係ないんじゃないか？」と言った。佐藤も「それもそうか」と思っ、その話はそのまま忘れて、他のニュースに目を移した。

結局、金子が朝食に誘いに来て、やっと小野は起きた。着替えや洗面があるので、すぐには出られなかった。同じく寝ていた藤田と一緒に後から朝食に行くことにして、残りの6人で先に食堂に向かった。

今日も、浅田と藤田はオーラ地図の作成のために、オーラの測定をしてまわることになり、残りの6人は海ではなく、市内観光をすることになった。市内観光を3日目にすると、藤田が海にいけなくなってしまうので、藤田が拗ねたからだ。女子と男子で希望が違ったので、午前中は男女で別行動で、女3人は小町通りでショッピングをして、男3人は駅から離れた山の方のお寺の見学に行くことになった。

昼前に6人は合流して、小町通りから少し入ったところで昼食にした。狭い路地の奥の目立たない店なのに、6人が着いた時にはもう行列ができていた。「こんな行列ができるってことは、きっと美味いんだよね！」嬉しそうに言っているのは金子だった。総じて、女性は行列の長さに喜んでいて、男性は行列の長さに辟易していた。

「そういえば、佐藤って、絵、上手いの？」行列待ちの退屈紛れに田中が話題を振った。佐藤は絵のことは誰にも話していなかったし、話すつもりもなかった。田中の切り出しに驚いた。「えっ、何で？」佐藤が慌てて聞き返すと、田中は「いや、この間、佐藤の部屋に行っただじゃん？その時、本棚にスケッチブックが立ってあっ

たし、昨日、砂浜で絵を描いた時も、確か上手かったような気がしたから」と言った。

「あー、確かに上手かったかも。佐藤くん、絵、上手いんだ。」面白そうな話題に目がない高橋も、話に参戦してきた。「大して上手くないから。そんな人に言うほどのことは」と佐藤はとりあえずこの話題を長く続けたくはなかったので、適当に流そうとしたが、高橋は許してくれなかった。「てことは、絵を描いてるのは本当なんだ。」佐藤は内心、「しまった」と思ったが後の祭りだった。

「ねっ。なんか、絵、書いてみてよ」と高橋が言った。佐藤はこれまで自分の絵を人に見せたことがなかったので、あまり描きたくなかったが、断る口実も特に思いつかなかった。とりあえず、「ここじゃ落ち着いて描けないし」と言うのと、高橋は「じゃあ、今日の夜、絶対見せてね」と言っつて、いい笑顔を見せたので、佐藤はちょっと嬉しくなつて、「まあ、夜まで覚えてたら、描いてもいいかな」と思った。

#35 市内観光（後書き）

佐藤の絵のことがとうとう公になりました。後、五条の周囲でも何か事が起こりそうです。

#36 八幡宮

昼食の後は、6人は鶴岡八幡宮に向かった。「ここは広いから、自由行動にしましょう。1時間したら太鼓橋のところで集合ってことで」と金子は言つて、「私と小野くんはちよつと浅田さんの様子を見てくるから、みんな迷子にならないようにね。特にその2人」と指を指して釘を刺し、「聞いてない」という顔をしている小野を引つ張つて行つてしまった。

4人が八幡宮の奥の方へ歩き始めた時、高橋が突然、「あ、あーし、ちよつとさつき通りすぎたお店で見たいものがあるから、近藤さんと田中くん、先に行つてて」と言い出した。「あれ？僕は？」佐藤は自分の名前がないことに気づいて聞き返した。すると高橋は、「佐藤くんは、あーしと一緒に来て。昨日みたいにナンパ男に絡まれたり、迷子になったりするとよくないから」と言った。「ナンパ男に絡まれた時も、迷子になった時も、僕が一緒だったんだけどな」と佐藤は思ったが、高橋の迫力に口を閉じた。

一緒に行くと言う田中と近藤を押し戻して、高橋は佐藤を連れて行つてしまった。近藤は、高橋が気を使って、近藤と田中が2人きりになれる時間を作ろうとしてくれていることに、昨日から気づいていたので、恥ずかしいような嬉しいような気持ちだった。「あの人は、一体、何なんだろ」と田中が言ったが、何なのか分かっていない近藤はそれには答えず、代わりに「じゃあ、どこから回ろうか」と言った。

高橋に連れ去られた佐藤は、昨日のこともあつて、何を高橋が企んでいるのか知りたかった。最初は、高橋が自分に用があるのかと思つていたが、昨日は何もなかったので、別の目的だと推測してい

た。しかし、それが何なのかは分からなかった。田中たちが見えなくなつてから、高橋に聞いた。「高橋さん。もしかして、田中たちとわざと別行動にした？」すると高橋は「あ、ばれた？」と言つた。

「そりゃ、バレバレだろ」と佐藤は思ったが、そうとは口に出さず、代わりに「何で、そんなことするの？」と聞いた。高橋はちょっと首を傾げて考えているようだったが、「これは秘密だから、秘密が守れるなら教えてあげる」と言つた。「分かつた」と佐藤が言うのと、続けて「あと、今日の夜、絶対、絵、描いてね」と高橋が言つたので、佐藤は仕方なく「分かつた」と答えた。

「実はねえ、」高橋は、ちよつともつたいぶつたように言うときよるきよると周りを確認して、耳を寄せるように手招きした。佐藤は、「こんなところに知り合ひなんていないのに、大げさだな」と思ったが、体を傾けて耳を近づけた。高橋は内緒話をするように佐藤の耳元に口を近づけたが、佐藤はその予想以上の接近に思わず心臓が高なつた。高橋の息遣いまで聞こえて、胸がドキドキして息苦しくなる。

「近藤さん、田中くんのが好きなんだつて。」高橋の口から出た秘密は、佐藤にとって予想外のものだった。「え？本当に？」と佐藤が思わず聞き返すと、耳元から口を離れた高橋が「本当だよ。本人に聞いたんだから」と言つた。近藤と佐藤がうわさ話になつたのは、つい先週のことだ。だから佐藤は、近藤が自分のことを好きなのか、それともただの友達なのかということは考えても、近藤が田中のことが好きかもしれないとは想像もしていなかつた。

なぜか少しショックを受けた気分になつて、佐藤が高橋に「もしかして、金子さんも知ってるの？」と聞くと、高橋は「午前中に話

した。近藤さんがいないときに。結構、ノリノリで、『この恋はぜ
ひとも実らせてあげよう』だって」と言った。「じゃあ、小野さん
は知らないんだ」と佐藤が言うと、「金子さんが言っただけなら、
知らないと思うよ」と言った。さっきの金子と小野の不自然な様子
は、それが原因だったのかと、佐藤は納得した。

「そろそろ戻る？あーしも鶴岡八幡宮の中とか見てみたいんだよ
ね」と高橋が言ったので、佐藤は一緒に八幡宮に戻った。「なんか、
これって2人きりのデートみたいだな」と、高橋の隣を歩きながら、
佐藤は思った。

余分なことで時間を浪費してしまった佐藤と高橋は、駆け足で観
光を済ませて、なんとかぎりぎり集合時間に間に合った。「もう
ちよつとゆつくり見たかったなー」と今更な後悔をつぶやく高橋に、
「自業自得だから」と佐藤は突っ込みを入れていた。その自然な突
っ込みを見た近藤は、目を細めてにこにこしていた。

#36 八幡宮（後書き）

近藤の件を出汁にして、佐藤と高橋が急接近しています。この2人、これからどうなるのでしょうか？

#37 富士山

その後、八幡宮を後にして、大仏、長谷寺などを徒歩で観光した6人は、夕方頃にすっかり歩き疲れて旅館に戻ってきた。

「つ、疲れたー。もう、今すぐにも風呂に入って寝たい」と言っただのは小野だったが、寝たいはともかく風呂に入りたいというのは、おそらく6人の総意だった。「お風呂、もう開いてるみたいだし、ご飯までまだ時間があるから、先にはいつちやう？」と金子が言ったので、皆、先に風呂に入るようになった。

夕飯も済ませ、昨日と同じように、小野の部屋に浅田たちを含む8人が集まった。話題は当然佐藤の絵のことだった。いつの間にか用意されている紙とシャープペンシルを見て、佐藤が「人に見られると描きにくいな」と言うと、浅田が「僕の部屋を使ってもいいよ」と言ったので、佐藤は「じゃあ、10分から20分くらいで戻ってきます」と言って、藤田から鍵を受け取って部屋を出ていった。

しばらくして、佐藤がひと通り描き終えて部屋に戻ってくると、待つてましたとばかりに高橋に出迎えられた。「ね。何描いたの？ やっぱり大仏？」と高橋に聞かれて、佐藤は「あ、いや、違う。でもそっちのほうがよかったかな」と言って、丸めた紙を渡した。

「…、すごい。本当に上手い。」佐藤に渡された紙を開いてみて、高橋は一瞬、息を飲んだ。他の6人も見たがったので、絵の描かれた紙を近藤に渡して、高橋は「これ、リス？」と佐藤に聞いた。「うん。昨日、見たやつ。昨日のだけじゃなくって、この辺は結構リスがいるみたいだね」と佐藤は言った。昨日見たリスとは、佐藤が高橋と道に迷ったときに見たリスのことだ。その時に高橋が「リス

だ、リスだ」とはしゃいでいたことを、佐藤は覚えていた。

「この絵、なんていうか、心を打つものがあるね」と近藤が言った。「そうだね。この絵を見ると胸が締め付けられるような」と金子も近藤の指摘に賛同した。「ね、佐藤くん。この絵、あーしがもらっていい？」と高橋が言うと、佐藤は「いいよ。そんなんでよければ。ゴミにならないといいけど」と言ったので、「そんなことしないよ」と高橋はやや心外そうに言った。

「藤田さん。オーラの測定器ってありましたよね」と、田中が何かに気づいたように言った。藤田は「僕の部屋にスーツケースに入れておいてあるけど」と言うと、田中は「ちょっと借りてもいいですか？」と聞いた。佐藤が受け取ってまだ返していなかった鍵を受け取った田中は、藤田の部屋に行つて、スーツケースからオーラ測定器を取ってきた。

「高橋さん、ちょっとその絵、貸してくれる？」田中は高橋から佐藤が描いた絵を受け取つて、「これは俺の勘んだけどね」と言いながら、オーラ測定器をかざした。すると、測定器にオーラの反応が出た。この結果には、その場にいた全員が驚いて大騒ぎになった。確認のために、何度も条件を変えて測定しなおしたが、何度測定しても絵の上にかざした時だけオーラが観測された。

「これは不思議だ」と浅田が言った。「何回描いても、何を描いても、誰が描いてもオーラが検出されるのか、もっとちゃんと調べないと」と言つて、浅田が藤田を見ると、藤田は「僕は嫌ですよ。明日は海で泳ぐんですから」と必死の形相で抵抗した。「まさか旅行を切り上げて帰れなんて、言うわけないじゃないか」と浅田は言つたが、目があまり笑つていなかった。

あまりに大騒ぎしたので、何事かと従業員の人が確認に来てしまったので、浅田が大丈夫だと説明して、この件は、続きは研究所でということ、一旦打ち切りになった。絵は、浅田が欲しそうにしていたが、高橋が死守して、盗られないように自分の部屋の鞆の中にしまい込んだ。

翌日は、雨だった。藤田のあまりの落ち込みようには、誰もかける言葉がなかった。

雨になってしまったので、8人は海水浴を諦め、江ノ島に向かうことにした。雨は午後には弱くなるということだったので、午前中に水族館に行って、午後には傘を差して江の島を観光しようということにしたのだ。もし雨が上がったら、藤田のために、片瀬海岸の海の家にも行ってみようということになった。

雨は夕方までには上がり、西の空は晴れて西日が差すようになった。例によって高橋の策略で、海岸で自由行動となり、佐藤は高橋と海岸を歩いていた。

「あ、富士山だ」と佐藤が言った。晴れ上がった西の空に、背後から西日を受けて、一際大きく優美なシルエットが浮かび上がっていた。佐藤も高橋も、バスや新幹線の窓越しでない富士山を見るのは初めてだったので、思わず息を飲んでその姿に見入っていた。

「旅行、楽しかったね」と高橋は言った。「そうだね」と佐藤は答えた。「暗くなる前に戻ろっか」と高橋が言って、2人は皆が待つ集合場所に向かった。

翌日は、朝食を食べてから10時ごろにチェックアウトして、そのまま帰路についた。午前中は市内観光をするつもりだったが、前

日の夜、最後の夜だからと夜更かしして大貧民をやっていたついで、炎天下の街中を歩き回る体力は誰も残っていないかったのだ。

こうして、3泊4日の鎌倉旅行は幕を閉じた。高橋がキューピッド役を努めようと頑張っていた近藤と田中だが、前よりも少し打ち解けて話すことができるようになったものの、それ以上の決定的な進展はなかったようだ。そのことに高橋は悔しがっていて、今後もしさらにキューピッド役に邁進することを、佐藤の前で誓っていた

#37 富士山（後書き）

やっと旅行は終わりです。次回からはまた研究所での日々に戻ります。

#38 オーラと芸術

旅行から帰ってから、佐藤は悪霊退治に復帰することになった。佐藤のオーラ操作能力はまだ十分に回復してはいなかったが、金子との連携プレーで十分に戦力になるという結論になったためだ。

佐藤の絵にオーラが検出された件は、その後、もっと精密な測定にかけた上で、佐藤がそれまでに描いた絵を何枚かと、新しく研究所で何枚か描いて、それもすべて測定にかけた。さらに、高橋、田中、近藤や、金子、藤田、小野にも絵を描いてもらって、測定することになった。また、美術品全般にオーラが検出されるかもしれないと考えて、近くの美術館にお願いして、展示品のオーラ測定も行った。

その結果は、美術品の中にはオーラが検出されるもの「も」あるという結果だった。美術館の美術品には、何点かオーラが検出されるものがあり、佐藤以外が描いた絵からは検出されなかったが、佐藤が描いたものにも、何点か検出されるものがあった。検出されたものと検出されなかったものの違いは分からなかった。高橋によれば、「オーラ付きのほうが全体的にいい絵だね。なんていうか、共感しやすいっていうか」ということだったが、それを科学的に測定するのは難しかった。

旅行前から取り組んでいた、映画鑑賞時に増加したオーラの侵入経路を調べるという実験は、予想外の結果になった。事前の予想では、佐藤たちが映画を見る時に、その周囲で増加するオーラは、どこか外部から流入する場合、流入経路に沿ってオーラが観測されると考えられていた。また、外部からの流入でない場合は、どこにもオーラの増加が観測されないと思われていた。

しかし、実際に観測されたのはそのどちらでもなく、スクリーンとスピーカーとDVDデッキの周辺でオーラ濃度の上昇が観測された。しかし、その間の経路ではオーラ濃度の上昇は観測されなかった。

「これは、何が起こっていると考えるべきなんだろうな」と藤田は一緒にデータを分析していた小野に話しかけた。「そうですね。まず考えるのは、スクリーンやスピーカーがオーラの伝達経路だったのか、あるいは、共振するような形で同時にオーラ濃度が上昇しただけなのか、の切り分けですかね」と小野は考えながら答えた。「そうか。伝達経路なら、始点の付近でオーラ濃度が低下してるはずだな」と言って、藤田は再度データに目を通した。

「やっぱり、オーラの増加分に釣り合うだけの減少が観測されているところはないですね。スクリーンとスピーカーとDVDデッキの周辺でオーラが増加しているところは、さらにその周りのところで少しだけオーラが減少しているみたいですけど、それは大した量ではないですし」と、藤田と一緒にデータに再精査していた小野が顔を上げて言った。

「うーん。だとすると伝達経路ではないということなのか。あ、でも、DVDのメディア自体がオーラを持つているってこともありえるな。佐藤さんの絵にもオーラが観測されたし、ありえない話ではないかも……。まあ、とりあえず、そっちは後で調べるとして、スクリーンと観客の間の伝達経路でオーラ濃度の上昇がない件はなぜかっつても問題だな」と藤田は考え込みながら言った。

「うーん。そうですね。例えば、オーラの状態にも、いろんな状態があるって言うのはどうですか？」と小野が言った。「ちよつと

よく分からない。どういうこと？」と藤田は問い返した。

小野は、「例えば、水は、氷になったり水蒸気になったりするじゃないですか。つまり、固体、液体、気体のことですけど、オーラもそういう違いがあつて、液体の時だけしかオリハルコンとは反応しなくて、測定器では観測できない。だけど、実は固体状態のオーラとか、気体状態のオーラとかがあつて、例えばスクリーンから観客の間は、気体状態でオーラが移動しているとか」と説明した。

「状態が3つじゃなくて2つでいい気がするけど、そのアイデアはありだな。オーラには、オリハルコンと反応する状態とそうでない状態があつて、スクリーンと観客の間はオリハルコンに反応しない状態で移動していると」と藤田は確認するように言った。「じゃあ、それをどうやって証明しようか」と藤田は付け加えた。

「観測できないと、手が出ないですねえ」と小野は困った顔で言った。藤田は「とりあえず、オリハルコンと反応するオーラを活性状態として、反応しないのを不活性と呼ぶことにするとして、不活性オーラを観測できなくても、活性オーラを観測して、こちらのオーラがあちらに移ったと言えれば、間接的には証明したことになるんじゃないかな」と言った。

小野が「でも、今回の実験だと、伝達経路の始点ではオーラの減少は見られなかったですよ。藤田さんがさっき言つてみたいのに、DVDメディアに不活性オーラの状態でオーラが蓄えられていて、それを放出しているのだとしたら、その実験方法だと証明も反証もできないですよね」と言つたので、藤田は腕を組んで考えこんでしまった。

#38 オーラと芸術（後書き）

オーラの分類が複雑になってきたので、ここでちょっと整理を。

活性オーラ

生体オーラ

浮遊オーラ

不活性オーラ

オーラはまずは、オリハルコンを触媒にサイコキネシスを引き起こすかどうかで分類されます。サイコキネシスを引き起こすものを活性オーラ、そうでないものを不活性オーラと呼びます。オーラ測定器はオリハルコンを利用しているので、活性オーラしか測定できません。なので、現状、不活性オーラを観測する方法は存在せず、また、そもそも不活性オーラが実在するのかどうかも証明されていません。

活性オーラは、生体の周辺で観測される生体オーラと、それ以外の場所で観測される浮遊オーラに分けられます。また、この他にもさらに分類が追加される可能性もあり、例えば、美術品の周辺で観測されるオーラや寺社仏閣で観測されるオーラは特別扱いしてもよいかもしれません。

活性オーラには、オリハルコンを触媒にしたサイコキネシスの他に、オリハルコンなしにサイコキネシスが発現する自然発火現象という現象がありますが、これは今までのところ、浮遊オーラでしか発生が報告されていません。

39 自然発火現象

研究所には、各フロアにミニカフェという設備がある。大した設備ではないのだが、飲み物の自動販売機やティーパックやコーヒーマーカーが設置されていて、お菓子やパンも置いてある休憩スペースだ。有料のものもあるが無料のものもあるので、お金を持っていかなくても口に入れるものはある。夏休みに入って研究所に滞在する時間が長くなったので、佐藤たちはちよくちよくミニカフェを利用していた。

ある時、佐藤と高橋が休憩でミニカフェに來ると、佐藤の知っている先客がいた。「坂井さん、こんにちは。」先客は、坂井直毅さかいなおきといて、浅田の研究室とは別の研究室に所属する研究員で、悪霊退治の観測班の1人だった。主に20代の研究員で構成されている悪霊退治のメンバーの中では、珍しい30代のメンバーだった。

「こんにちは、佐藤くん。そっちの子は？」と坂井が言った。「高橋です。佐藤くんと一緒に実験に参加しています」と高橋は自己紹介をした。「こんにちは。坂井直毅といいます。よろしく」と坂井は言った。

「そういえば、坂井さんは何の研究をしているんですか？」と佐藤が聞くと、「自然発火現象だよ」と坂井は答えた。「あー、確かに、自然発火現象って突然起きるし大変ですからね。予防とかできればいいですよ」と佐藤が言うと、「いや、僕の研究は自然発火現象を抑える研究じゃなくて、自然発火現象を人工的に起こす研究なんだよ」と坂井は訂正した。

「え？どういうことですか？」と佐藤は坂井が何を言ったのか理

解できず、聞き返した。「人工的に自然発火現象を起こすんだよ。実験室の中で、自然発火現象を起こして、オリハルコンを使わないでサイコキネシスを発生させる方法を研究してるんだ」と坂井は言った。

「自然発火現象つて、なかなか消えないしつこい火事を起こす現象ですよ。それを人工的に起こすんですか？」と高橋が質問した。「自然発火現象は、『発火』っていうけど、火事には限らないんだよ。規模が小さいのは火事になることが多いけど、規模が大きいと他の災害を引き起こすこともあるんだ。まあ、それはともかく、自然発火現象を人工的に起こせれば、いろいろいいことがあるんだよ」と坂井は答えた。

坂井は「オリハルコンの問題つて何だと思う？」と問いかけた。「量が少ないことですか？」と高橋が聞くと、坂井は「まあ、今はそれもあるけど、もっと本質的な問題は、オリハルコンを触媒にしたサイコキネシスは、出力が小さいってことなんだよ。例えば、オリハルコンを使えばオーラを電気エネルギーに変換できるけど、その出力は測定器を作る程度には使えても、家庭や工場の電力を賄う水準には程遠いんだ」と答えた。

「でも、それが一体自然発火現象とどういう関係があるんです？」と佐藤が聞くと、坂井は「自然発火現象は、オリハルコン・ベースのサイコキネシスに比べて、出力が圧倒的に大きいんだ。少なくとも、水をかけても火事が消えなくらいの出力はある。それに、自然発火現象は濃度の低い浮遊オーラがなんらかの理由で凝集して起きているから、そのメカニズムを調べれば、浮遊オーラをエネルギーに利用できるかもしれない」と答えた。

「それ、すごいじゃないですか。エネルギー問題が一気に解決し

ますよ」と高橋がやや興奮して言った。「そう、すごいんだよ。ただ、問題は、自然発火現象が実験室で起こせないってことなんだ」と坂井は複雑な表情で言った。その返事を聞いて、高橋は「え、じやあ、ダメじゃないですか」とちよつとがっかりして言った。

「いや、今のところ誰も成功していないってだけで、まだいろいろ実験しているところだから。今も、山科先生にお願いして、特別製のピストンを作ってもらってるところなんだよ」と坂井は元気づけるように言った。「ピストンって何ですか？」と高橋が聞いた。

「ピストンってのは、エンジンの部品のこと、燃料が爆発するエネルギーを運動エネルギーに変換する部品のことだよ。注射器みたいな構造で、中で燃料が爆発すると、爆発エネルギーに押されてピストンが動くんだ」と坂井は言って、「山科先生に作ってもらってるのは、オーラを透過しない物質で作った特別なピストンで、それを使えばオーラを圧縮して、自然発火現象が起きる濃度までオーラ濃度を人工的に上げられるんだ」と追加した。

高橋が「あれ、山科先生って、オーラ測定器の？」と言うと、坂井は「そうだよ。山科先生はデバイス作成のエキスパートだからね。元々民間企業の技術者だったんだけど、腕を買われて研究者として引き抜かれたくらいだから」と言った。

そこまで話したところで、坂井はふと時計を見て、「あ、やばい。ミーティングに遅刻してる。それじゃ、また」と言って、急いでミニカフェから出ていった。佐藤と高橋も、道すがら自然発火現象のことについて話ながら、実験室へと戻った。

#39 自然発火現象（後書き）

それがどんなものであれ、観測可能なら法則を導こうとし、法則が分かるなら制御しようとし、制御できるなら人間の役に立てようとなります。そのエネルギーが科学を発展させているのです。

#40 好きなこと

夏休みに入って3週間が過ぎたが、佐藤の生活は規則的だった。

週3日はサイコネシスの実験があり、実験の後2時間くらい小野や金子や、たまに藤田に付き合ってもらって勉強をした。残りの4日は、1日数時間くらい勉強する他は、高橋、近藤、田中と遊びに行ったり、太田や池島と遊びに行ったり、絵を描いたり本を読んだりして過ごしていた。

田中はあまり付き合いがよくないが、図書館にだけは文句を言わず一緒に来るので、田中と近藤を2人きりにさせたい高橋の策略で、週2回は4人で図書館に行くのが恒例になっていた。もちろん、何かしら理由をつけて、途中で高橋と佐藤は席を立って、田中と近藤を2人きりにさせるのだ。そして、その副作用として、佐藤と高橋も週2回、図書館で2人きりでおしゃべりをするのも恒例になっていた。

佐藤と高橋のおしゃべりのテーマは多岐に渡った。サイコネシスや勉強のことも話したが、趣味の話をたくさんした。佐藤は上京してからテレビもラジオも聞かないので、音楽を聞くのは研究室からの帰りの金子の車の中だけだったが、高橋に勧められて安いCDプレイヤーを買って、高橋から借りたCDを聞くようになった。2人とも本を読むので、おすすめの小説を教えあったりもした。

高橋が特に興味を持ったのが、佐藤の絵だった。高橋は勉強ができるが、彼女にとってそれはあまり特別なことだとは思っていないらしく、むしろ芸術的な才能がある方がすごいと思っているようだ。高橋は音楽を嗜んでいるが、自分自身にはあまり音楽の才能がないと言っていた。小学校に入った頃から中学3年まで

それなりの情熱を持って続けてきたが、超えられない壁を感じただという。

そんな高橋から見て、佐藤の絵はその壁を超えているように見えるのだと、高橋は言った。高橋の求めに従って、佐藤は絵を描くようになった経緯や、どういう気持ちで絵を描いているのかを話した。

佐藤が絵を描き始めたのは、多分、小学校中学年くらいのころだった。最初は、頭に思い浮かんだものを、教科書やノートの隅に落書きしていただけだった。そのうち、落書きの大きさが大きくなってきて、勉強のノートか落書き帳が分からなくなってきたので、専用のノートを使うようになった。

最初の頃は、うまく絵がかけると人に見せて自慢していたが、ある時、美術の時間に自信を持って描いた、当時の佐藤にとっての大作が美術の先生にけなされたことで、人に作品を見せるのを嫌がるようになった。けなされたことそのものもショックだったのだが、それ以上に、その先生から感じた無関心な感情が、佐藤の心を傷つけたのだった。

「その先生は、多分、熱心な先生っていう評判のある先生だったんだけど、その先生は、その絵がどういう絵かっていうことよりも、どういう技法で描いているかってことのほうが大切だと思っていて、僕の絵が先生が指示した技法をきちんと使っていない気がしたのが気に食わなかったんだよ。その時の僕は、僕の絵をわかってくれていると思っていた先生が、実は絵自体に関心を持っていなかったことがショックだね」と佐藤は当時を思い返しながら言った。

「ひどい先生だね。そんな、関心がないなんて面と向かって言ったの？」と高橋が言うと、佐藤はちよつと不思議な顔をして、「い

や…、そういえば、先生は技法を正しく使っていないということに怒っていただけで、関心がないとは言っていないかと思う。でも、なぜかその時はそう思ったんだよね」と言った。

その後、佐藤は兄と同じように中学入試をするが、楽々と最難関校に合格した兄とは違い、結局どこにも受からなかったことがきっかけで、公に絵を描くことはなくなり、人目を忍んで自室で時々描くようになったのだった。

「なんか、結構、苦労してるね」と、佐藤の話聞いて高橋は言った。「苦労って言うのかな。絵は好きで描いてるだけで、何かを得るために描いてるわけじゃないから」と佐藤は言った。「そっか、好きで描いてるのか。…、あーしの場合は何のために音楽をやったのかな」と高橋は自問するようにつぶやいた。

#40 好きなこと(後書き)

佐藤と高橋は、こつ見えて何か通じるものがあるようです。

悪霊退治に復帰してから、佐藤はすでに4回出勤していた。学校が夏休みのため、昼間の呼び出しでも応じることができたため、復帰前よりも頻度は増えていた。

しかし、オーラ操作能力の回復の方は一向に進まなかった。最盛期は100MPを超えるオーラの塊を操作することができたが、今では30MPを超えるのがやっとだ。それでも金子や他の高校生よりは高い数値だったが、佐藤としては納得がいかなかった。

それは悪霊退治のスタイルにも影響が出ていた。以前はどんなに高濃度の浮遊オーラでも、一発で吹き飛ばしていたのだが、今の佐藤のオーラ操作能力ではそれほどの威力を出すことができないため、観測班の指示を受けながら、金子との連携プレーに頼るスタイルになっていた。

佐藤は次第に、自分のオーラ操作能力をなんとか回復させることはできないかと考えるようになっていた。それは自己愛から来る焦りとは違った。その感情は、高橋に抱きしめられ、学校と実験に復帰したときに乗り越えていた。そうではなく、今の佐藤の感情は、好奇心によるものだった。

夏休みに入ってから、佐藤は自分とオーラとの関係が想像よりも深いと感じ始めていた。そして、それは、佐藤が描いた絵の分析が進むに連れて深まっていった。当初、佐藤は、自分の絵からオーラが検出されたのは、1学期の間オーラの操作を訓練したためだと思っていた。しかし、実際には、オーラは小学校の頃に描いた絵からも検出されていたのだ。

これは、佐藤にとっては予想外の結果だった。なぜなら、これは佐藤が小学校の頃からオーラを操作する能力があったことを示唆しているからだ。もちろん、絵から検出されるオーラと、今、実験で訓練しているオーラ操作とは関連がないかもしれないが、しかし、佐藤が描いた絵から特別にオーラが検出されるということは、小学生の佐藤が何かしらの形でオーラに干渉していたことは間違いがないと思われた。

「オーラって、一体、何なんだろう？」

佐藤は徐々に、オーラを知ることとは、自分を知ることだと思おうようになっていた。

藤田と小野は議論の末、絵、美術品、映画について観測された一連のオーラに関する測定結果から、一つの仮説を導き出した。その結論とは、次のような内容だった。

1、芸術品は、生命体と同じようにオーラを持つことがある。これは、オーラの観点から見て、芸術品が擬似的な生命体として活動している可能性があることを示唆している。

1、人が芸術品を鑑賞するときには、人も芸術品もオーラの活動を活性化させる。これはまだ、人と芸術品の間でしか観測されていないが、人と人との間でも同様の現象が起きる可能性がある。ただ、それがどういう現象であるかはまだ分からない。

1、人が芸術品を鑑賞することでオーラが活性化する場合、その芸術を伝える媒体でもオーラの活性化が起きる。これは、投影されている場所が一時的に擬似的な生命体として活動しているためか、

あるいは単にオーラの中継地点であるためなのかはまだ分からない。

芸術品が生命体であるかは、そもそもオーラの観点から見た生命体とは何かということが分からなければ、議論のしようがないので、その件について結論を出すことはできなかった。また、人と人との間でオーラの活性化を起こすような現象が起きるかどうかは、どういう現象であるかの糸口がつかめるまでは、手当たり次第では効率が悪くて手を出す術がなかった。

そこで、人と芸術品の間関係に焦点を絞って、次の点について実験を行うことにした。

1、映画以外の他の芸術品やモノとして残らないライブの芸術（生演奏や芝居など）についても、オーラの活性化が見られるかを調べる。

1、芸術品を鑑賞する媒体が変わっても、同じように媒体の周辺でオーラの活性化が起きるかどうかを確認する。例えば、DVDからテレビやラジオの放送に変わったときにどうなるかを調べる。

1、芸術品の作成の過程で、オーラがどのような状態になっているかを調べる。

実験の規模が大きくなってきて、藤田と小野だけで全て行うことは難しくなってきたため、浅田と相談して、他の研究室から協力を募って、浅田がプロジェクトリーダーになって全体をまとめていくことになった。藤田はその内の1プロジェクトを担当しながら、浅田の補佐として全体の管理も行うことになり、更に仕事が増えると嘆いていた。

3つ目の実験は、佐藤に全面的に協力を依頼して、オーラ測定器に囲まれる中で絵を描いてもらうことになったため、藤田の担当となった。佐藤は旅行のとき、人前で絵を描くのを嫌がっていたので、承諾を得られるかどうか分からなかったが、まずは正面から当たってみようということで、佐藤と個人的に話をすることにした。

4 1 仮説（後書き）

観測結果を整理して、仮説を立てて、仮説を証明する方法を考えて、実験して、観測結果を整理しての繰り返しで、研究というのは進んでいくのです。

4 2 協力

「佐藤くん。突然呼び出してごめんね」と藤田は佐藤に言った。いつものように昼過ぎに研究所にきた佐藤は、いつものオーラ測定を終えるとすぐに藤田に個人的に呼び出されたのだ。「あ、いえ。大丈夫です。何ですか？」と佐藤は答えた。こういう呼び出しは、これまで金子からは数回あったが、藤田からは初めてだった。

藤田は、今議論している最中のオーラについての新しい仮説と、浅田がプロジェクトリーダーになって進めることになった新しいプロジェクトについて、簡潔に説明した。佐藤は、例によって理屈っぽい藤田の話し方にとりどころ混乱しながらも、小野のフォローを受けながら、なんとか概要は理解した。

「で、お願いというのは、佐藤くんが絵を描いているところを、オーラ測定器で測定したいということなんだけど」と藤田は言った。佐藤は「いいですよ」と即答した。これには藤田も小野も少しびびりしたらしく、「いいの？ほんとに？」と藤田に聞き返された。

「というか、むしろ、僕の方から逆にお願いたいと思っていたくらいなので」と佐藤は答えた。藤田が「それはまたどうして？」と聞くと、佐藤は「僕は、自分のことをもう少し知りたいと思ったので」と言つて、自分とオーラの関わりについて疑問に思っていることを話した。

「それは、言われてみれば確かに不思議だね」と、佐藤の話聞いて、藤田は言った。「でも、佐藤くんは初めからオーラの測定値がかなり高かったんだから、昔からオーラの操作ができてたとしても、不思議というほどではないよね」と小野が付け足した。

「それはそうですけど、でも、僕は絵を描いているときにオーラを操作しているという自覚はなかったの」と佐藤が言うと、藤田は「つまり、佐藤くんは何か別なことをしているつもりで、気づかない内にオーラを操作してたってことか」と言った。「そうか。もしかすると、佐藤くんは昔からオーラのこと気づいているのに、何か別のものと思いついてるって可能性があるんだ」と小野はうなずきながら言った。

「僕にとってその何かがどういうものなのか、まだ分からないですけど、それがもし分かるのならそれを知っておくことは、もしかすると僕にとって大切な事なのかもしれないと思ったの」と佐藤は言った。

実験は、いつものように進められることになった。佐藤が絵を描く周囲に沢山のオーラ測定器を配置して、オーラの変化を測定した。また、佐藤が使う画材のオーラ濃度を、絵を描く前と絵を描いた後に測定した。

実験はなかなか上手くは行かなかった。佐藤の描いた絵にオーラが検出されないのだ。絵にオーラが検出されなければ、周辺のオーラ濃度の測定も意味を成さない。

「上手くいかないね。」何回目かの失敗の後、藤田は言った。「そうですね。」佐藤は申し訳なさそうに答えた。慌てて藤田は「いや、佐藤くんのせいじゃないよ。そもそも絵にオーラが与えられるプロセスは、まだ何も分かっていないんだし」と気遣った。

とはいえ、佐藤はやや落ち込んでいた。せつかくつかめると思っていた自分とオーラとの繋がりの手掛かりが、またもや自分の不甲

斐なさのせいでつかみ切れないというのは、苦しかった。

「そういえば、五条さんってどうしてるんだろう？」と佐藤はふと思った。五条なら、何かヒントをくれるかもしれないと思ったのだ。しかし、最近、どういうわけか五条は悪霊退治の方に姿を見せていなかった。以前も毎回現れたわけではないが、何回かに1回は姿を見せていたのだけれど。

「例の天皇陛下の入院の件で、何かあったのかな」と佐藤は思った。

#42 協力（後書き）

一歩ずつ近づいているようで、なかなか姿を現さないオーラの正体に、佐藤はフラストレーションを溜めてきています。五条はそんな佐藤に対して、何か手掛かりを与えられるのでしょうか？

4 3 友達

始まった頃にはいつまでも続くように感じられた夏休みも、いつの間にか後10日を切っていた。高校生4人は、研究所で実験の後にする勉強会のお陰で、夏休みの最後に宿題に追い回されるという状態になることはなさそうだった。しかし、勉強以外のことに目を移すと、夏休み前に立てた課題をやりきれたかというところでもなかつた。

佐藤は未だにオーラ操作能力の回復とオーラの理解への手掛かりをつかむという目標のどちらも達成できていなかった。キューピッド役を買って出た高橋は、田中と近藤のいつまでも進展しない関係にじれったく思っていた。

進展しないのは、田中と近藤のどちらが原因なのかと問われると高橋はどちらとも言い難いと思っていた。2人きりにしても、田中は紳士的に、常に適度な距離を保っている。いつかの海での件のように、何かあれば手助けすることは厭わないが、積極的に近藤を誘うようなことはしない。

「男つてのはね、よっぽど軽薄な奴でもなければ、女の子から好意を寄せられて、悪い気はしないはずだよ」と高橋は近藤にハツパをかける。「だから、思い切って近藤さんの方からデートに誘いなよ」と言うと、近藤は恥ずかしそうにうつむいた。

「でも、田中くん、もう好きな人がいるかも知れないし」と近藤が言うと、高橋は「田中くんが付き合ってる人がいないことは確認済みだよ。もしかしたら心のなかで好きな人はいるかも知れないけど、そんなのいちいち気にしてたら仕方ないじゃない。ここはぶつ

かってみるべきだよ。夏休みが終わる前に。ね？」と近藤に促した。

「そう…、だね。夏休み、終わっちゃうよね」と近藤は言った。

近藤は、もともと夏休み前までは田中に告白するつもりはなかった。田中と自分はちょっと違う存在だとなんとなく思っていて、一緒にいられるとドキドキして幸せだが、田中のほうが自分を選んでくれることはないと思っていた。だから、研究所で一緒にいられる時間があるだけで十分で、それ以上自分から接近するつもりはなかった。

ところが、佐藤との噂の件で誤解を解くために高橋に田中のことを話したことがきっかけで、高橋が半ば強引にキューピッド役を買って出て、近藤は戸惑う反面、うれしい気持ちがあった。それは、でも、田中と付き合うための布石というよりも、より長く一緒にいる時間ができるという意味で幸せだったのだ。

しかし、もう、夏休みは終わってしまった。

夏休みが終わると、また学校が始まり、研究所にいる時間も短くなってしまふ。平日に図書館にみんなで行くこともなくなってしまう。今のように高橋にうまく2人きりになるように仕向けてもらうことも難しくなるに違いない。

そう思うと、急に切なさが入り込んできてくる。

別に、元通りに戻るだけ。夏休み前までも、近藤は十分に幸せだったはずなのだ。だから、夏休みが終わって元に戻っても、幸せなはずだ。そのはずなのに、近藤は消えない胸の痛みを戸惑っていた。

でも、怖かった。最初の一步を踏み出すことは、その後にくみを進めることよりも、はるかに勇気のいることだった。近藤は、田中に決定的な一言、友達という関係を破壊して、恋人という関係かあるいは別れかを選択させる一言を口にすることに恐怖を抱いていた。

「高橋さんは、本当にすごい。」近藤は改めてそう思っていた。高橋が佐藤を抱きしめたあの日のあの光景を思い出しながら。

あんなことをしたら、2人の関係が友達のまままでいられるなんてとても思えない。気まづくなってどちらかが研究所に来なくなってしまうことだってあったかもしれない。でも、高橋はそれを乗り越えて、本人は未だに否定するが、2人は恋人同士のようにいつも楽しそくに話している。

「私に、同じことができるかな。」

このまま何もせず、友達という関係のまま、2学期を迎えることもできる。それは確実な未来だ。その未来を捨てる覚悟はあるのか。近藤は悩んでいた。

4 4 立ち聞き

その日は、朝から雨が降っていた。

だからというわけでもないが、近藤は珍しく少し時間に遅れて研究所に着いた。

いつもの実験室へのいつものように歩いて行くと、途中の会議室から声が聞こえてきた。

「高橋さんと田中くん？」

盗み聞きをしようと思ったわけではないが、自然と扉の前で足が止まって、聞き耳を立ててしまう。中から聞こえてくる声は2人だけで、話の雰囲気からも佐藤はいないようだった。

「なあに？話って？」と高橋は田中に尋ねた。どうも、高橋は田中に呼び出されたようだ。「…、ちよつと気になることがあって」と田中は切り出したが、なぜか話しくそくにしている。近藤は、神経を集中させ、全身が耳のようになって会話に集中していた。

「お前さ、なんか、この夏休み、ずっと変だっただろ？」と田中は言った。「え、そんなことないよ」と高橋は何のことを言われたかわからないという様子で答えたが、田中は「いや、変だったよ。例えば、図書館とか。お前が誘っておきながらすぐに佐藤とどっかにいなくなったり」と追及の手を緩めない。

「それだけじゃない」と田中は、何か言おうとした高橋を遮って、なおも言葉を続ける。「初めはお前が佐藤と一緒にいるためのだし

に使われてるのかと思ってたんだけどな、それだけじゃないだろ？」
と言って、一旦言葉を区切った。

「な、なんの話かな？」と高橋は白を切ろうとしている。聞き耳を立てている近藤は、思いもかけない展開に心臓が止まりそうだった。

田中はふうと小さなため息を1つついて、「俺は別に自惚れてるわけじゃないけど、さすがにそんな鈍感なつもりはないよ。あれだけあからさまにされたら、誰だって気づくだろ」と言った。近藤は、田中の次の言葉を聞きたくないと思っただが、その場から離れようと思っても足がすくんで動けなかった。

「お前、俺と近藤をくつつけようとしてるよな」

「ああ、聞いてしまった。」近藤は激しく後悔していた。田中が近藤の気持ちに気づいてしまった、そしてそのことを近藤が知ってしまったことで、もう近藤はこれまでのように友達という安全圏から田中に接することはできなくなってしまふ。恋人か、別れかの2択を否が応でも意識してしまふ。まだ心の準備もできていないのに。

「…」

しばらくの間、3人を沈黙が支配した。田中の視線は鋭く、高橋は白を切り通せるとは思えなかった。しかし、近藤がこの場にいない状態で、どこまで話してもいいものか、高橋は悩んでいた。

「そうだよ。…、近藤さん、田中くんのが好きなんだよ。」

4 5 物置部屋

近藤は、高橋の言葉に目を見張った。「とうとう言ってしまった。もうこれで後戻りはできない。近藤は全身から力が抜けていくのが分かった。しかし、その次の言葉に、近藤は更に大きく揺り動かされる。

「やっぱりそうか。…。でも、…、俺はその気持ちには応えられない」と田中はためらいながらもきっぱりと言いつつ切った。「俺は、勉強のできないやつとは付き合うつもりはないんだ。俺にとって今一番大切なのは受験だから、足を引つ張られたくない。」田中はそう言った。そして、さらに衝撃的な一言を付け加えた。「それに、…、俺はもともと、高橋さんが好きだったんだ。」

その後のことは近藤は聞いていなかった。ただ何も聞きたくないと思いを押し殺して、足音を立てないようにゆっくりと立ち去った。足は徐々に速くなり、実験室を通り過ぎ、廊下の突き当りにある物置部屋の中に入って、隠れるようにうずくまった。自分が一体どんな顔をしているのか、構っているような余裕はなく、ただ声を押して泣いていた。

考えなしに田中との距離を縮めてしまったことに対する後悔。田中からの好意を受けている高橋への嫉妬。勉強のできない自分への怒り。自らの口で思いを伝えることのできなかつた不甲斐なさ。もう2度と元の関係に戻ることでできない事実に対する心をえぐられるような切なさ。もはや自分が何を考えているのかも分からず、ただ涙だけが流れていた。

いつもより遅く来たにもかかわらず、一向に誰も現れない実験室

で、佐藤は1人不安に思っていた。「あれ？今日って休みの日だっけ？」いつまでも待っていては仕方ないと考えた佐藤は、実験室を出て他の人を探しに行くことにした。

ドアを出ると、佐藤はどこからかほんの微かに不思議な音がするのに気付いた。普通なら気づかない程度の音だったが、なぜか佐藤は気になって、何の音が分からないものの、その出所を確認しないとられない気持ちになってしまった。佐藤は、あたりをきよるきよるを見回して、音がする方向を探すように歩き始めた。

佐藤の足は廊下の突き当りの方に向かっていった。微かな音は徐々に大きくなって、廊下の突き当りに着く頃には静かにしていれば音の存在に気づく程度にまではつきりした。しかし、まだそれが何の音なのかは分からなかった。佐藤は、音のする方向を探して、物置部屋に入ってしまった。

部屋に入ると、音ははつきりと聞こえた。それは声を押し殺した泣き声だった。声の主を探して、なんとなく気後れして足音を立てないようにしながら、部屋の奥に進んでいくと、部屋の隅に近藤がうずくまっていた。

「近藤さん、どうしたの？」という佐藤の声に、近藤は顔を上げた。目は泣き腫らして真っ赤になっていて、頬を伝った涙は顎から滴り落ち、それを受けることになったスカートには涙の染みができていた。近藤は、なぜ佐藤がそこにいるのか分からないという表情で、焦点の合わない目を佐藤に向けていた。

佐藤は、思わず近藤の近くに寄って、正面にしゃがんだ。先日駅前でもらったポケットティッシュを探しだして、涙をふくために差し出して、「何があったの？」と尋ねたが、近藤はティッシュは受

け取ったものの、顔を横に振るのみで押し殺した涙を止めることはできず、問いに答えることもできなかつた。

4 6 嗚咽

近藤が黙ったままなので、佐藤もどうすることもできず、と
いって近藤をこのまま放っておく訳にもいかないので、近藤の正面
にしゃがんだまま、近藤の様子をただ観察していた。近藤は、胸に
あふれる感情を押し殺すのに精一杯で、一言でもしゃべると堰を切
って溢れ出しそうなのに耐えているようだった。

「何だろう？」佐藤は近藤を見つめている内に、近藤の肩口から
白い糸のようなものが伸びて、空中に揺らめいているのに気付いた。
「クモの巣？」佐藤は、何とはなしにその糸を取り除こうと手を伸
ばして糸を摘もうとした。

「ッ！」

佐藤の指先が、その白い糸に触れた瞬間、佐藤の目から大粒の涙
が溢れ出していた。心の中に、突然、強烈な感情が生まれて、それ
がどんな感情なのかを理解する暇もなく、心がその感情に支配され
て身動きがとれなくなってしまった。佐藤の思考は全面的に感情に
支配されて、わずかに残る理性は感情の暴走を抑えるのに必死で、
何が起きたのかを理解しようとする余裕すらなかった。

佐藤はただ、近藤の前にしゃがんだまま、嗚咽をあげながら涙を
流していた。

近藤は、佐藤の突然の涙に驚いて、一瞬、目を丸くして佐藤を見
つめたが、直後に襲った感情の高ぶりにこらえ切れなくなり、佐藤
の膝に手を置いて、やはり嗚咽をあげて泣き始めた。

しばらく2人はそのまま泣いていたが、やがて落ち着いて、佐藤は正気を取り戻した。そして、自分の身に何が起きたのかを徐々に理解していった。

「あれのことは、僕は知ってる。あれは、オーラだ」

白い糸はオーラだった。そして、佐藤はそれをずっと前から知っていた。ただ、それがそれであると気づいていなかったただけなのだ。オーラ操作の練習をしている時も、悪霊退治をしている時も、絵を描いている時も、いつもその存在を見ていた。見ていながら、気づいていなかった。

そして、オーラに触れたときに生まれた強烈な感情。あれは、近藤の感情だ。あの時近藤は、あふれる感情に心が押しつぶされそうになっていた。あれは、その感情そのものだ。

「そして、僕はやっぱり知ってた」

佐藤は何度も同じような経験をしてきていた。自分が失敗したときに親が落胆した時の感情がなぜか痛いほど分かった時も、美術の先生に自信作の絵をけなされて傷ついた時も、佐藤はオーラに触れていた。そして触れたところから相手の感情が流れこんできて、佐藤の心を支配したのだ。

佐藤は知っていたのだ。それでいて、気づいていなかったのだ。

そして、佐藤はもう一つ大切なことに気づいていなかったことに気づいてしまった。

「高橋さん」

47 早退

できることなら気づきたくなかった。しかし気づいてしまった。

佐藤と高橋が急接近するきっかけになったあの事件。佐藤が自己嫌悪の感情に支配されているときに、高橋が佐藤を抱きしめた、1学期終わりに起きた寮での出来事。あの時、高橋は佐藤のオーラに触れたのだ。

「あの時、高橋さんは、僕のことを心配したとか好きだったとかじゃなくて、ただ…。」

それ以上は佐藤は怖くて考えられなかった。ただ、高橋は流れこむ佐藤の感情に抗いきれず、無意識にああいうことをしてしまった、それだけのことでしかなかったのだとは。

「佐藤くん？」と、近藤は、涙が止まってからも茫然としている佐藤を見つめて問いかけた。近藤も、もう涙は止まっていた。佐藤と一緒に泣いてくれたせい、気持ちも落ち着いて周りを見る余裕を取り戻していた。

「佐藤くん！」と、近藤は、茫然としたまま返事がない佐藤に、再度強く声をかけた。「あ、ごめん。…、大丈夫だった？」と、近藤の声に我を取り戻した佐藤は、逆に近藤を心配して言った。もともとは、近藤が泣いているのを見て、佐藤の方が慰めようとしていたのだ。

「私はもう大丈夫。佐藤くんのお陰で気分が晴れたみたい」と近藤は言った。「ああ、強がってるな」と佐藤は理解した。推測した

のではなく、理解した。佐藤は確信を持って近藤がまだ強がっていることが分かっていた。

「今日は、もう帰ったほうがいいと思う。高橋さんにも田中くんにも会わないで」と佐藤は言った。高橋、田中という名前が出た時に、近藤の方はビクツと震えた。

「…、なんで？」と近藤は恐る恐る問いかけた。佐藤は、それに対して答える言葉を持っていなかったが、「なんとなく。僕も辛かったときには誰にも会いたくなかったから」とごまかした。それに納得したのか、近藤は「うん。そうだね」とだけ答えた。

正直に言っつて、近藤の心配は当然あるのだが、佐藤自身も高橋と会うことは辛かった。佐藤は実験室に近づかないようにしながら金子のもとに行くと、近藤の体調が思わしくないので佐藤が寮まで送っつて行っつて、そのまま今日は休みにすると伝えた。

「そう。近藤さん、大丈夫？」と金子が言っつたので、「向ここのソファアで休んでいます」と佐藤は話を合わせた。金子は「うん。じゃあ、無理しないでっつて伝えて。後、佐藤くんも顔色悪いみたいだから、無理しないようにしてね」と言っつた。佐藤は、思わぬ金子の言葉に「はい」とだけ答えて、その場を去っつた。

そのまま、佐藤と近藤は、バスと電車を乗り継いで寮に戻っつた。途中、2人はお互いに何か話そうとしたが、何を話せばいいかわからず、黙っつていた。2人ともこの夏休み、あまりにも研究所での時間が長かつつたので、それに関わらない話題を思いつくことができなかったのだ。

2人はバスに乗っつて寮まで戻っつてきて、「じゃあ、また明後日。」

研究所で」とだけ言って、別れた。

#47 早退（後書き）

第2章、終了です。

あとがき

このお話は、第3章で完結する予定でしたが、第2章が終了した時点で未完のまま終了とさせていただきまます。作者のわがままで申し訳ありません。

終了の理由は、手元には第3章の完結までのプロットもあるのですが、この話を完結まで進めるエネルギーを別の話の作成に振り向ける方がよいと考えたためです。今、この話の他に、転生！かぐや姫と平家物語を連載していますが、平家物語は時間的な問題で休止しています。私のキャパシティでは連載2本が限界のため、今の本数でいっぱいでした。

この連載は、私にとって実質的に処女作でしたが、これを通してWeb小説の書き方について多くの知見を得られました。その結果、もし今、同じ題材でこの連載をするならば、もっと全然違う形になるだろうと思うようになりました。

今から路線転換をして続けていくという方法も検討しましたが、これまでに得られた知見から、Web小説は出だしの数話で読者を惹きつけられないなら、どれだけ長く書いても読まれないという自信（？）があり、この連載はそれに失敗していると感じています。

プロットは今でも面白いと思いますが、残念ながらそのプロットを生かせるだけの連載にすることができなかったというのが、第2章まで書いた私の現時点での結論です。

少なからぬ読者様がいらっしやることはアクセスログから存じており、更新を楽しみにしていらっしやる方もいらっしやるとは思いま

すが、申し訳ありませんがそのような事情ですので、ご斟酌ください。

この連載は完結ではありませんので、完結にマークを付けないまま更新をストップしますが、再開の予定はありません。

よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6829v/>

サイコキネシス ～超能力の科学的研究～

2011年12月13日10時48分発行